

西南学院大学博物館研究紀要

第 12 号

— 論 文 —

戦争博物館をフィールドワークする

—タイ国カンチャナブリー県の「泰緬鉄道」関連博物館を中心に— 片山 隆裕 3

陸軍毒ガス兵器工場曾根製造所遺跡の現存遺構とその意義

—国内最重要級の戦争遺跡— 伊藤 慎二 19

＋—————＋—————＋

—研究ノート—

シエナ、パラッツォ・デル・マニフィコのカメラ・ベッラ装飾事業

—ジローラモ・ジェンガ作《ハンニバルから捕虜を解放するファビウス・マクシムスの息子》とヤコポ・リバンダの関係をめぐって— 森 結 67

西南学院のヴォーリス建築 宮川 由衣 79

＋—————＋—————＋

—資料紹介—

西南学院大学博物館所蔵「転切支丹類族矢野玄説母たね病死ニ付

葬礼見届之覚」 迫田ひなの 94(21)

西南学院大学博物館所蔵「文政十二己丑歳十二月五日切死丹執行

之者御仕置御高札之写」 鬼束 芽依 104(11)

2024年3月

 西南学院大学

Research Bulletin of Seinan Gakuin University Museum

Vol.12

MONOGRAPH

Doing Fieldwork on the War Museums in Thailand

Takahiro KATAYAMA

Archaeological Reconnaissance of the Japanese Imperial Army *Sone* Chemical Weapon
Factory Site: Most Important Class Asia-Pacific War Related Site in Japan

ITO, Shinji

† ————— † ————— †

RESEARCH REPORT

The Frescoes of the Camera Bella at Palazzo del Magnifico in Siena: "Son of Fabius
Maximus freeing prisoners from Hannibal" by Girolamo Genga and the reference to
Jacopo Ripanda.

Yui MORI

W. M. Vories & CO., Architects in Seinan Gakuin

Yui MIYAKAWA

† ————— † ————— †

RESEARCH on Museum Collections

The Report on the Funeral of a *Korobi-Kirishitan* (Fallen Christian) Descendant

Hinano SAKODA

Transcript of Bulletin board about The Arrest of Kirishitan (Christian) in December 5,
Bunsei 12 (1827)

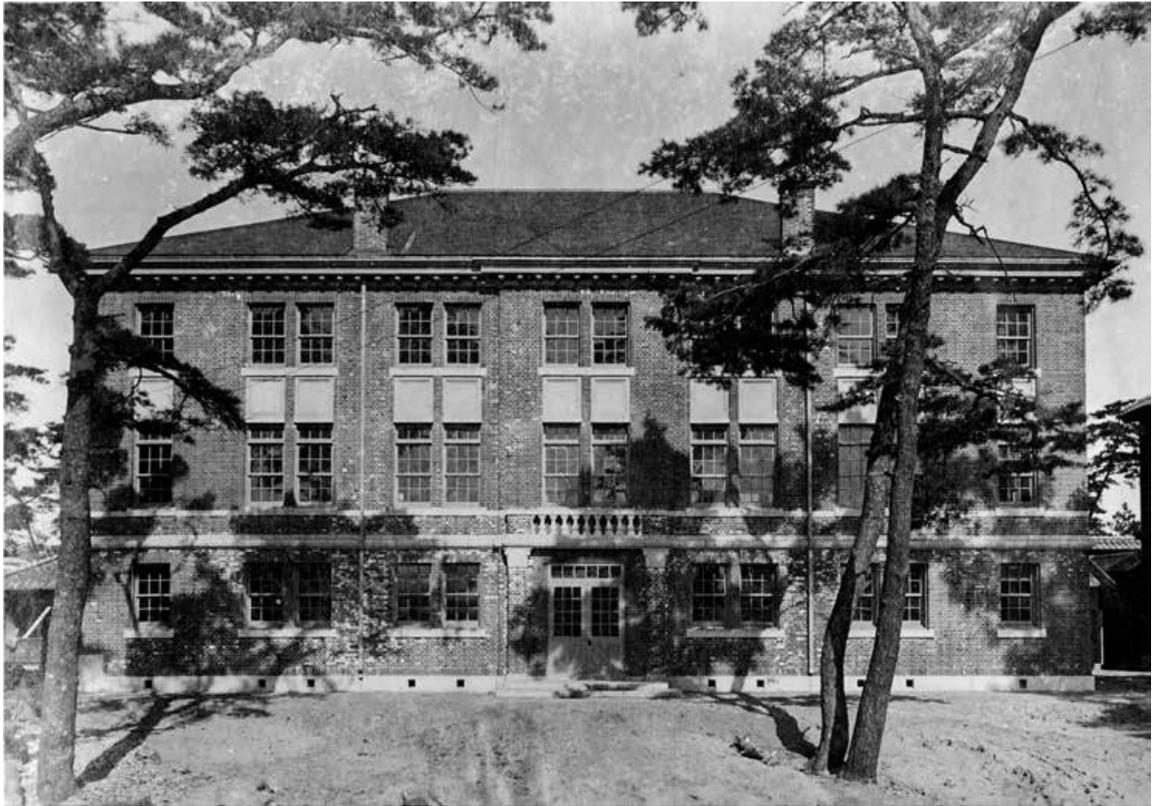
Mei ONITSUKA

March, 2024 edited by

SEINAN
GAKUIN UNIVERSITY

執 筆 要 項

1. 西南学院大学博物館（以下「博物館」という。）は、西南学院大学博物館研究紀要（以下「研究紀要」という。）を毎年1回刊行する。
2. 研究紀要の編集については、『西南学院大学博物館研究紀要』編集委員会（以下「編集委員会」という。）が、これに当る。
3. 編集委員会は、次の者をもって構成する。
 - (1)博物館長（委員長）
 - (2)博物館教員（学芸員）
 - (3)学芸研究員
 - (4)その他、館長が委嘱する者
4. 研究紀要に投稿できる者は、博物館に所属する教職員、学芸研究員、学芸調査員及び編集委員会が認めた者とする。
5. 研究紀要に投稿できる種別は、論文、研究ノート及び資料紹介とする。
6. 原稿字数の目安は、次のとおりとする。
 - (1)論文 16,000字程度
 - (2)研究ノート 8,000字程度
 - (3)資料紹介 特に定めない
7. 投稿希望者は、題名（英文タイトルを含む）及び種別を明示し、12月までに編集委員会宛に原稿を提出すること。
8. 提出原稿の体裁は、A4版、40字×30行とする。ただし、編集委員会において体裁を整えることがある。なお、形式は、縦書き・横書きを問わない。
9. 註は、末尾に通し番号で一括すること。
10. 図表・写真等は、掲載場所を指示すること。なお、論文への画像掲載に伴う利用申請等の手続は、すべて著者自身が行うものとする。
11. 編集委員会は、査読したうえで、投稿者に修正を求めたり、編集委員会の責任において、文言、体裁等を統一するために原稿に修正を加えたりすることがある。



(上) 完成した旧西南学院本館 (1921年竣工)

西南学院史資料センター所蔵

(下) 西南学院バプテスト大学鳥瞰図絵はがき

1937年、西南学院史資料センター所蔵

関連：研究ノート 宮川由衣「西南学院のヴォーリス建築」(79頁～92頁)

轉切支丹類族矢野玄説母たね病死二付葬礼見届之覚
葬礼見届之覚

一 在葬礼於申寺六月廿七日酉時申の
宗有法親宗沙弥佛具飾寺送之覚
一 申寺代僧寺原院并其寺に合符
宗原院相勤申の葬礼死骸同寺園に
在葬仕の葬礼寺僧法事並報之覚
御相替之覚
一 葬礼於所而之野玄は小僧女貝智
在所在浦吉浦長紙申の通私見
届相送之覚

寶曆十一年六月廿九日

尾田忠為
墨流長

田村源之丞殿

「転切支丹類族矢野玄説母たね病死二付葬礼見届之覚」

1761 (宝暦11) 年 / 日本 / 弘前藩 / 紙本墨書 / 西南学院大学博物館蔵

関連：資料紹介 迫田ひなの「西南学院大学博物館所蔵『転切支丹類族矢野玄説母たね病死二付葬礼見届之覚』(93頁～101頁)

戦争博物館をフィールドワークする —タイ国カンチャナブリー県の「泰緬鉄道」関連博物館を中心に—

片山 隆裕

1. はじめに—「戦争博物館」の意義

本稿は、タイ国カンチャナブリー県にあるアジア太平洋戦争期に建設された「泰緬鉄道」関連の戦争博物館および戦跡をフィールドワークすることを通じて、「戦争と平和」学習において博物館が私たちにどのような影響を与えているかについて考察することを目的としている。まず、第1章では戦争博物館の定義と意義を述べる。第2章では「泰緬鉄道」をめぐる歴史的事実について述べる。第3章では、主な高等学校日本史の教科書を参考に、泰緬鉄道が日本の歴史教育においてどの程度教えられているかを明らかにする。第4章では西南学院大学国際文化学部で実施している「戦争をフィールドワークする」という研修プログラムを紹介するとともに、そのプログラムの研修先のひとつであるタイ国カンチャナブリー県にある戦争博物館や主な戦跡の概要について紹介し、本研修に参加した大学生たちが戦争博物館や戦跡を見学して、何をどのように感じたのかについて記すことによって、戦争博物館に学ぶ意義について確認してみたい。

戦争博物館は戦争に関する集合的記憶を保存し、史実として戦争を後世に伝える役割を担ってきた¹。戦争博物館における戦争展示とは戦争やその被害についての文献・絵・写真・芸術品、軍隊・兵備についての資料、戦時下の生活に関する資料、戦跡などを展示することを指している²。こうした資料を展示する戦争博物館が必要とされる背景には、「戦争の悲惨さを語り継ぐことにより、戦争を否定し、平和を尊いと考える国民的感情が形成され……、同時に戦争が軍部の独裁により遂行され、拡大されて

いったことから、戦争を防ぐ意味でも、民主主義が大切であるとする考えが定着していった」ことがある³。

戦争博物館については、「軍隊・兵備・戦争・軍務など軍事に関する展示を行い、軍隊の発展に貢献するために開設され、展示方針として反戦平和的でない」とされる軍事博物館と「文献・絵・写真、芸術品等の展示物を体系的に収集し、その収集物から平和について歴史的な視野を与え、平和教育の目的に役立つように大衆に展示する」とされる平和博物館があるとされる⁴。加害と被害、戦勝と戦敗という視点で、日中戦争、太平洋戦争、欧州における第二次世界大戦とホロコースト、ベトナム戦争について、当事国の歴史博物館における戦争展示を比較した研究によれば、戦勝国、正しい戦争を行ったとされる国では、開戦から戦争終結までを通史的に展示し、自国の正当性を高めようとしている。一方で戦敗国、現代において非難される戦争を起した国では、戦争の経緯を展示するのを避け、一部が抜け落ちているかまたは全く展示が存在していないという⁵。また、このほか日本と韓国における第二次世界大戦の展示、その後の両国の戦争や軍事力の展示と現在の平和展示への取り組みを、展示に関わる人々の視点を取り入れて比較し、そこから戦争展示のあり方、そこから生み出される平和展示のあり方を展示に関わる人々の問題として分析し考察した研究⁶や、戦争博物館が戦争の悲惨さや恐ろしさを後世へと語り継ぐ役割と新たな視点から、日本における戦争博物館の研究史、論争、展示形態などについて論じた研究⁷なども存在する。

アジア太平洋戦争の敗戦を経験した私たち日本人

は、世界でも唯一の被爆国の一員として広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、沖縄県平和祈念館などを訪れたり、それぞれの地域にある戦争博物館、平和資料館などで戦争の悲惨さと平和の尊さについて学ぶ機会をもっている。ところが、こうした博物館・資料館で私たちが学ぶことは「被害者としての日本（人）」という側面が強い。しかしながら、どんな戦争にも被害者としての側面と加害者としての側面がある。中国、韓国、東南アジアなどアジア諸国の戦争博物館を訪れると、「加害者としての日本（人）」について意識させられる機会が多い。中学時代、高校時代などに学ぶ日本史においては「被害者」「加害者」の両側面が記述されているが、アジア諸国の戦争博物館で私たちが目にする「加害者としての日本（人）」という側面については限定的な記載にとどまっている場合が多い。

戦争の悲惨さを実感し、平和の尊さを希求する上で、こうした「被害と加害」の両面から戦争について考察することが必要となるが、それでは、戦争博物館は「被害者」としての側面だけでなく「加害者」としての側面を理解するためにどのような役割を担い、どのような意義を持っているのだろうか？アジア太平洋戦争中に旧日本軍がタイとビルマの間に敷設した「泰緬鉄道」およびそれに関連する戦争博物館および戦跡を例にとってみていくことにしよう。

2. 「泰緬鉄道」をめぐる展示と歴史

(1) 靖国神社「遊就館」における「泰緬鉄道」関連展示

日本で戦争をテーマにした博物館は、山形有朋を中心に幕末維新の官軍戦没者の遺品および古来の武器などを展示する施設として1882（明治15）年に開館した靖国神社の「遊就館」が最初のもものとされる⁸。「遊就館」では、1931（昭和6）年の満州事変から1937（昭和12）年の日中戦争、1941（昭和16）年のアジア太平洋戦争開戦を経て、1945（昭和20）年の敗戦までの十五年戦争について「追い込まれ開

戦に踏み切った避けられない戦争」という史観に基づいて展示が行われている。

「遊就館」の1階ホールには1両のC56蒸気機関車が展示されており、そのキャプションには次のように記載されている。「泰緬鉄道 昭和17年6月、日本軍はビルマ・インド進攻作戦の陸上補給を目的に、タイ（泰）のノンプラドックからビルマ（緬甸）のタンビザヤの最短距離415キロの区間で鉄道建設を開始した。工事は日本の国鉄規格を基本にして鉄道第五、第九聯隊を中心に連合軍捕虜や現地住民など約17万人が従事し、1年3ヶ月という驚異的な早さで昭和18年10月に開通した。この区間はかつてイギリス軍が建設を構想したが断念したもので、険しい地形と過酷な熱帯気候などの悪条件のもと、敷設は困難を極めた。」

「遊就館」を訪ねてこのキャプションを眼にしたとき、筆者は「泰緬鉄道」をめぐる事実が十分に記載されていないこと、一部の日本史教科書に記載されている内容と比較しても旧日本軍による連合軍捕虜や現地住民への対応に関する記述がみられないことに違和感を覚えた。「遊就館」は博物館法の適用外とはなっているが、先述したとおり日本で最初の軍事博物館であり⁹、戦争関連の展示が数多くなされているという意味で戦争に関する展示を行う「博物館」としての性格をもっており、ここを訪れる人たちに大きな影響を与えている。また、中国に限らず世界のメディアで取り上げられるのも「遊就館」の展示であるため、靖国神社参拝と相まって「遊就館」の展示が日本政府の歴史認識だと捉えられ、歴史認識が問われ続ける原因のひとつともなっている¹⁰。では、このキャプションに記されている「泰緬鉄道」をめぐる「真実」とはどのようなものであろうか？そして、その真実を伝える博物館の役割や意義とはどのようなものであろうか。

(2) 泰緬鉄道

泰緬鉄道は正式名称を「泰緬連接鉄道」という。第2次世界大戦中に日本軍がタイのノンプラドックとビルマのタンビュザヤとを結ぶために強硬敷設

した鉄道で、全長415kmに及ぶ。14か国（アジア各国、欧州、オセアニア、米国など）30万人超の人々（日本軍建設従事者約12500人、労働者→欧米人捕虜約62000人、アジア人労働者20数万人）が巻き込まれた建設計画で、「枕木ひとつに人ひとり」「レール1本に人ひとり」の命を犠牲にして作れたことから「Death Railway」（死の鉄道）として、国際的非難を浴びてきた。1942年6月28日に建設工事が開始され、1943年10月25日に開通した。

泰緬鉄道が世界的に知られるようになったのには、映画「戦場にかける橋」（The Bridge on the River Kwai 英米合作 1957年）の影響が大きい¹¹。この映画は、第2次世界大戦中の1943年のタイとビルマの国境付近にある連合軍捕虜収容所を舞台に、日本軍の捕虜となったイギリス軍兵士らと、彼らを強制的に泰緬鉄道建設に動員しようとする日本人大佐との対立と交流を通じ、極限状態における人間の尊厳と名誉、戦争の惨さを表現した戦争映画である。映画の中で演奏される「クワイ河マーチ」も世界各国で幅広く演奏される作品となっている。この映画の影響で、1970年頃から「本物の橋を見たい」「クワイ河を見たい」という観光客がカンチャナブリーを訪れるようになった。それとともに、現地の人たちがメークローン川の支流を「クワイ河」に名前を変えたり、メークローン川にかかる鉄橋を「戦場にかける橋」だと説明するようになった。

映画「戦場にかける橋」は、（1）日本軍による戦争捕虜の酷使、捕虜虐待が強調されている、（2）戦場の風景の中でアジア的なエキゾチシズムを強調しており、西洋人男性が東南アジア女性に対して抱く幻想がオリエンタリズムの視点で描かれている、などの問題があるとされる¹²。また、日本軍や鉄道隊の視点から見ると、（1）難所の多い鉄道工事を自分たちが記録的短期間でやり遂げたことへの誇りがあり、当時の日本の鉄道建設、橋梁建設技術は国際的に遜色なかったが、映画の中では著しく低く描かれている、（2）コリアンガードや東南アジアロームシャ（労働者）の実態が不明であり、そうした視点が欠落している、などの点も指摘されてい

る¹³。

1941（昭和16）年10月10日に大阪港を出発し、ベトナムのハイフォンに向かう老朽貨物船「甲南丸」には南方へ向かう鉄道第九聯隊の部隊とともに、第二鉄道監の服部暁太郎中将、鉄道参謀の広池俊雄中佐などが乗船していた。広池によれば、泰緬鉄道の建設プランはこの船上で生まれたという¹⁴。その後、1942年3月に日本軍の鉄道隊がタイ側に建設を打診、さらに同年5月には建設キャンプの設置交渉し、同年9月16日にはタイとの建設協定締結されたが、6月の時点で建設は始められていた。この鉄道建設にあたっては、日本軍が1942年2月15日に占領したシンガポールで捕虜にしたイギリス・インド兵捕虜とオーストラリア兵捕虜などが建設労働者として使役されたほか、オランダ兵捕虜、アメリカ兵捕虜を含めて、合計6万人余りの連合軍捕虜と現地のタイ（地元農民5千人）とビルマ（10万人）などからも労働者（ロームシャ）が集められた。連合軍捕虜の国籍の内訳は、イギリス人約30,000人、オーストラリア人約12,000人、オランダ人約18,000人、アメリカ人約700人、ニュージーランド人若干名であった。1943年には、タイ華僑の熟練工1万1600人、鉄道建設の最終段階の7月から8月末までにさらに1万3千人（現地に到着したのは半分以下の5600人）が集められ、さらに1943年4月から9月にかけてマラヤ人労働者78,000人、ジャワ人7,500人などが集められた。

周知のとおりタイには雨季があるが、1943年も4月頃から雨期に入り、ただでさえ過酷だった労働はさらに過酷を極めた。加えて、不足する食糧による栄養不足、マラリア、赤痢、コレラなどの伝染病、傷つく皮膚が化膿する熱帯性潰瘍などによって傷病者や死者が続出した。特に死亡率が高かったのは、ジャワ人労働者で45%、次いでマラヤ人労働者の38%、そして連合軍捕虜20%という具合だった¹⁵。こうした苦難の末に、1943年10月25日に泰緬鉄道は完成したわけである。

鉄道建設に関しては、日本軍による欧米人捕虜への過酷な労働使役や虐待行為がみられるが、どうし

てこのようなことが起きたのだろうか。それには、開戦前の1941年1月に当時の東条英機陸軍大臣によって全軍へ示達された「戦陣訓」が影響していると思われる。「戦陣訓」は、戦場での道義・戦意を高めるため、全陸軍に示達した訓諭である。中でも、「生きて虜囚の辱めを受けず」という一文がよく知られているが、これは「敵の捕虜になることは恥だ。捕虜になるくらいなら自決しろ。」という意味であり、これが戦争中における自決や玉砕の原因となったが、そうしたいわゆる「恥の文化」¹⁶を背景にもっていた日本軍が敵国の捕虜たちを酷く扱ったことは道理と言えよう。

しかしながら、当時の世界の常識はこれとはかなり異なっていた。当時、戦時国際法としての傷病者及び捕虜の待遇改善のための国際条約としてジュネーブ条約の存在があった。ジュネーブ条約は1864年に赤十字国際委員会（ICRC）が「戦争時の捕虜に対する扱いを人道的にする必要がある」として提唱し、締結されたものである。以後、1906年、1929年に改正されており、日本は1929年の条約に署名を行ったが、軍部や枢密院の反対により批准には至らなかった。この条約は、博愛主義、人道主義、生きるための人権擁護などを謳っている。特に、捕虜については、これを人道的に待遇しなければならないとされており、敵対する紛争当事国の権力内に陥ったときから、最終的に解放され、かつ、送還されるまでの間の取り扱いに関して、第3条約に詳細な規定がおかれている。具体的には、捕虜を抑留する、宿舍、食糧、被服、医療・衛生等に関する待遇、捕虜の金銭収入（俸給、労賃の支払、補償の請求等）、捕虜の通信・救済品等、捕虜に対する刑罰・懲戒罰の付与などについての規定がなされている。

このように戦争捕虜に対する取り扱いには、日本軍の「戦陣訓」と世界の常識であった「ジュネーブ条約」との間には大きな乖離があったわけであり、これが泰緬鉄道建設における捕虜への対応に大きな影響を与えたことは疑いのない事実である¹⁷。

3. 日本の歴史教育における「泰緬鉄道」— 高等学校「日本史」教科書から

筆者が泰緬鉄道建設をめぐる歴史的事実について知り、これを強く意識するようになったのは、短期間のフィールドワークのために1987年12月にタイのカンチャナブリー県を訪れたときであった。初めて訪れたJEATH戦争博物館¹⁸には、泰緬鉄道建設にあたって日本軍が連合軍捕虜たちに対して、いかにひどい仕打ちをしたかを物語る品物や写真や絵画がたくさん展示されていた。当時、博物館見学者の中で日本人は筆者1人だけで、ほかの見学者のほとんどは欧米人だった。欧米人見学者たちが展示物を見学しながら、そしてそのキャプションを読みながら日本人である私に視線を向ける度に心が傷んだ。

私たち日本人は、泰緬鉄道についてどれほど学ぶ機会を持っているのだろうか。そこで、私たちが学習する日本史の教科書に「泰緬鉄道」に関する記述がどの程度なされているのかについて、現在、出版されている主な高等学校の「日本史」の教科書で探ってみることにしたい。取り上げる日本史教科書は新課程の歴史総合に合わせた5冊と、従来の課程用の6冊の計11冊に加えて、図録1冊、用語集1冊である。これらのうち「泰緬鉄道」に関する記述があるものは、従来の日本史教科書のうちの3冊であった（表1参照）。

結論から述べると、日本史の教科書には「泰緬鉄道」に関する記述はほとんどなされていない。泰緬鉄道に関しては全く記載のない教科書も多く、仮に記載がある場合でも少しだけの記載にとどまっている。「泰緬鉄道」関連の記載がある教科書について見ていこう。

まず『詳説日本史B（改訂版）』（山川出版社2019年）には「東南アジアの占領地では、現地の文化や生活様式を無視して、日本語学習や天皇崇拜・神社参拝を強要し、タイとビルマを結ぶ泰緬鉄道の建設、土木作業や鉱山労働への強制動員も行われた。ことにシンガポールやマレーシアでは、日本軍が多数の中国系住民（華僑）を反日活動の容疑で殺害す

表1 日本の主な高校日本史教科書における「泰緬鉄道」関連の記述

教科書名	出版社	発行年	泰緬鉄道に関する記述	ページ	備考
詳説日本史研究	山川出版社	2018年	記載なし		
詳説日本史B	山川出版社	2019年	タイとビルマを結ぶ泰緬鉄道の建設、土木作業や鉱山労働への強制動員もおこなわれた。	364ページ	
新選日本史B	東京書籍	2020年	占領地の住民の徴用(1943, 5) タイとビルマを結ぶ泰緬鉄道の現場	227ページ	写真の説明
日本史B(新訂版)	実教出版	2021年	記載なし		
高校日本史B(新訂版)	実教出版	2021年	記載なし		
新日本史B(改訂版)	山川出版社	2021年	記載なし		
改訂版高校日本史B	山川出版社	2021年	記載なし		
歴史総合 近代から現代へ	山川出版社	2023年	記載なし		
日本史探求	東京書籍	2023年	記載なし		
詳説日本史探求	山川出版社	2023年	記載なし		
現代の歴史総合一みる・読み解く・考える	山川出版社	2023年	泰緬鉄道1943年、日本軍が完成させたタイとビルマを結ぶ鉄道。建設には連合国の捕虜や現地の人々が投入され、多くの犠牲者を出した。	133ページ	写真の説明 関連事項の説明*
改訂版日本史用語集	山川出版社	2019年	泰緬鉄道インド進攻作戦のため、タイ西部の山岳地帯を横断してビルマに通じるよう敷設された軍用鉄道。泰はタイ、緬はビルマのこと。1942年11月に建設命令が出され、多くの連合捕虜とアジア人労働者を酷使して行われ、多数の死者を出し、「死の鉄道」といわれた。	333ページ	
詳説日本史図録	山川出版社	2022年	記載なし		

るといふ事件が発生した。その結果、日本軍は仏印・フィリピンをはじめ各地で組織的な抗日運動に直面することになった。」(364ページ)と記述されている。

また、『日本史B(新訂版)』(実教出版2021年)には、「占領地住民の徴発(1943.5)」というタイトルで、東南アジアの労働者たちが鉄道建設に従事している写真が掲載されており(227ページ)、これに関連する文章として「日本軍は、……1942年2月にシンガポールを陥落させ、さらに開戦後およそ半年間でフィリピン・ジャワ・ビルマなどにかけての広大な地を占領して、国民を緒戦の勝利にわき立たせた」(226ページ)と書かれている。

さらに『詳説日本史図録(第9版)』(山川出版社2021年)には、東南アジアの労働者たちが泰緬鉄道の建設に従事している写真1枚とクワイ河鉄橋(カンチャナブリ県)の写真1枚が掲載されており、「泰緬鉄道―日本軍がインド侵攻作戦のために敷設した、タイ・ビルマ(現ミャンマー)間の鉄道。連

合軍捕虜6万8000人と東南アジア各地から集めた労働者30万人を動員。1年3カ月の建設工事で、多数の犠牲者を出した。」(29ページ 戦局の展開)とやや詳しい事実が記述されている。『改訂版日本史用語集(A・B共通)』(全国歴史教育研究協議会編2019年)の「泰緬鉄道」の項目を見ると、「インド進攻作戦のためにタイ西部の山岳地帯を横断してビルマに通じるよう敷設された軍用鉄道。泰はタイ、緬はビルマのこと。1942年11月に建設命令が出され、多くの連合軍捕虜とアジア人労働者を酷使して行われ、多数の死者を出し、「死の鉄道」といわれた。」(333ページ)とあり、連合軍捕虜とアジア人労働者に多数の犠牲者が出たことが記されている。

しかしながら、新課程の歴史総合教科書5冊および従来の課程用の教科書4冊には「泰緬鉄道」に関する記述はまったく見られない。これでは日本史を学習する生徒たちの記憶には残らないだろうし、何と言っても「真実」を「詳細」に伝えているものがない以上、私たち日本人のほとんどが「泰緬鉄道」

をめぐる歴史的事実についてほとんど知らないのも無理のないことである。

こうしたことから、「泰緬鉄道」をめぐる歴史的事実についてより多くの学生に知ってもらい、戦争の真実がどのようなものであるのかを認識してもらうために、以下で述べるようなプログラムの中で泰緬鉄道に関する戦争博物館をめぐる研修を実施することにした。

4. 戦争博物館をフィールドワークする

(1) 西南学院大学国際文化学部の教育推進プログラムー「戦争をフィールドワークする」

1) プログラムの概要

西南学院大学国際文化学部では、教育推進プログラムとして2017年から「戦争をフィールドワークするー第二次世界大戦が残したものを通して「平和」について考える」というプログラムを実施している¹⁹。本プログラムは、国際文化学部の学生たちが、国内・国外に残る近現代の戦争の関連跡地や戦争博物館を訪ねて、引率指導教員の指導の下、事前学習を行った上でグループでフィールドワークを行い、そうした戦争とわが国との関わりについて考えることによって今年で戦後78年が経過した現在でも戦争の悲惨さが世界各地に色濃く影を落としていることを再認識し、平和の大切さを実感する目的で行われている。

コロナ禍だった2020年度、2021年度を除いて、ポーランド（アウシュヴィッツ収容所）、アメリカ合衆国（ハワイ、サイパン島）、中国（吉林省、北京、南京）、タイ（カンチャナブリー、プラチュアブキリカン）、シンガポール・マレーシア、沖縄、広島などを訪れて研修を行ってきた実績がある²⁰。本プログラムは国際文化学部の学生を対象にしており、毎年、フィールドワーク実施グループを3班（2023年度は2班）組織し、班ごとに責任指導教員がついて、事前学習、フィールドワーク、事後学習を行うとともに、「戦争」をテーマにした講演会／シンポジウム等を開催し「平和」について考える機

表2 タイの博物館の管理者

管 理 者	数
国家機関（芸術局を除く）	243
芸術局	43
教育機関	332
民間企業	64
財団・NGO	53
コミュニティ	108
地方自治体	150
寺院	411
故人	176

（出所）白石 2022 p.58 より転載

会をもつこととしている。

2) タイの博物館

「泰緬鉄道」に関する戦争博物館をめぐる研修内容に入る前に、タイにおける博物館の状況を概観し、私たちが研修に訪れたカンチャナブリー県の戦争博物館の位置づけについて触れておきたい。

タイにおける博物館の始まりは1850年代にさかのぼることができるという。当時のラーマ4世（モンクット王 在位1851～1868年）が「プラパート・ピピッタパン」（Phraphat Phiphitthaphan）という名の部屋を作って美術品や骨董品を展示したことに起源をもつとされる。国立博物館は1934年のバンコク国立博物館に始まり、現在では全国に43の国立博物館がある。タイ文化省芸術局所管の独立行政法人シリントーン人類学研究センター（SAC）が独自に作成した博物館データベース（2020年12月15日）に掲載されている博物館は計1579館に及ぶ。プラパットソーン・ポースリトーン氏は、実際の館の性質から、博物館を①文化省芸術局が運営する国立博物館、②その他の国家機関が運営する博物館、③寺院や地域住民が運営するローカルな博物館の3つに分類しているが（Posrithong 2013）、後述するカンチャナブリー県の戦争展示博物館はすべて③に分類される²¹。（表2参照）

3) 「泰緬鉄道」に関する戦争博物館をめぐる研修 カンチャナブリー県はアジア太平洋戦争期に日本

軍が連合軍捕虜たちや現地の東南アジア労務者たちを使って作らせた「泰緬鉄道」に関わる戦争博物館や戦跡が幾つもあることで知られている。筆者は、2017年、2019年、2023年の3度、本学部の学生を引率してタイ国カンチャナブリー県を訪れ、当地の戦争博物館および戦跡を訪れて研修を行ったが、いずれの年も、JEATH戦争博物館、泰緬鉄道博物館（タイ・ビルマ鉄道センター）、ヘルファイアーパス・メモリアルなどの戦争博物館を訪れた。また、泰緬鉄道建設において犠牲になったイギリス、オランダ、オーストラリアなどの兵士たちが眠る連合軍墓地、旧日本陸軍通訳だった永瀬隆氏が1986年に建立したクワイ川平和寺院なども訪れ、現在もタイ国鉄が運営している「泰緬鉄道」（クワイ河鉄橋駅—ナムトゥック駅間）に乗車して、現地の過酷な気候の中での鉄道建設の過酷さなどを体験した。

2017年8月の研修には国際文化学部の学生2名が参加したが、このときにはKSB瀬戸内海放送の満田康弘氏に同行していただき3日間の研修を取材していただいた²²。2019年8月の研修には国際文化学部の学生2名が参加したが、このときにはカンチャナブリーに加えて、タイ南部のプラチュアブキリカン県も訪れ、アジア太平洋戦争の発端となった1941年12月8日における日本軍のマレー半島上陸作戦についても研修を行った。2023年8月の研修には国際文化学部の学生3名が参加、本学部の伊藤慎二教授（考古学）も同行され、実りある研修を実施することができた。

（2）タイ国カンチャナブリー県

カンチャナブリー県は首都バンコクの西方110kmに位置し、県の西隣はミャンマーと国境を接している。ミャンマーとの国境近くを流れるクウェー・ノイ川とクウェー・ヤイ川（総称クウェー川）が合流する場所でもある。県内にはエラワン国立公園やサイヨーク国立公園などを擁し、山と渓谷美あふれる風景明媚な自然の宝庫として知られ、西側をミャンマーと接する国境の街サンクラブリーには、仏教を熱心に信仰するモン族やカレン族の人々が昔ながら

の素朴な暮らしを営んでいる。数々の遺跡が発見され、先史時代からクメール帝国時代の歴史を伝えるカンチャナブリーの名を世界に知らしめたのは、先述のとおり第二次世界大戦にまつわる映画「戦場に架ける橋」である。戦争中に敷設された鉄道路線のほか、鉄橋付近には連合軍共同墓地などが点在し、戦争の悲惨さ・過酷さを今に伝えている²³。

（3）カンチャナブリー県の戦争博物館

私たちが「戦争をフィールドワークする」の研修プログラムで訪れたカンチャナブリー県の戦争博物館の概要について述べておこう。

◆JEATH戦争博物館（JEATH War Museum）

JEATH戦争博物館は、日本軍の指示により泰緬鉄道建設のために強制労働に従事させられた連合国の戦争捕虜に関する展示を行っている。入場料は50バーツ（約205円）²⁴。1977年、カンチャナブリー市内クウェー（クワイ）・ヤイ川とクウェー・ノイの合流地点にあるチャイチュムポン・チャナソクラーム寺院の住職が寺院の敷地内に開館した。「JEATH」は泰緬鉄道建設に従事した日本人（Japanese）、イギリス人（English）、オーストラリア人（Australian）／アメリカ人（American）、タイ人（Thai）、オランダ人（Holland）の頭文字から名づけられた。最初は「JEATH」ではなく「DEATH」という案だったが、タイの国民性に合わないということで「JEATH」と名付けられたという。この博物館は捕虜経験者や関係者の記憶や記録をもとにして戦争当時の連合軍捕虜収容所に似せたかたちで造られている。粗末な小屋は現地に自生する竹を用いて建てられ、寝起きをする床も竹で造られ、地面が透けて見える。館内には再現された泰緬鉄道建設時の連合軍捕虜たちの様子を知らせる写真や連合軍捕虜による絵画などが多数展示されている。また、爆撃の際に落とされた不発弾、当時使われていた銃や日本刀なども展示されている。また、館外の川添いには戦争中に日本陸軍通訳として現地に滞在し、戦後、現地において泰緬鉄道建設に

おいて亡くなった人々への慰霊とタイの子どもたちへの奨学金授与などの社会活動に身を投じた永瀬隆氏の銅像が建てられている。

◆泰緬鉄道博物館（タイ・ビルマ鉄道センター）
（Thai-Burma Railway Center）

約7000人の連合軍兵士が眠る連合軍共同墓地と細い道を隔てて建つ二階建ての白亜の建物が泰緬鉄道博物館（タイ・ビルマ鉄道センター）である。鉄道沿線に暮らす地元のタイ人たち、特に若い世代が鉄道への関心が低く、このままでは歴史的に意味のある泰緬鉄道をタイ国鉄が廃線にしてしまうのではないか、また時代とともに歴史的な事実が風化してしまうのではないかと危惧したオーストラリア人Rod Beattie氏が歴史的な事実をリサーチし、それを博物館というかたちで2003年に開館した私設博物館である。館内に入るとチケット売り場とミュージアムショップがあり、連合軍捕虜によって書かれた書物なども並んでいる。

館内はテーマ別に幾つかのギャラリーに分かれている。「ギャラリー1」は「泰緬鉄道建設へ」がテーマで、日本によるアジア太平洋地域への領土拡大に伴い、泰緬鉄道が建設されるに至った背景が展示されている。日本軍占領下における捕虜の輸送、ビルマへの侵攻とビルマへの地上補給路の確保などから建設が立案されたことがわかる。「ギャラリー2」は「鉄道計画と建設」で、鉄道建設当時の絵画、写真、鉄道跡から発掘された品々と復元された道具類が並んでいる。「ギャラリー3」は「泰緬鉄道沿線の地形」である。立体地形模型が使われ、クワイ川に沿った泰緬鉄道と捕虜収容所がイルミネーションによって表示されるようになっている。また、鉄道建設の映像記録も視聴できる。「ギャラリー4」は「収容所における生活」である。収容所では食料が不足し、移動の制限があり、死者が激増している様子がわかる。「ギャラリー5」は「医療」がテーマで蠟人形によって病気と医療の様子、急場しのぎの手術の様子などが展示されている。「ギャラリー6」は「代償」がテーマである。死者の総



写真1 JEATH戦争博物館（2017年）



写真2 クワイ川鉄橋と研修参加者（2017年）

数、死者への敬意、死亡した捕虜に対して示した日本軍の意外な敬意などがその内容である。「ギャラリー7」は「鉄道の完成」、「ギャラリー8」は「爆撃そして破壊」と続き、「ギャラリー9」では「戦後」がテーマとなっており、捕虜、労務者の本国送還、墓地探索、連合軍墓地建設、泰緬鉄道の終焉などの展示がある²⁵。泰緬鉄道の建設工事の際に亡くなった人々は、連合軍捕虜よりも東南アジア人労働者（ロームシャ）の方がはるかに多いなど歴史的記述や統計資料の展示もなされている。博物館建物正面には「DEATH RAILWAY MUSEUM AND RESEARCH CENTRE」つまり「死の鉄道博物館および研究センター」と掲示されている。

かつては、博物館内は基本的に観光客の写真撮影を禁止していたが、現在では写真撮影は許可されている。入館料は大人180バーツ（約738円）（2023年

8月現在)。

◆ヘルファイアー・パス・メモリアル (Hell Fire Pass Memorial)

ヘルファイアー・パス・メモリアルは、カンチャナブリー市内から約1時間45分ほど鉄道に乗って現在の終点となっているナムトック駅まで行き、そこからさらに車で走ること約15分のところにある。この史跡の保護と開発はオーストラリア人元戦争捕虜JG(トム)モリス氏によって提案された。JG(トム)モリスは第二次世界大戦中に泰緬鉄道建設に使役された戦争捕虜の一人だった。トムは1941年、17歳のときに志願兵として入隊し、その後、衛兵伍長まで務めた。トムは3年間戦争捕虜となり、泰緬鉄道の建設に使役された。その期間、トムは十か所におよぶ異なる捕虜収容キャンプに収容され、マラリアや赤痢に罹患した。戦後約40回、トムはタイを再訪してコンユウ切通し(ヘルファイアー・パス)を見つけようと決心した。1984年に周辺のジャングルにほとんど覆われていたヘルファイアー・パスを見つけ、鉄道建設中に亡くなったすべての人々を追悼するために、この意義のある敷地を保存したと考えた。

トムはヘルファイアー・パスを史跡として保存することをオーストラリア政府に提案した。当初、記念館の建設のために資金が提供されて1987年には記念館が正式し、この史跡へのアクセスが可能になった。1994年には歩行路と情報の表示を含むすべてのヘルファイアー・パス・メモリアルを建設するためにさらに資金が割り当てられた。その結果、1998年4月25日に現在のかたちとなり、毎年約8万人の訪問者があるという²⁶。

博物館には、旧日本軍の元で働かされた連合軍捕虜やアジア人労務者の凄惨を極めた労働・生活の様子に関する展示物が並べられている。「ヘルファイアー・パス」は「地獄の業火の道」という意味である。夜も行われる過酷な鉄道建設現場で焚かれる松明の日が「地獄の業火」のように見えたために、このように名付けられたという。博物館を出て、外



写真3 泰緬鉄道博物館(タイ・ビルマ鉄道センター)(2019年)



写真4 泰緬鉄道博物館(タイ・ビルマ鉄道センター)を見学する研修参加者

の見学路を歩いていくと、ところどころに線路の跡や朽ちた枕木が残っている。鉄道車両がようやく1両だけ通れるだけの狭い空間。両側は高さ10m程の垂直の断崖で、泰緬鉄道敷設の時、最難所「地獄の切り通し」であったことが分かる。

◆その他の戦争関連展示と戦跡など

・第二次世界大戦博物館(World War II Museum)

クワイ河鉄橋に隣接するように建てられている博物館であり、入り口には泰緬鉄道で使用された蒸気機関車が展示されている。白いビル1階から4階のフロアが博物館として公開されている。展示室には第二次世界大戦で使われた武器やクワイ河鉄橋をめぐる悲惨な状況が展示されている。

また、泰緬鉄道建設工事に使用された貨車、軍用の乗用車、オートバイなどとともに、クワイ河鉄橋

周辺での爆撃や工事の状況が実物大のジオラマで展示されている。

・ 連 合 軍 共 同 墓 地 (Kanjanaburi Allied War Cemety)

カンチャナブリー市内のメインストリート沿い、前出の泰緬鉄道博物館の向い側に連合軍共同墓地がある。ここには泰緬鉄道建設工事に駆り出されて死亡した連合軍の捕虜6982名の兵士が眠っている。イギリス兵、オランダ兵、オーストラリア兵が多く、その墓碑には氏名、享年、所属部隊などが刻まれているが、遺族が手向けたであろう花やメッセージが置かれていたりもする。

・ チョンカイ連合軍共同墓地 (The Chong-Kai War Cemetery)

カンチャナブリー市の郊外にある連合軍墓地。元捕虜自身の手で教会と共に設置されたこの墓地には、約1750人の連合軍兵士が眠っている。川岸から墓地までの約100mの道は、南国の色鮮やかな花が木漏れ陽を浴びる美しい散歩道になっている。

・ 日本軍建立の慰霊塔 (Memorial of the Death in Battle)

クワイ河鉄橋のすぐ近くに、日本軍鉄道隊が泰緬鉄道建設工事によって犠牲になった捕虜や徴用された人々の慰霊のために立てた慰霊碑がある。慰霊碑の側面には「この慰霊碑は、第二次世界大戦中泰緬鉄道建設に従事し亡くなられた連合軍並びに関係の方々の霊を慰めるために、昭和19年2月、当時の日本軍によって建てられたものであります。在タイ日本人有志は、毎年3月、亡くなられた方々の霊を慰めるためにここに集まり慰霊祭を行っております。」とタイ語、日本語、英語で記されている。

・ クワイ河平和寺院 (The River Kwai Peace Temple)

クワイ河鉄橋からほど近いところに、1986年に永瀬隆氏が平和への祈りを込めて建立したクワイ平和寺院がある。この寺院に安置されている仏像の頭部には永瀬隆夫妻の結婚指輪が納められている。



写真5 ヘルファイアerpas・メモリアル (2023年)



写真6 ヘルファイアerpasを見学する研修参加者たち (2023年)

(4) 研修に参加した大学生たちは「泰緬鉄道」をどうとらえ、どう感じたのか？

私たちは、カンチャナブリー県の戦争博物館やそのほかの戦跡・施設を訪れたわけだが、その研修に参加した大学生は博物館の戦争展示などを見学して何をどのように感じたのであろうか。研修後に学生たちから寄せられたレポート(下線部は筆者による)から抜粋してみよう。

「鉄道建設でとりわけ苛烈を極めた場所の一つに、ヘルファイアースパスがある。夜間の突貫工事で工事現場を照らすカンテラの灯りが、まるで地獄の業火のように見えたこととされることから「地獄の業火峠」とも呼ばれている。カンチャナブリーからナムトク²⁷へ開通させるのに、この岩山を十分な道具無しに、簡易的なハンマーや爆弾を爆発させて穴を開けることで切り通す必要があった。更に、「スピード」時代に入って完成を急ぐよう命令が下ったことで、作業時間は一日当たり最長で16時間から18時間に及び、食事も2回程しか与えられなかったそうだ²⁸。このような悪条件の中、病にかかって亡くなった捕虜も大勢いたそうだ。

私はこのフィールドワークで、ヘルファイアースパスも見学した。現在、岩山を切り開いて作ったヘルファイアースパスに至るまでには、博物館（ヘルファイアースパス・メモリアル）の横にある階段を下っていく。実際に自分の足で降りてみると、いかにこの岩山が高かったかを体感させられた。湿度が高く、蚊も多い。日本から初めてタイに上陸した私にとっては、蚊に刺されることですら恐怖に感じてしまった。しかし、捕虜たちは蚊が飛んでいることなど気にしている暇は無かっただろう。当時はマラリアだけではなく、栄養失調の状態になりながら、自分の身近で爆弾を爆発させたり手を痛めながらハンマーで穴を開けなければならなかったはずだ。現代を生きる私が、蚊だけを気にしてられる余裕を持てることは平和の中で生きている証拠だと思った。切り開かれた岩肌を見ると、ハンマーで穴を開け、爆弾を爆発させた跡が至る所に確認できた。そうした穴の跡が、私にはとても生々しく見えた。」（大学4年Iさん 2017年）

「現地（筆者注：タイ）へ向かうにあたっての事前学習や基礎となる知識は現地で見聞きし感じたことに対しての明確な背景知識となり、また問題意識を持って取り組んだことにより深い考察ができた。それと同時に事前学習での関連映像や写真で感じたものと、現地で実際に見たものとは異なるように感

じた。現地を訪れることによる現地の人々との出会いや発見、実際に第二次世界大戦の事実に触れることにより、より受動的に体感的に感じる事ができた。実際にヘルファイアースパスでは想像よりも切り開かれた岩は高く絶壁で、泰緬鉄道の壮絶さを見て取れた。連合軍の戦争墓地は想像だけでは当時の過酷さ、そしてどれだけの犠牲を生んだのかということを、現地を訪れた際に目にした実際の墓地の数を見ることによって第二次世界大戦の傷の大きさを改めて理解した。そして同じ日本人という出自という共同意識を持ち、当時の日本人が犯した罪の大きさを同じ立場として考える事ができた。」（大学2年Tさん 2017年）

「ヘルファイアースパス・メモリアルは展示の入り口が犠牲になった兵士の方の名前がずらっと書かれていて威圧感を感じました。小さな博物館なのでほかの見学者と距離が近く、欧米人の観光客の方とすれ違うたび視線を感じたような気がして居心地が悪かったです。ヘルファイアースパスに実際に足を踏み入れると、全体のほんの一部を歩いただけですがそれでも長く感じて、しかも今の保存状態はだいぶ整備されて歩きやすくなっているけれどもそれでも疲れてしまうような環境だったのでよくこれを1年あまりで完成させたなと思いました、裏を返せばどれだけ無理難題を押し付けて作らせたのだろうと労働の過酷さを感じました。

ヘルファイアースパスは1970年代にオーストラリアの元捕虜の生存者の方がジャングルに埋もれて忘れ去られていたのを発見して保存に至ったそうですが、体験者が生きていて、想像を絶するようなことがあっても人間は案外あっさり忘れてしまうものなのだとそこに少し恐怖を感じました。歴史を正しく伝えていく、忘れないようにしていくことの難しさを感じました。」（大学2年Sさん 2019年）

「ヘルファイアースメモリアルではたくさんの外国人観光客と一緒に一つ一つのパネルを見て、学びを深めていくのと同時に戦争の加害者としての意識が

強くなったのと同時に日本人が私たちのグループし
かいなかったため、後ろから誰かに刺されてしまう
のではないだろうかという恐怖も感じた。初めて欧
米人が被害者となっている記録を目にして率直に恐
怖を感じた。いつも戦争の資料館と言えば日本人が
苦しんでいる記録ばかり見せられ、終戦記念日と言
えば思い出すのは原爆の被害者としての意識ばかり
だった。しかし、初めて海外で日本人が加害者側の
戦争の記録と、何の日本人びいきもない、淡々とお
ぞましい事実が書かれている言葉や写真、映像に足
がひるんだ。さらに博物館で見る内容は私が全く知
らないことばかりで、自分の無知を恥じた。

その後、ヘルファイアerpasを実際に歩き、一番
印象に残ったのは切り開かれた高い岩山である。岩
山に上って上から見た景色にとっても驚いた。あの過
酷な労働環境で、これだけ高い岩山を人力で切り開
かせたとはとても考えられなかった。砂利道から垣
間見える当時の線路を歩き、この線路の上でどれだ
けの死者を出したのだろうかと思いをはせながら一
歩一歩歩いた。やはり日本人の見学者が私たちのグ
ループだけだったのがとても今の日本の現状を鮮明
に表しているなど感じた。ほとんどの日本人は泰緬
鉄道の事実を知らないまま、もしタイに行ったとし
ても観光で終わり、ましてやこの戦争の負の遺産に
訪れることもないのだろうと感じたとともに研修の
意義を深く体感した。」(大学2年Kさん 2023年)

「ヘルファイアerpas・メモリアルには加害者の
日本人として入るのは少し怖かった。(博物館に展
示してあった) 1日15時間の労働で米300g程度と
塩しかもらえないのはひどすぎる。日本軍の酷使に
よる捕虜や現地の人たちの死者数が約80,000人と
いうのを見て鳥肌がたった。泰緬鉄道から見た岩肌を
今度は(ヘルファイアerpasでは)自らの手で触る
ことができ、先ほどよりもいっそう当時の労働者の
必死さを感じた。大変暑く虫も非常に多かった。こ
の中で作業を強いられていた人々の気持ちを考えると
本当に切ない。」(大学1年Yくん 2023年)

「泰緬鉄道博物館(タイ・ビルマ鉄道センター)
は全面英語ですべて完璧には理解できませんでしたが、
どのようなことを兵士の方はさせられていたのか、
また戦後被害にあった兵士たちがどうしてきたか
が展示されているようでした。キャプションが理解
できなくても遺留品や模型、ジオラマなどで理解
することのできるいい展示方法だったと思います。」
(大学2年Sさん 2019年)

「(カンチャナブリーの連合軍墓地に)隣接してい
た泰緬鉄道博物館(タイ・ビルマ鉄道センター)に
足を運び、まず初めに「DEATH RAILWAY
MUSEUM」と建物に大きな文字で書かれていた博
物館の名前のインパクトに圧倒させられた。博物館
のなかには、泰緬鉄道建設時の実際の写真やビデオ、
模型、兵士たちの遺物等、様々な形で戦争の記憶
を私たちに痛いほど鮮明に伝えた。当時の記録が
あまりにも衝撃的なものであり、次第に俯いていく
顔と、重くなる気持ちと足、誰も声を発しようとし
なかった、あの時に感じた思いや見たもの全てが深
く私の心に刻まれた。特に説明文に何回も繰り返し
書かれているJapaneseという言葉に何回もはっと
させられ、日本人であることの恐怖を始めて感じた
のと同時に日本人としてここに足を運ぶことの重要
性を感じた。」(大学2年Kさん 2023年)

「泰緬戦争博物館(タイ・ビルマ鉄道センター)
でも欧米人の方々が見学されており、彼らが
「Japanese」という単語を発するだけでドキっとし
てしまう。さまざまな模型が展示されており、最も
印象に残ったのは衛生環境が大変ひどい場所で過ご
した労働者の足だ。本当に悲惨だった。今でも想像
しただけで胸が痛い。」(大学1年Yくん 2023年)

「JEATH戦争博物館は当時兵士が寝泊まりしてい
た小屋のような施設(筆者注:捕虜収容所を模した
造り)でなかなか年季の入った展示でした。泰緬鉄
道の当時の写真やいかに日本人がひどい所業をした
のか絵で展示してあり、思わず顔をしかめてしまう

ような描写もありました。展示スペースを出ると端のほうに長年泰緬鉄道の贖罪に努めてこられた永瀬隆さんの像とモニュメントが設置されていましたが、ほかの観光客の方は見向きもしないというか、何の像か理解されていないから興味がないようで誰も見ていなかったの、日本人を許してほしいとは思わないけれども永瀬さんの活動は欧米の方にも知ってほしいと少し残念に思いました。展示に永瀬さんの活動について触れるようなものを加えてもらえたらいいなと思います。」(大学2年Sさん 2019年)

「JEATH戦争博物館には泰緬鉄道を建設している当時の写真や絵画が主に展示されていた。労働者たちが、連合軍の攻撃・日本軍の見張り・空腹・洪水・皮膚や目の伝染病などに苦しんでいる様子が繊細に描かれており、見るたびに苦しくなった」(大学1年Yくん 2023年)

・その他の戦争展示博物館と戦跡

「第二次世界大戦博物館は中国の富豪が作ったらしくなかなかカオスな空間でした。タイに中国の経済が影響力を持っているのだなと思いました。とても勉強になったけれども、欧米の方が中心になって作られているので、アジア人の「労務者」に関する記述があまりないことが気になりました。兵士と同じように過酷な労働を強いられ命を落としてきた同士としてもっとそちらにフォーカスした展示や博物館があればいいなと思います。クワイ河鉄橋を向こう岸まで渡りましたが、対岸には戦争をレジャー化して観光地にしていて受け入れがたい歴史も利用して観光に頼らないといけない現状を感じました。日本兵が敵として演出されているけれどもいまここにいる日本人に特別注意を払う現地の方もいなくて、完全にレジャー化していました。日本で同じことをしたら不謹慎とかで炎上しそうですが、お国柄の違いを感じました。」(大学2年Sさん 2019年)

「泰緬鉄道の犠牲となった連合軍の捕虜の人々はカ

ンチャナブリーとチョンカイの戦争墓地に埋葬された。カンチャナブリーの墓地には約6000~7000人の連合軍捕虜が埋葬されている。チョンカイの墓地は元々捕虜の病院の跡地であり、その地で労働による怪我やマラリアにより多くの人々が亡くなったため、その場所を墓地とした。チョンカイの墓地には約1700人の犠牲者の人々が埋葬されている。

石碑には一つ一つに名前、年齢、誕生日、所属部隊が刻まれていた。また、多くの石碑には家族や恋人によるメッセージが添えられていた。戦争墓地では、現地の人々が花や土の管理をしており、埋葬された人々を悼む気持ちがうかがえた。

現地を訪れた際に、一つの墓石の前にたたずんだイギリス人男性(29歳)がおり、その男性は第二次世界大戦により犠牲となった祖父の墓参りに来ている。長時間墓石に話しかけ、花を添え、犠牲者に対する思いの強さを感じた。」(大学2年Tさん 2017年)

「クワイ河平和寺院は、たった一人で戦後処理を行った日本人の永瀬隆と妻である永瀬佳子の意志によって31年前に建設されたものである。これは、日本人がカンチャナブリーを訪れた際に、“日本人である”という出自を超えて第二次世界大戦に対しての祈りをささげられるようにと造られたものである。建物自体は当時(修復)工事中であり、少し老朽した様相であったが、訪れた際にはすでに多くの線香があげられており、供え物があった。そして寺院内は綺麗に整備されていた。仏頭には永瀬夫妻の結婚指輪が埋め込まれており、それからは永瀬夫妻の寺院建設にあたっての強い思いや第二次世界大戦での犠牲者に対する追悼の意が込められているように感じた。また、実際に現地を訪れて、仏像の膝元に千羽鶴が置いてあった。このような日本文化を第二次世界大戦の跡地で発見したことからは、永瀬隆の戦後補償の功績の偉大さを感じられた。」(大学2年Tさん 2017年)

5. おわりに

タイ国カンチャナブリー県にある戦争博物館を訪れて毎回思うのは日本人訪問者がいないことである。初めて、JEATH戦争博物館を訪れた1987年12月から数えて幾度となくこの地の戦争博物館を訪れているが、ほとんど日本人には会ったことがない。それとは反対に、タイ人から「ファラン」と呼ばれる欧米人の訪問者が多いのが目立つ。そして、その欧米人訪問者たちの眼は、日本人である私たちに向けられることも少なくない。その瞳にはときに敵意や憎しみが見られる。

かつてヘルファイアー・パスを訪れたとき、かつての連合軍捕虜たちに出くわした体験を、KSB瀬戸内海放送の満田康弘氏は、自著で「わずか数メートル離れたところに立った元捕虜らの冷たい視線にあって、息もできなかつた。こちらを睨みつけ、突然その憎しみが私を締め付けてきた。息もできなかつたよ。……、(元捕虜の)レインの目は火のごとく怒り、拳をにぎりしめていた。」と述懐している²⁹。先の大学生たちの体験記にある、欧米人観光客たちの口から「ジャパニーズ」という言葉が発せられたときに大学生たちが感じた戦慄や恐怖もこれに近いものだった。

日本は敗戦国であり、世界で唯一の被爆国である。私たちは「ヒロシマ」「ナガサキ」で起きた惨状に多くのことを学び、戦争の悲惨さを実感する。しかし、戦争中に日本軍が各地で行ったことを目にし耳にし、そこで被害を受けた人々の憎しみにあふれた視線に遭遇することは稀である。「泰緬鉄道」をめぐる起きたことの詳細について歴史の教科書で学ぶこともほとんどない。

それだけに、本稿で紹介したようにタイ国カンチャナブリー県の戦争博物館を見学し、そこから日本国内ではあまり語られない、そして書かれてこなかった歴史的事実を学ぶ意義は大きい。先述したように、研修参加学生たちから発せられる「過酷」「悲惨」「衝撃」「恐怖」といった感情は、机上で書物を読んで感じる以上に博物館の展示から学び感じ

ることが大きいからであり、戦争当時の臨場感に近いものを体験し体感できるからである。

今回は触れなかったが「戦争をフィールドワークする」のプログラムで3人の学生とともにシンガポールにある幾つもの戦争博物館を訪れたときに感じた戦慄、日本の直接関係がないように思われがちなベトナム戦争やカンボジア内戦に関する戦争博物館を訪れたときの胸が苦しくなるような思い、こうした戦慄や思いを感じることも戦争博物館での「学び」をより一層深いものにしてくれる。「戦争博物館をフィールドワークする」ことによって得られる教育的効果は当初研修プログラムを立ち上げた私たちの想像を超えるものだった。研修に参加した学生が自分たちが体験したことを授業その他の機会に、ほかの学生たちに伝えていく機会も準備しているが、こうした機会をとらえて「戦争の悲惨さ」と「平和の尊さ」を伝えていく努力を続けていきたい。

<註>

¹ 展示学事典 2020 p.444

² 大平 2022 p.1

³ 山辺 2004

⁴ 村上 2003 なお、本稿で取り上げるカンチャナブリー県の戦争博物館は「平和博物館」としての役割を担う部分が多いが、「軍事博物館」との明確な線引きが難しいため、本稿では両者の概念を同時に含むものとして「戦争博物館」という用語を用いることとする。

⁵ 例外的にドイツでは、自国の戦争犯罪を認め、通史を展示しているが、日本においては、国立博物館において戦争通史の展示は見られないという(細川 2007)

⁶ 福西 2011

⁷ 大参 前掲書

⁸ 『展示学事典』 p.444

⁹ 『遊就館』ホームページのトップページの「貴重な史資料が真実を語り継ぐ」より

¹⁰ 細川 前掲書

¹¹ ただしこの映画はスリランカで撮影が行われたこと、虚構とオリエンタリズムに覆われていることなど真実を伝えるものではない。詳しくは、永瀬隆 1986を参照。

¹² 小菅信子、朴 裕河、根本敬服「鼎談 泰緬鉄道と東南アジア」ジャック・チョーカー 2008 所収

¹³ 前掲書

¹⁴ 吉川 2011 p.3

¹⁵ 後述する泰緬鉄道博物館(タイ・ビルマ鉄道センター)の展示資料による。

¹⁶ ベネディクト 1946(長谷川松治訳)

¹⁷ 本節の「泰緬鉄道」に関する記述については、片山 2019 も参照している。

¹⁸ JEATH戦争博物館の「JEATH」とは戦争に関わった日

- 本 (Japan)、英国 (England)、オーストラリア／アメリカ (Australia, America)、タイ (Thailand)、オランダ (Holland) の頭文字をとって名づけられた。
- 19 国際文化学部では2014年度、2015年度の2年に渡って「戦争を歩く」「戦争を記憶する」というテーマで一般市民向けの公開講座を企画した(コーディネーターはいずれも中島和男教授(当時))。この公開講座をきっかけとして2017年から「戦争をフィールドワークする」という研修プログラムを実施するとともに、「文化のダイナミズムB」という授業において「戦争を歩く、戦争を記憶する」というテーマのオムニバス形式の授業も実施し、これらを連携させることによって「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」について認識を新たにする教育を実施している。
- 20 本学部における授業(文化のダイナミズムA—戦争を歩く、戦争を記憶する)とも連携して成果をあげてきた。
- 21 白石 2022 p.85-9
- 22 このときの研修の様子は「大学生が見た泰緬鉄道の歴史」(9分15秒)としてKSB瀬戸内海放送で放映された(2017年9月)。また、現在もyoutubeで視聴することができる。
- 23 タイ国政府観光庁のホームページ「カンチャナブリー」の項を参照した。
- 24 タイパーツと日本円の為替レート(2023年12月24日現在)、1パーツ=約4.1円で計算した。
- 25 中村 2012 p.88を参照した。
- 26 当館のパンフレットを参考に筆者がまとめた。
- 27 現在、タイ国鉄が運営している終点の駅がナムトゥク駅である。
- 28 以下、下線は筆者による。
- 29 満田 2011 p.72
- <参考文献>
- 内海愛子、G.マコーマック、H.ネルソン『泰緬鉄道と日本の戦争責任—捕虜とローム者と朝鮮人と』明石書店1994年
- 大参翔平「日本の戦争展示博物館の歴史と諸問題の整理(明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻)2022年
- 柿崎一郎『タイ鉄道と日本軍—鉄道の戦時動員の実際1941~1945年』京都大学学術出版会 2018年
- 片山隆裕 2019「DEATH RAILWAY(泰緬鉄道)—「歴史」を正しく学び、紡ぎ、伝えていくために」中島和男・片山隆裕(編著)『戦争を歩く、戦争を記憶する』朝日出版社 2019年 pp.44-62
- 川口幸也(編)『展示の政治学』水声社 2009年
- キングウィック, C.『戦場にかける橋—泰緬鉄道の栄光と悲劇』(服部實訳)サンケイ新聞社出版局 1975年
- 白石華子「タイの博物館と学芸員」山形真理子・徳澤啓一(編)『アジアの博物館と人材教育—東南アジアと日中韓の現状と展望』雄山閣 2022年 pp.85-103
- チョーカー, J.『歴史和解と泰緬鉄道—英国人捕虜が描いた収容所の真実』(根本尚美訳)朝日新聞出版 2008年
- 永瀬 隆『「戦場にかける橋」のウソと真実』岩波ブックレット 1986年
- 中村 浩『ぶらりあるき バンコクの博物館』芙蓉書房出版 2012年
- 日本展示学会(編)『展示学事典』丸善出版 2020年
- 二松慶彦『三仏峠を越えて—泰緬鉄道を語る』啓文社 1985年
- 福西加代子「戦争・平和を展示する—日本と韓国の博物館に関する比較研究」(日本文化人類学会第45回研究大会) 2011年
- ベネディクト, R. (1946)『菊と刀』(長谷川松治訳)講談社学術文庫 2005年
- ・細川幸太郎「戦争展示の意味—博物館の国際比較」(修士論文)(東京大学学術機関リポジトリ) 2007年
- ・満田康弘『クワイ河に虹をかけた男—元陸軍通訳永瀬隆の戦後』梨の木舎 2011年
- ・村上登司文 2003「平和博物館と軍事博物館の比較—比較社会的考察」『広島平和科学』広島平和科学研究センター pp.123-143
- ・山辺昌彦「日本の平和博物館の到達点と課題」歴史教育者協議会編『平和博物館・戦争資料館ガイドブック』青木書店 2004年
- ・吉川利治『泰緬鉄道—機密文書が明かすアジア太平洋戦争』雄山閣 2011年

片山 隆裕 (かたやま たかひろ)

国際文化学部教授(博物館館長)

陸軍毒ガス兵器工場曾根製造所遺跡の現存遺構とその意義 —国内最重要級の戦争遺跡—

伊藤 慎二

はじめに

日本国内にはさまざまな近現代の戦争遺跡が存在する。しかし、戦時中の兵器工場建物主要部分が現存する例はかなり稀である。その希少な例が福岡県北九州市にある。北九州市小倉南区下吉田1丁目1番に所在する陸上自衛隊小倉駐屯地曾根訓練場は、旧日本陸軍の毒ガス兵器工場である東京第二陸軍造兵廠曾根製造所（以下、曾根製造所と略す）の敷地をそのまま継承している（第1・2図）。1931（昭和6）年の満州事変（九一八事変）にはじまるアジア太平洋戦争（十五年戦争）期（瀨瀬 2007）の主要時期に稼働していた兵器工場遺跡としては、国内でも稀有な現存例である。敷地の全域とともに現存する主要建物遺構群の規模と保存状態の良好さは、特筆に値する。アジア太平洋戦争の特に中国大陸における戦闘の本質的特徴を体現する歴史的価値の観点から、日本国内の現存事例のなかでも傑出して最重要級の戦争遺跡といえる。

戦争遺跡としての曾根製造所跡の各遺構については、通常非公開の自衛隊施設内にあるため、あまり明らかでない部分が多い。筆者は、今回同遺跡敷地を管轄する陸上自衛隊小倉駐屯地の許可を得て、2023年5月に現存遺構を直接観察することができた。本稿ではこの曾根製造所遺跡の現存遺構の特徴を概観し、その意義を考察する。

I. 曾根製造所と日本軍の毒ガス戦

(1) 設立の経緯と当時の状況

1933（昭和8）年7月19日に、福岡県企救郡曾根

村に設置された陸軍造兵廠火工廠曾根派出所（所長：渡辺望少佐）が、曾根製造所の原型である。広島県^{ただのうみ}忠海^{おおくのしま}製造所（大久野島）で製造された毒ガスの一部をここで砲弾・爆弾に填実（充填）するためである。しかし、1933年10月には稼働を休止している。本格的な稼働は、1937（昭和12）年の日中全面戦争開始後であった（吉見 2004：40頁、長谷川編 1969：188頁）。主要建物の建設作業は、1936（昭和11）年頃まで継続していたとされる（岡田 2001：18頁）。1937年には陸軍造兵廠火工廠曾根兵器製造所（所長：門馬啓吾大佐）、そして1940（昭和15）年には東京第二陸軍造兵廠曾根製造所に改称し、1945（昭和20）年の敗戦まで忠海製造所から運ばれた毒ガスを砲弾・投下弾に填実した（吉見 2004：147頁）。忠海から曾根までの毒ガスの輸送は、おもに鉄道が使われたが、船での輸送もあったとされる。下曾根駅まで運ばれた毒ガスを入れた「ドラム缶」と「ガラス容器」は、荷馬車により曾根製造所まで運搬した。その運搬途中の荷崩れなどでガスが漏出し、人馬に被害が出る事故も起きた（工藤 1997：214-215頁）。また、毒ガスを填実する砲弾は、時期によって小倉陸軍造兵廠製と大阪砲兵工廠製の違いがあったようである（工藤 1997：231頁、尾崎 1997：149頁、岡田 2001：24頁）。火薬は、京都の陸軍宇治火薬製造所製のものが使用されたという（工藤 1997：204頁）。また、陸軍岩鼻火薬製造所（群馬県）にも工員が出張していた（岡田 2001：20-21頁）。

曾根製造所で1938（昭和13）年～1944（昭和19）年までに填実して完成した各種毒ガス弾は、合計1612626発であったとされる（吉見 2004：153-156



a. 現在の曾根製造所とその周辺 a. 曾根製造所、b. 綿都美神社、c. 吉田東公園東奥の陸軍標柱、d. 下吉田古墳群、e. 曾根飛行場跡
 ※国土地理院地図を基に改変



b. 1948年4月6日の曾根製造所とその周辺・米軍撮影航空写真 ※国土地理院USA-R238-No. 2-23

第1図 曾根製造所遺跡とその周辺

頁)。その内訳は、各種「あか弾」1121940発、各種「きい弾」475966発、投下「あか弾」8035発、投下「きい」弾6685発である(松野 2005: 87頁)。そして、曾根製造所以前に、忠海兵器製造所で製造された投下「みどり弾」33700発やその他毒ガス弾427297発を加えると、陸軍の毒ガス弾生産総量は2074000発とされる(吉見 2004: 153-156頁)。これらのうち、敗戦時に忠海・曾根周辺に残存していた毒ガス弾は90000発のため、その大部分が実戦用に国内外各地に配備済だったという(松野 2005: 87頁)(註1)。

日本軍の毒ガス兵器使用は、対アメリカ軍は禁止され、対イギリス連邦軍には抑制的で、まともな防衛装備などがなかった中国軍民に対してのみ多量であった。その被害者数の大まかな最大推計として、中国軍民94000人以上が中毒被害を受け、10000人以上が死亡したとする数値が紹介されている(吉見 2004: 293-294頁)。

(2) 工員健康被害

1940(昭和15)年頃の曾根製造所には、「正規工員」・「徴用工員」・事務系工員・女子挺身隊員・動員学徒など合わせて約1200人が就業していた(工藤 1997: 206頁)。1944(昭和19)年からは、九州工学校・折尾高等女学校・曾根国民学校の学徒・学童も製造所内の作業に動員された(岡田 2001: 26-28頁)。毒ガス兵器製造の各工室には100人前後の工員が配置され、昼間二交代で作業が行われていたが、1941(昭和16)年以降は昼夜二交代の12時間労働の増産体制になったという。毒ガス弾・毒ガス筒の製造工程の工員は、防毒マスクとゴム製のフード付防毒衣・ズボン型の下衣・長靴・手袋という装備で、1時間の内40分間が作業で、残り20分間が休憩時間であった(工藤 1997: 216頁)。そして、安全対策が軽視され形骸化していた状況で、多くの事故が生じていた(岡田 2001、尾崎 1997、行武編 2012)。

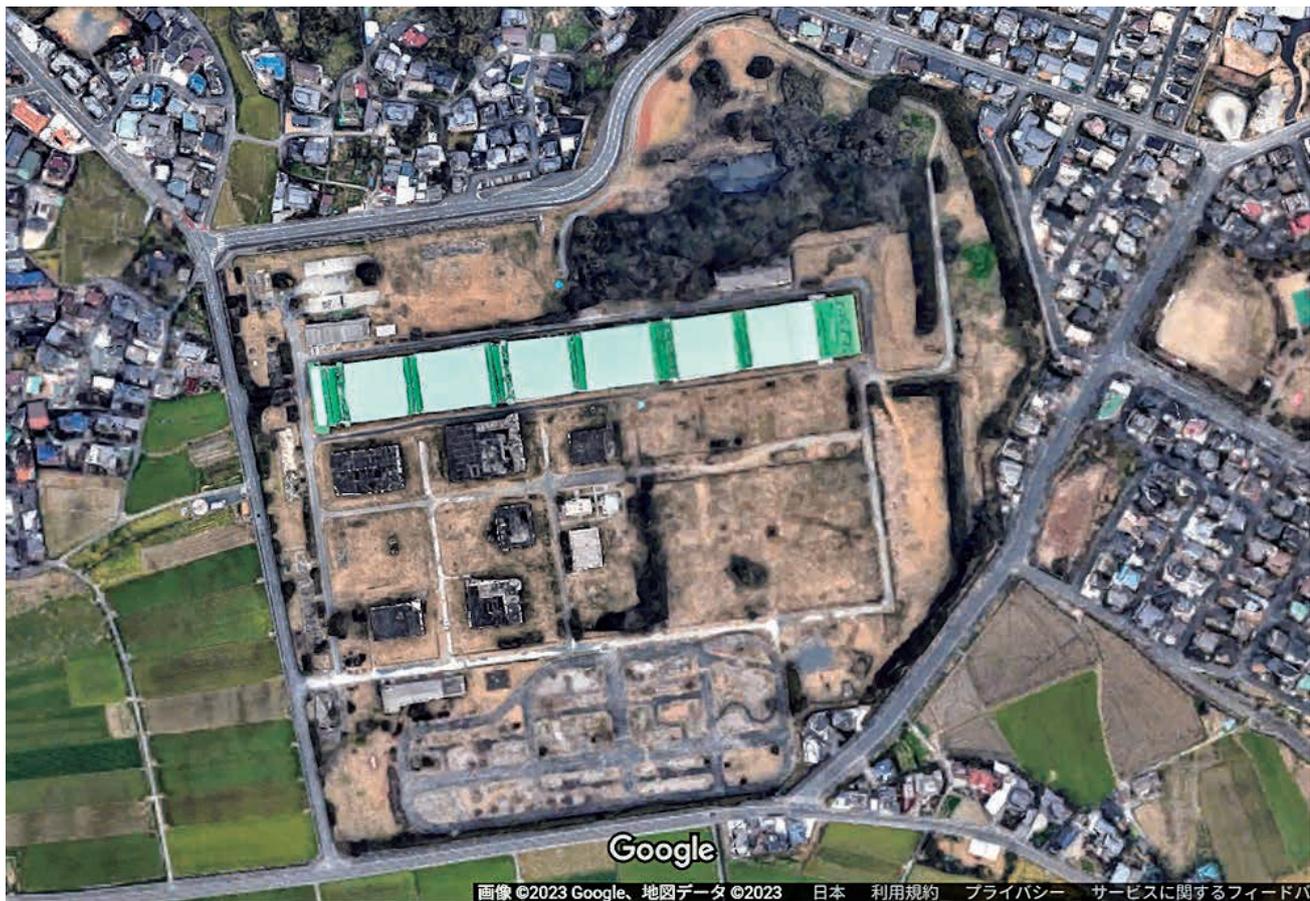
戦後も、敗戦時の軍による関係書類焼却隠蔽工作の影響や、軍による戦時中の守秘命令に違反するこ

とへの元工員の恐怖心が長く残り続けた。そのため、大久野島の忠海製造所の元工員に比べて、毒ガス傷害者への救済は遅れていたが、1993年によく国による救済制度が適用された(岡田 2001、尾崎 1997)。忠海製造所元工員の健康傷害者の調査を長年行ってきた広島大学の研究者により、救済制度適用に先立って、曾根製造所元工員307名の健康障害調査などが実施されている(重信 1994)。その報告書によると、曾根製造所元工員の死因は気道癌などの悪性腫瘍の割合が忠海よりも高率で、毒ガスとの因果関係が無視できないとしている。また、毒ガス急性皮膚傷害の後遺症である毒ガス斑が認められる例や、慢性気管支炎の有病率が高いことなども確認されている(重信 1994: 35-36頁)。

II. 曾根製造所遺跡の現存遺構とその特徴

(1) 遺構の全体像

標高178mの六甲山南麓の平野部に位置する曾根製造所一帯は、北から尾根続きの敷地東北部のみ一段高い丘状で、その他は平坦な土地である(第1・2図、図版1a)。北側の山麓側と東南側は、一般の居住地区と隣接していた。西側と南側は田畑が広がり、東南側は周防灘にそそぐ竹馬川の河口部と接する。曾根製造所の敷地は、おおよそ東西南北方向に四角形状であるが、東北部側が外側にやや突出し、東南部側が内側に入り込む形状をしている。東北部の標高が高い一画に本事務所と正門(北門)が存在し、西側にガス搬入口の西門と通用門、南東側に南門が存在した。敷地内には、おおむね東西南北方向の碁盤の目状に用途別の数多くの建物があったが、毒ガス兵器製造にかかわる重要な建物は、敷地内西側中央部付近に集中していた。冷凍室と東西の排風塔列をはさんで、北側におおよそ西から東にA1工室・B1工室・E1工室、南側におおよそ西から東にA2工室・B2工室が建ち並ぶ。また、東北側に少し離れてE2工室がある。そして、これらの毒ガス兵器製造にかかわる重要建物7棟がすべて現存する(第2・3図、図版3c~6・26c)(註2)。観察



第2図 曾根製造所遺跡付近航空写真 上2023年・下1948年 出典：上 Google Map、下 国土地理院USA-R238-No.2-23



a.



b.



c.

第3図 曾根製造所現存主要遺構の俯瞰全体像(1) (NHK野口真郷記者作成) ※註4

a. 3Dモデル図(東→西)、b. 主要建物遺構群(東南→西北)、c. A1工室(東北→西南)



a.



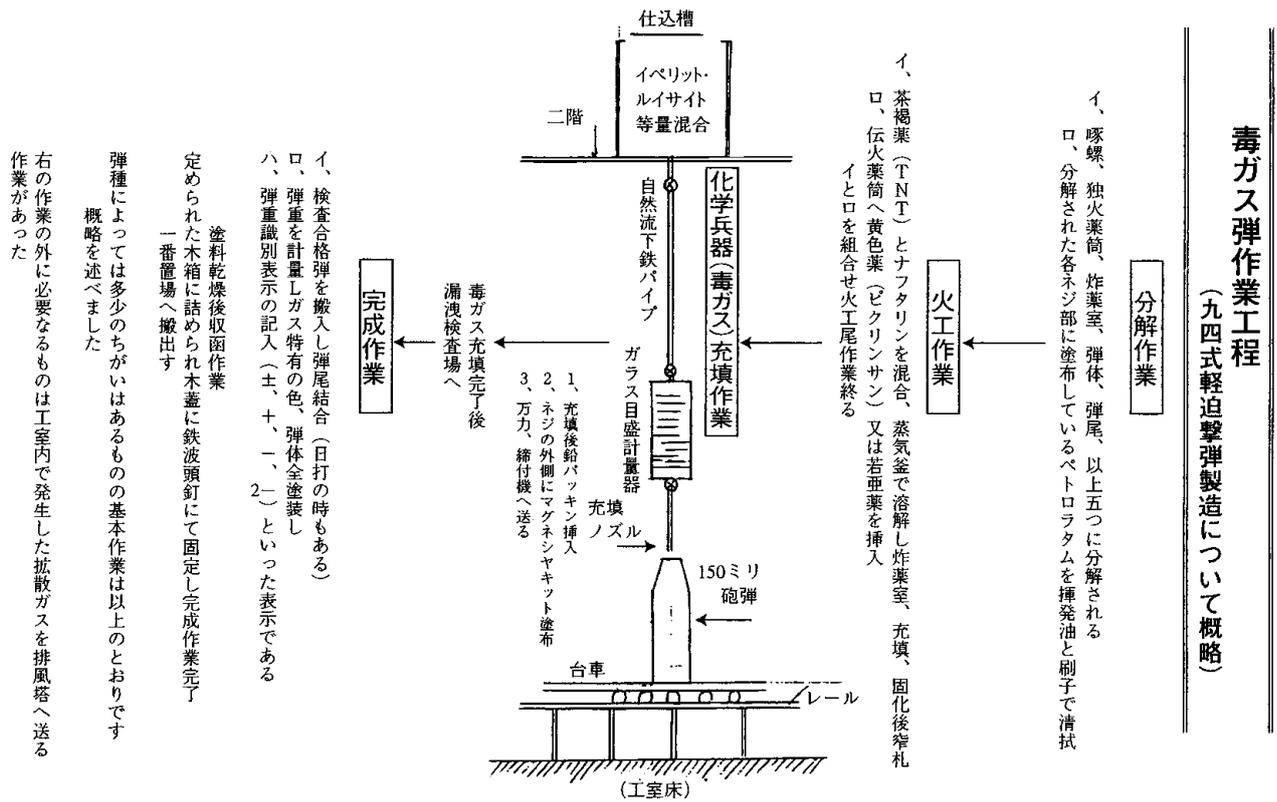
b.



c.

第3図 曾根製造所現存主要遺構の俯瞰全体像（2） 出典（Google Map 3D表示）

a. (西→東)、b. (北→南)、c. (南→北)



第4図 曾根製造所における毒ガス弾作業工程 出典：(岡田 2001：29頁)

できなかつたE 2 工室を除き、すべて鉄筋コンクリート (Reinforced Concrete) 構造の建物で、屋内天井部分には格子目状に梁がみられる。そして、柱に接続する部分の大梁の斜め下方が大きくなる垂直 (鉛直) ハンチ (haunch) が特徴的である。なお、2000年代初め頃までに撮影された写真や映像には、各工室建物の窓に格子状の鉄製窓枠が写っていたが、現在ではすべて撤去されている(註3)。また、1948年に米軍が撮影した航空写真(第2図下)からは、周囲の他の建物に比べて主要な工室建物屋上に不自然にくすんだ斑が確認でき、大久野島の忠海製造所(第6図<2>)と同様に、迷彩塗装が施されていた可能性がある。

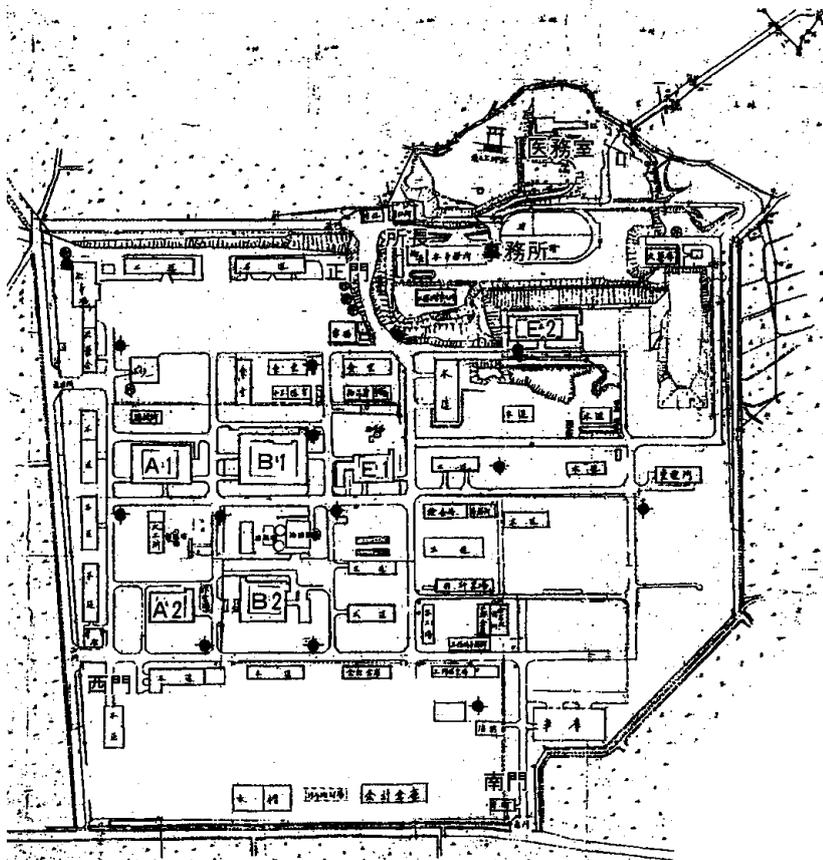
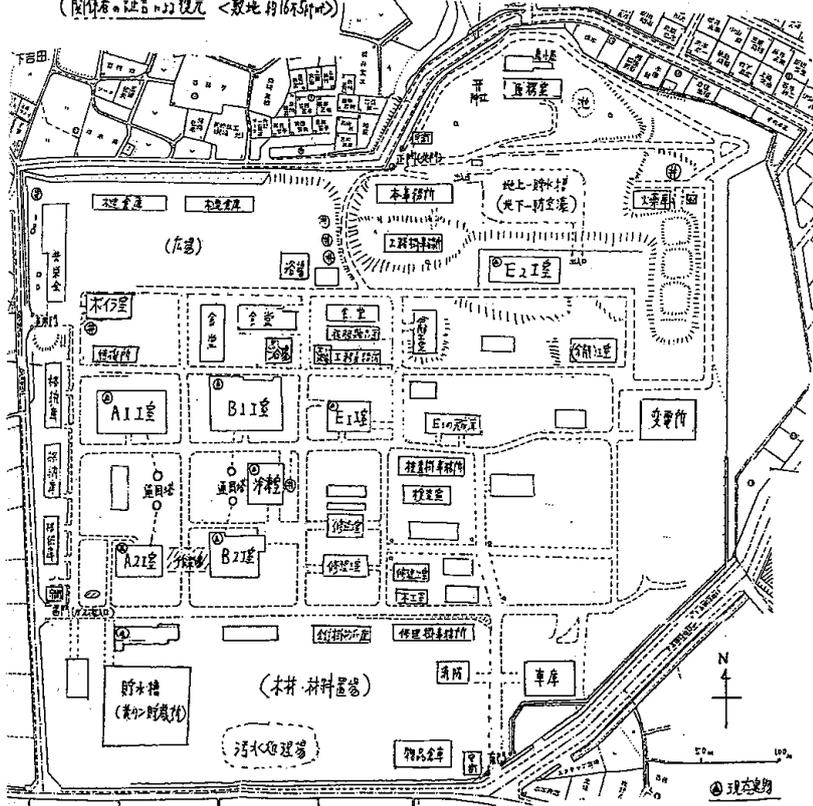
各工室における毒ガス兵器製造は、以下のような手順であった。毒ガス弾・毒ガス筒へのガス液填実(充填)方法は、最初にガス液の入った容器「ボンベ」を各工室の2階部分などの高所に設置し、真下に弾丸弾体を置いた。そして、パイプによる自然流下で途中の開閉機「計量器」にガス液を溜め置き、

開閉機を開いて填実する。その後、弾丸のガス填実口を工具「万力」を使いネジで締めつけるという簡単な方法であった。そのため、工室内には常に毒ガスが充満している状況であったという(工藤1997：216頁)。当時実際に作業に携わった岡田清氏も、同様の作業工程を図示している(第4図)。

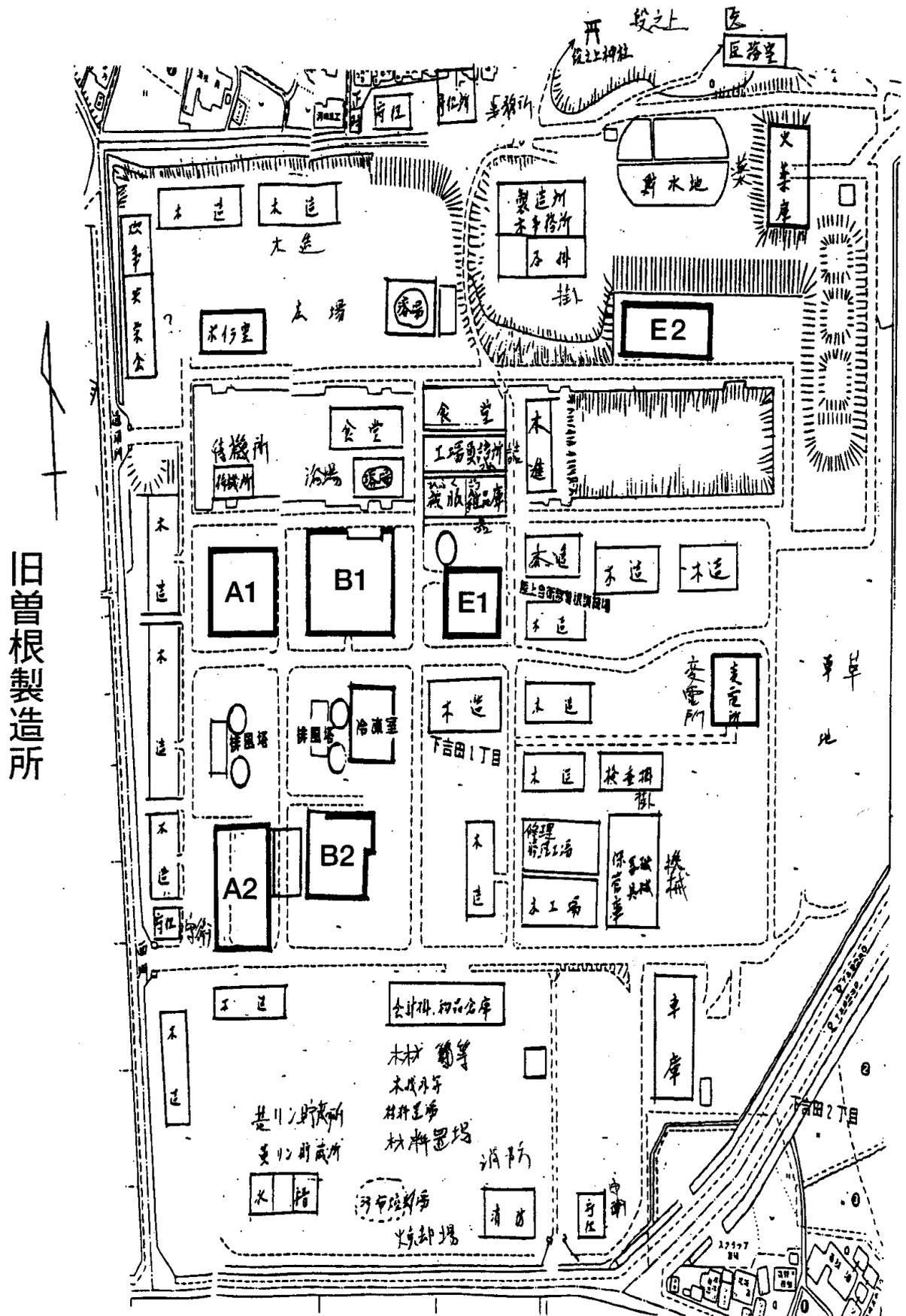
戦時中の曾根製造所内部の状況については、工藤瀨也氏(工藤 1997)・尾崎祈美子氏(尾崎 1997)・岡田清氏(岡田 2001)の著作が詳しい。これらの各著作では、細部に異なる名称もあるが主要な施設名称の一致する曾根製造所施設配置図(第5図)が掲載されている。なかでも、工藤瀨也氏の著作『小倉と原爆』は、元工員の証言を基に、主要な各建物の当時の使用状況についてまとめた唯一の文献である。そこで、以下の現存各建物遺構の役割や当時の使用状況に関しては、おもに工藤氏の著作記述を基に「当時の状況」としてまとめた。

なお、遺構現地観察は、陸上自衛隊小倉駐屯地の担当職員の同行許可範囲内で行った(註5)。その

東京第2陸軍造兵廠 曾根製造所の復元図 <'85.7.22現在>
 (関係者証言より復元 <敷地約16万㎡>)



第5図 曾根製造所施設配置図(1) 出典:上(工藤 1997:212頁資料30)、下(尾崎 1997:132頁)
 ※工藤1997掲載図はゼンリン社1984年版住宅地図に投影した図のため当時の自衛隊関連施設も含む。



旧曾根製造所

第5図 曾根製造所施設配置図(2) 出典:(岡田 2001:10頁) ※原図にタテ・ヨコ比歪み

ため、崩落危険性などで立入りが規制されている建物遺構内部や、自衛隊施設近接側は十分に観察できなかった。また、戦時中の兵器工場建物に関する専門用語を筆者は熟知していないため、以下では一般的な建築上の用語を使用する。各施設の正確な建築部分名称などについては、今後の研究を待ちたい。以下では、外周遺構、A1工室、B1工室、E1工室、冷凍室、B2工室、A2工室、排風塔、敷地内その他の遺構、敷地外近隣遺構の順に概要を述べる。

(2) 現存遺構の概要

a. 敷地外周の遺構 (図版1～3b)

曾根製造所当時は、北側に正門があり、西側に通用門と西門、南東側に南門の4つの門が存在した。このうち、西側の西門(図版1b)と通用門(図版2ab)のみが現存している。西門は、現在の陸上自衛隊曾根訓練場唯一の出入口である正門として使用されている。また、敷地外周を取り巻くコンクリート塀も当時の景観を保っている。西門・通用門に続く敷地の西側(図版2b・3b)と東北側(図版2c)・東南側(図版3a)の外周をめぐるコンクリート塀が曾根製造所当時の状態を保持していると考えられる。西門外南脇には、立哨台(歩哨所)の四角形の基礎(図版1c)が残っている。西門とその両脇部分のコンクリート塀表面のみ、最近白色に塗装された。

b. A1工室(第3図(1)c、図版7～8)

当時の状況：工室内は間仕切りで小室に分けられ、工員二人一組で直径100mm以下の砲弾・投下弾の「きい弾」を製造した。「毒ガスの王様」と呼ばれる「黄1号」(イペリットYperit)を中心に、「死の露」と呼ばれた「黄2号」(ルイサイトLewisite)の填実作業が行われた。熟練した男性工員が防毒マスク・防毒衣を着用しての作業が原則であったが、既製品のため体にあわず、指示を伝える際や填実後に万力でねじを締める際など、マスクやゴム手袋を外し「やけど」しながら素手で作業を行うことも多かったとされる。工室の出

入口には除毒用のサラシ粉・酸素吸入器が常置され、工室内にはジュウシマツ・カナリヤなどの小鳥が入った鳥籠が数箇所に分けて置かれていた。工室内の有毒な気体や粉塵は、吸気機と地下パイプ(風道管)を通して工室南側の排風塔(本論の西a排風塔：図版25)から排出していたが、故障も頻繁であった。そのため、工室内はイペリット特有の「からし臭」が充満し、餌をくわえたまま小鳥が死んでいることも多かったという。工員には、1時間につき20分間の休憩時間が与えられ、工室横の「待機所」で、「解毒薬」として毒ガス兵器工場に特別支給されていた砂糖入りのコーヒーを自由に飲めたとされる(工藤 1997: 220-222・232頁)。

遺構の特徴：現存建物遺構の中では、外観部分にもっとも損傷が多い。軒先縁辺の崩壊箇所が目立ち、立ち入り規制線のため、建物内部の細部は詳しく観察できなかった。東西方向に長方形の建物である。外観は、北端側が2層、中央部と南側が1層である。また、東北隅角部分のみさらに一段高くなっており(第3図(1)c、図版7c)、内部を確認できていないが、昇降機などを設置していた場所の可能性がある。東側・西側・北側に各2箇所、南側に1箇所の庇付き出入口がある。東側には庇付き窓も1箇所ある。天井の梁は、大梁は東西南北方向、小梁は東西方向のみである。工室内中央部の南側は東西方向の中仕切り壁があり(図版8a)、南側を東西方向に細長い部屋として独立させている。工藤氏が述べる「待機所」はこの南側の細長い部屋が該当するとみられる。北側の2層目部分は、中2階状の構造となっている。これは、毒ガス原料を上方から工室1階に流下させ填実作業を行うための関連設備であった可能性が高い。1層部分屋上中央には東西に2箇所の南北方向に細長い換気用天窓が設けられている。

c. B1工室(図版9～10)

当時の状況：A1・A2・B2の各工室で填実済の各種砲弾・投下弾を搬入し、毒ガス種類別色分け表面塗装・計量・検査・収函などの仕上げ作業

と、完成品の一時留置き場として使用された。危険性は他の工室と同様であったが、普通の工員服姿で防毒マスク常備程度の女性工員も多く働いた。そのため、比重の重いイペリットが漏出した場合、ズボンの下から入り込み下半身に水泡ができて歩けなくなる場合もあったという。また、1939（昭和14）年6月には、曾根製造所で最初の大きな事故が発生している。毒ガス弾のガス漏れ事故により、10数人の工員が意識を失い二箇月ほど入院した被害者も出たが、事故は秘密にされ家族の見舞いも許されなかったという（工藤 1997：225-226頁、尾崎 1997：155-160頁）。

遺構の特徴：北側東端に一部突出部分があるが、東西方向に長方形の建物である。外観は、東端側と北端側東半分のみが3層で、残りの西・北・南側は1層という複雑な形状である。東北隅角部分のみさらに一段高くなっており、内部を確認できていないが、昇降機などを設置していた場所の可能性もある。このB1工室の東北部分が、曾根製造所の建物でもっとも高層である（図版9c・10a）。西側と東側に各3箇所、北側と南側に各1箇所の庇付き出入口がある。天井の梁は、大梁は東西南北方向、小梁はすべて南北方向である。工室内部には、特に中仕切壁はみられず、1層全体が一続きの空間になっている（図版10b）。毒ガス原料を東側・北側の上層階から工室1階に流下させ填実作業を行っていた可能性もある。1層部分最東端の屋上には南北方向に細長い換気用天窗が設けられている（図版10c）。工室内の有毒な気体や粉塵は、吸気機と地下パイプ（風道管）を通して工室南側の東a排風塔から排出したとみられる（図版16b～17）。また、建物西側壁面に並行して断面台形状の土塁が構築されている（図版9a）。これは、この建物内西側に完成砲弾類がおそらく一時保管されていたため、誘爆防止の爆風除けが主目的と考えられる。

なお、南側外壁中央上部に「2」という数字がみられる（図版9b・10c）。他の建物遺構では同様の数字は未確認である。熊本県荒尾市の東京第

二陸軍造兵廠荒尾製造所などでは、連合国軍の接収番号が建物に記された事例がある（高谷2020：170-176頁）。曾根製造所も戦後一時期米軍に接収され、朝鮮戦争時に工室建物を兵舎として利用したとされることから（尾崎 1997：155頁）、この数字も同様の状況に関連する可能性がある。

d. E1工室（図版11～12）

当時の状況：「赤1号」（ジフェニールシアンアルシン Diphencyanoarsine）を填実して「あか弾（砲弾・投下弾）」と「あか筒」を製造する専用工室であった。「赤1号」は、吸い込むと激しくしゃみや吐き気によって一時戦闘不能状態となる毒ガスで、原料に砒素化合物が使われるため高い発癌性などの影響や深刻な土壌汚染をもたらした。また、一時期、催涙性の「みどり弾・筒」の填実も行った。仕上げ作業は、隣接する「E1の完成庫」で行ったとされる。日本軍の中国戦線での「あか弾・筒」大量使用に対応するため、他の工室に比べて多くの作業工員を配置して大量生産したという（工藤 1997：226-227頁）。

遺構の特徴：北側東端に一部突出部分があるが、東西方向に長方形の建物である。外観は、東端側が2層で、残りの西側・南側・北側は1層である。また、東北隅角部分のみ一段高く、内部を確認できていないが、昇降機などを設置していた場所の可能性もある（図版11c）。西側と東側に2箇所、南側と北側に1箇所の庇付き出入口がある。北側には庇付き窓も1箇所ある。天井の梁は、大梁は東西南北方向、小梁は南北方向である。内部は、中央部から東側は一続きの空間であるが、東側が中2階状の構造になっている。毒ガス原料を東側の上層階から工室1階に流下させ填実作業を行っていた可能性が高い。ただし、A2工室と同様に、屋上に換気設備などはみられない。西端側は南北方向の中仕切り壁で独立した細長い部屋になっている（図版12c）。北側外の東寄りに北排風塔が1基設置されている（図版13）。工室内の有毒な気体や粉塵は、吸気機と地下パイプ（風道

管)を通して、この北排風塔から排出したとみられる。なお、西側外壁面に、当初西側に棟続きで存在した木造建物の屋根妻側部分の輪郭が確認できる(図版11)。あるいは、工藤氏が指摘する仕上げ作業のための「E1の完成庫」に関連する可能性がある。米軍撮影の1948年の航空写真では、E1工室西側に「く」の字状に接続する切妻屋根の建物の存在を確認できる(第2図下)。

e. 冷凍室(図版14~16a)

当時の状況: B2工室などで填実使用する「茶1号」(青酸)は26.5度、「青1号」(ホスゲンphosgene)は8.3度と沸点が低いため、この冷凍室で-25度~-30度で液化した状態で保管していた(工藤 1997: 224頁)。

遺構の特徴: 南北方向にやや長い長方形の建物である。外観は2層で、内部西側半分のみが中2階構造になっている(図版16a)。他の工室に比べて明らかに窓が小さいことが特徴である。西側・東側に2箇所、南側・北側に1箇所の庇付き出入口がある。天井の梁は大梁小梁とも南北東西方向である。屋上の東西南北縁辺にのみ垂木状の構造物が見られる。屋上西側部分中央に2基の「スチーム暖房」のような放熱器形の特殊なコンクリート製構造物が設置されている(図版14ab)。冷凍機能に関連する設備とみられ、戦前の冷凍機能用建築として国内でも稀有な現存例の可能性があると(註6)。西側前面に近接して東排風塔a・bが設置されている(図版16b~17)。

f. B2工室(図版18~20)

当時の状況: 窒息性で即効致死の「茶1号」(青酸)と「青1号」(ホスゲンphosgene)の填実作業が行われた。沸点が低い「茶1号」と「青1号」は、すぐ北側に隣接する冷凍室で保管されており、液化した毒剤を工室内に運び、冷やされた弾頭に填実して「ちゃ弾」と「あを弾」を製造した。ホスゲン(青1号)を用いた「あを弾」の製造は、国内では曾根製造所が唯一であったという。ホスゲンは、大久野島の忠海製造所ではなく、大阪ソーダ小倉工場と大牟田市の三池染料工

業所などから調達した(工藤 1997: 224頁)。

遺構の特徴: 北側西端と東側北端に一部突出部分があるが、東西方向にやや長い長方形の建物である。外観は、B1工室と似通う複雑な形状である。東端側と北端側東半分のみが2層で、残る北側・南側・西側は1層である。東北隅角部分のみさらに一段高くなっており、内部を確認できていないが、昇降機などを設置していた場所の可能性もある(図版18)。西側と南側に各2箇所、北側と東側に各1箇所の庇付き出入口がある。東側には庇付き窓も1箇所ある。天井の梁は、大梁は東西南北方向、小梁はおもに東西方向である。他の建物遺構に比べて小梁の間隔が密で本数が多い。工室内部は、西端側が南北方向(図版20b)、北端側が東西方向の中仕切壁でなかば回廊状の細長い部屋となり、中央部から東側は一続きの広い空間になっている(図版20c)。現存工室建物遺構の1層部分では、もっとも複雑な間取りである。毒ガス原料を東・北側の上層階から工室1階に流下させ填実作業を行っていた可能性が高い。中央部分の1層の屋上には南北方向に細長い換気用天窗が2基設けられている。工室内の有毒な気体や粉塵は、吸気機と地下パイプ(風道管)を通して工室北側の東b排風塔から排出したとみられる(図版16b~17)。

また、西側屋外に手洗場が設置されている(図版19・20a)。屋外に設置された手洗場状の遺構はこれが唯一である。これは、B2工室とA2工室の間に存在した、「学校の渡り廊下を広くしたような土間と屋根だけが設けて」あった黄燐焼夷弾と発煙筒を製造するための「作業場」(工藤 1997: 227頁)に関係する遺構の可能性があると。黄燐焼夷弾は、中華民国臨時首都の重慶などへの無差別爆撃にも多用された(工藤 1997: 227頁)。

g. A2工室(図版21~24)

当時の状況: おもに直径100mm以上の「大口径弾」の「黄1号」(イペリットYperit)・「黄2号」(ルイサイトLewisite)などの「きい弾」の填実作業

が行われたが、催涙性の「みどり2号」(クロールアセトフェノンChloracetophenone)を用いた「みどり弾」の填実作業も行われたという(工藤 1997: 223頁)

遺構の特徴: 北側東端に突出部分があるが、東西方向に長い長方形の建物である。外観は、東端側のみが2層で、残る北側・西側・南側は1層である。東北隅角部分のみさらに一段高くなっており、昇降機などを設置していた場所の可能性がある(図版21・図版24a左側の小部屋)。西側・東側・北側に各2箇所、南側に1箇所の庇付き出入口がある。南側には庇付き窓も1箇所ある。天井の梁は、大梁が東西南北方向、小梁はすべて南北方向である。工室内部は、西端側が南北方向の中仕切壁で細長い部屋となり(図版24c)、中央部から東側はほぼ一続きの空間であるが(図版23c)、東端北側と南側に小部屋状の空間(図版24ab)もある。毒ガス原料を東側の上層階から工室1階に流下させ填実作業を行っていた可能性が高い。なお、E1工室と同様に、屋上に換気設備はみられない。工室内の有毒な気体や粉塵は、吸気機と地下パイプ(風道管)を通して工室南側の西b排風塔から排出したとみられる(図版25)。屋外北側中央部に、地下貯蔵施設跡などの可能性が考えられる付属設備遺構がある(図版23ab)。

h. 排風塔(図版13・16b~17・25)

当時の状況: 各工室で填実作業中などに漏れ出したイペリット・ルイサイト・ジフェニールシアンアルシンに由来する有毒な気体は、かなり比重が重いいため、工室内から地下パイプ(風道管)を通して排風塔から外へ拡散した。しかし、排風塔の排気拡散効率は悪く、風向きによって付近の住民や農作業者にしばしば「迷惑」をかけたとされる(岡田 2001: 16頁)。

遺構の特徴: 合計5本の排風塔が現存する。A1工室とA2工室の間にある南北に並ぶ排風塔2基を、北側を西a排風塔、南側を西b排風塔と仮称する(図版25)。冷凍室西側に南北に並ぶ排風塔2基を、北側を東a排風塔、南側を東b排風塔と

仮称する(図版16b~17)。また、E1工室東北側にある排風塔1基を、北排風塔と仮称する(図版13)。いずれも、目視では規模に大きな差は無く、中段と上段部分の三方向に鉄扉が設けられ、東北側にのみ昇降梯子が1基架けられている。

i. 敷地内のその他の遺構(図版2c・26)

上記の他にも、遺構が現存する。E2工室は現存しているが(図版26c)、現在も自衛隊が建物を使用しているため、今回遺構を直接観察できなかった。曾根製造所当時は、毒ガス剤を充填する前段階に、火薬の調合と弾丸への装入作業「炸薬溶填」を行っていたため「火工室(溶填工解室)」とも呼ばれていた(工藤 1997: 229頁)。作業には、学徒動員された折尾高等女学校などの女子生徒が近くの寮から通い、三班(一班60~70人)に分かれて作業に従事した。しかし、毒ガス兵器工場であることは知らされていなかったという(工藤 1997: 229頁)。また、E2工室北側背後は、上部が「貯水槽」(池)で、その地下が500人収容可能な巨大な防空壕となっている(工藤 1997: 233頁)。航空写真から貯水槽はそのまま現存が確認できる。また、E2工室北側背後の斜面下部のコンクリート擁壁は防空壕の外壁と考えられる(図版26c)。防空壕のおそらく入口に関連する鉄扉が現存するとされる(陸上自衛隊小倉駐屯地教示)。また、東北部の敷地内最高所には、曾根製造所当時の設備である「医務室」・「馬小屋」・「段之上神社」があったが、それらの基礎遺構の一部や基壇跡遺構(土壇)を、敷地北側高台から目視確認できる(図版2c)。

なお、A2工室西南側に石積み護岸の小規模の池遺構が存在する(図版26a)。曾根製造所に関するこれまでの文献には言及が無いが、単なる庭園ではなく、周辺工室からの毒ガス漏出を検知するために魚類を飼養した池の可能性なども考慮される。また、敷地内各所に木造建築物のコンクリート基礎(周囲の「コンクリートたたき」部分を含む)などの遺構が残る。西排風塔西側に「木工所」跡基礎(図版3c)、西側境界堀内側には「格納庫」跡の基礎遺構が3基(図版26b)、西北側境界堀内側に「炊事場」・

「共栄会」跡の基礎遺構、北西側境界堀内側には「木造倉庫」跡の基礎遺構が2基、北側中央部境界堀内側には「本事務所」・「工務掛事務所」跡の基礎遺構の現存を、それぞれ航空写真（第2図上）から確認できる。

なお、自衛隊訓練施設建設により上屋遺構は現存しないが、かつて存在した重要な建物として「分解工室」がある。毒ガス弾製造前段階の工程で、小倉陸軍造兵廠や大阪砲兵工廠で製造された弾丸弾体を一度分解し、毒ガス弾の製造地を隠すために造兵廠名の刻印を削る作業を行っていたという（工藤 1997：231頁、尾崎 1997：160頁）。

j. 敷地外周囲の関連遺構（図版27）

工藤氏によれば、曾根製造所「付近の山のなかにも洞穴を40ヶ所ほど掘って毒剤と毒弾を貯蔵した」ことが、アメリカ極東軍（米太平洋陸軍）参謀第二部の報告書に記載があるという。しかし、「一時期工場周辺の山の洞穴にガソリンなどを置いた」という証言のみ確認できたとされる（工藤 1997：234頁）。1948年に米軍が撮影した航空写真に、曾根製造所東北側の現在は宅地開発で削平された尾根南東斜面に、短く筋状に地表の植生が失われた部分が複数みられる。これらが「工場周辺の山の洞穴」に関連する可能性がある（第2図下）。なお、国土交通省による2022年度の全国特殊地下壕実態調査結果によれば、小倉南区大字吉田所在の40100002200番という事例が登録されているが、正確な位置を今回特定できなかった（註7）。また、曾根製造所東南側の丘陵部にある古墳時代の下吉田古墳群の石室が、空襲に備えた防空壕として利用されたという（伊崎・小川編 2020：114-115頁）。下吉田古墳群は、現在も多くの墳丘の横穴式石室が損壊・開口した状態で点在しており（図版27a）、曾根製造所関係で転用された可能性も考えられる。

また、曾根製造所東北側の下吉田東公園（小倉南区下吉田3丁目32）東北側の沢に、陸軍用地境界標柱が少なくとも3本残存していることを今回確認した（図版27b）。福岡市中央区の陸軍第6航空軍司令部接收地北側の軍用地境界標柱（伊藤 2016：

40-48頁）などと同様に、天（頭）部に境界方向を示す矢印が刻まれている。おそらく、曾根製造所周辺にはさらに多くの軍用地境界標柱がまだ現存しているとみられる。

なお、工場関係者の宿舎と学徒動員者用の寮2棟が曾根製造所西北側の綿都美神社^{わたつみ}周辺に建てられたとされるが（工藤 1997：233頁）、現存の有無は不明である。

そのほかに、曾根製造所から西北方向約2kmの位置に「陸軍池」（陸軍下池・陸軍上池）があり、曾根製造所用の水源地として築造されたという（伊崎・小川編 2020：114-115頁）。また、曾根製造所の南側約1kmの位置には、1943（昭和18）年4月から本土決戦に備えた陸軍の戦闘機基地「曾根飛行場」建設が着工されたが、敗戦時点では未完成だった（伊崎・小川編 2020：114-115頁）。飛行場完成時には、近接位置にある曾根製造所とその製造兵器が深く関連した可能性も充分想定される。

ちなみに、曾根製造所で完成した毒ガス砲弾・毒ガス筒は、中国大陸の戦場に送られる前に、木箱に詰めて小倉陸軍兵器補給廠（北九州市小倉北区片野新町3丁目・東城野町付近）や陸軍山田弾薬庫（北九州市小倉北区山田町山田緑地周辺）で保管されたという（工藤 1997：235頁）。小倉陸軍兵器補給廠（戦後：米軍キャンプ城野→陸上自衛隊城野分屯地）は、現在ほぼすべての遺構が失われている（江浜 2018：52-54頁）。陸軍山田弾薬庫は、遺構が多数現存している（小野編 2016：60-61頁）。

なお、戦争末期の曾根製造所は、東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所（熊本県荒尾市）などと共同で、1945（昭和20）年に、大分県中津市山国町の「旧草本旭金山跡地」に、地下工場「東京第二陸軍造兵廠山国常駐班」（部隊長：清利良徳技術少佐）設営を進めていたとされる。田良川南側崖面に、造営・採掘途中の横穴壕11本の現存が確認されている（高谷 2020：169-170頁）。

（3）遺構からみる曾根製造所の特徴

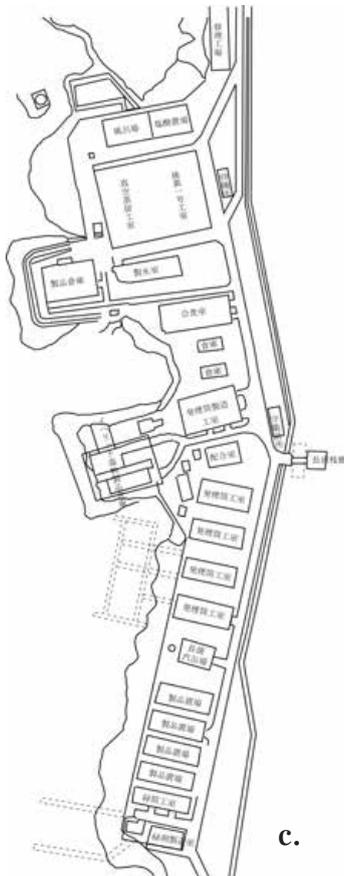
現存する各工室建物遺構には、いくつかの共通性



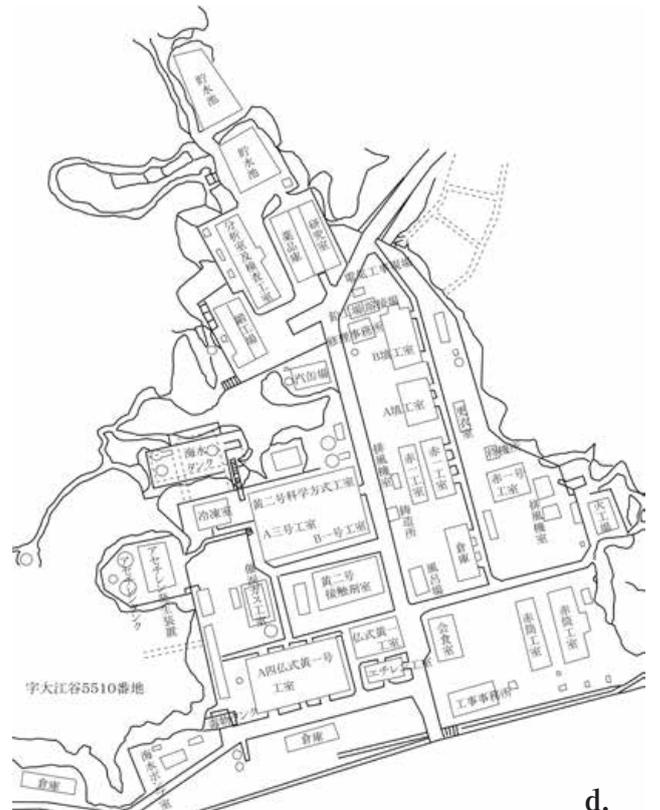
a.



b.



c.



d.

第6図 大久野島忠海製造所(1) a. 1948年3月19日米軍撮影航空写真 出典：国土地理院 USA-M850-A-64. b. 忠海製造所全体図 出典：(山内編 2013：4頁)、c. 長浦地区拡大 ※上南下北 出典：(山内・村上 2004：図9)、d. 三軒家地区拡大 ※左北右南 出典：(山内・村上 2004：図7)



第6図 大久野島忠海製造所(2) a. 長浦地区 出典:(村上 2003:34頁)、b. 三軒家地区 出典:(山内 2021:巻頭図版2)

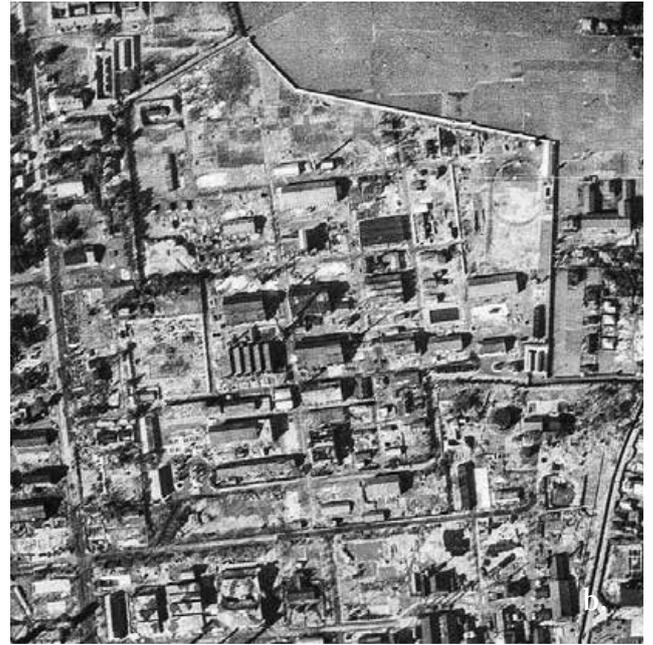
がみられる。毒ガス原料を上層階に運び上げるために昇降機を設置していたとみられる部分は、各工室とも建物の東北隅角部分である。そして、これに対応するように上層階がある部分も、東側・北側に限られる。また、各工室建物は、規模に比して出入口が極端に多く、東西南北側に最少で6箇所(B2・E1工室)、最多は8箇所(B1工室)である。これらは、毒ガスの漏出などの重大事故を想定した構造とみられる。曾根製造所一帯の地形は、北側と東側が山麓部と一般居住地区に接し、西側と南側は低く開けた田畑で人家が少ない(図版1a参照)。つまり、重大事故発生時には、工員がいち早く近い出入口から脱出し、風上側にあたる東北部の高台の本事務所や防空壕方向に避難するとともに、風下側の西側や南側に毒ガスを自然排出することを企図した可

能性がある。

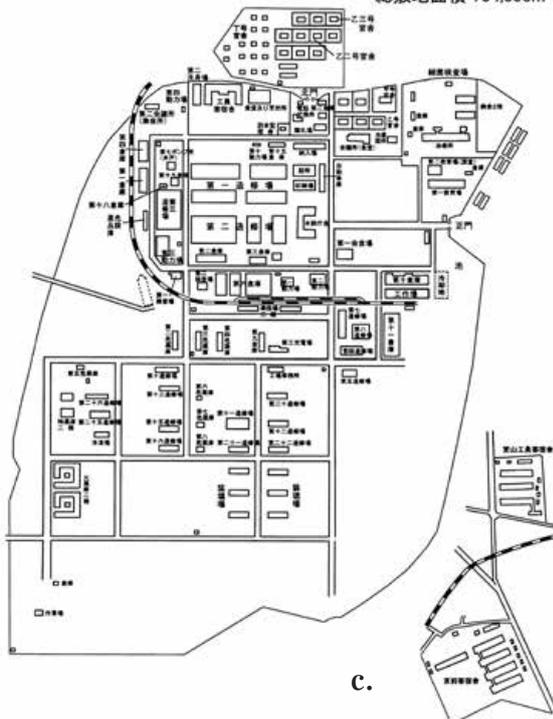
Ⅲ. 考察

曾根製造所と類似・関連した日本軍の毒ガス兵器関連施設の所在地としては、広島県竹原市忠海町、神奈川県寒川町・平塚市、千葉県習志野市などがある。

これらのうち、曾根製造所と組織的・技術的・人的にもっとも密接に関連していたのは、広島県竹原市忠海町の大久野島にあった毒ガス工場の東京第二陸軍造兵廠忠海製造所(旧称:陸軍造兵廠火工廠忠海兵器製造所)である(村上 2003、山内・村上 2004、山内編 2013、山内 2021)。大久野島毒ガス工場は、1929(昭和4)年に開設され、周囲約4

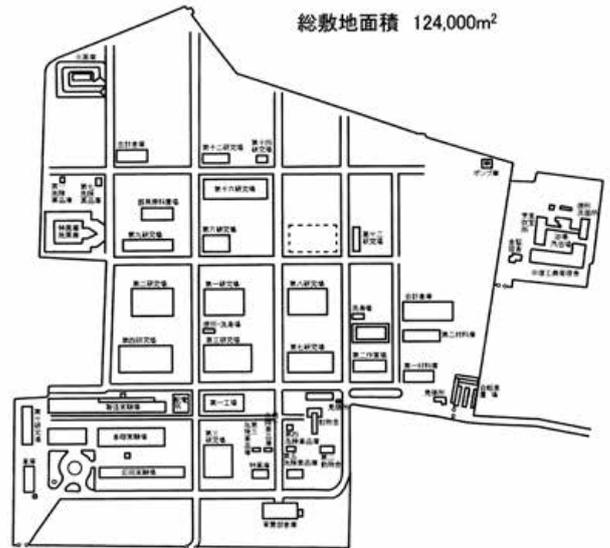


相模海軍工廠寒川本廠建物配置図
総敷地面積 704,000m²



相模海軍工廠平塚工場建物配置図

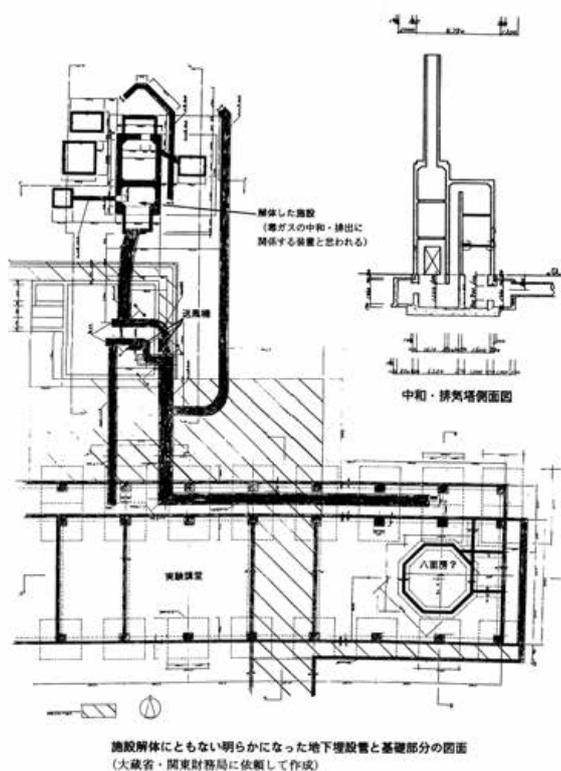
総敷地面積 124,000m²



第7図 相模海軍工廠 a. 寒川本廠 ※1946年2月15日米軍撮影航空写真 出典：国土地理院USA-M46-A-7-1-56、b. 平塚工場（化学実験部）※1946年2月15日米軍撮影航空写真 出典：国土地理院USA-M46-A-7-1-150、c. 寒川本廠施設配置図 出典：(旧相模海軍工廠毒ガス被害者の会編 2001：5頁)、d. 平塚工場（化学実験部）施設配置図 出典：(旧相模海軍工廠毒ガス被害者の会編 2001：6頁)

kmの島全体に毒ガス製造工場や毒ガス兵器製造工室など100棟を超える建物が建設された（山内 2021）（第6図）。戦後ほとんどの建物が解体撤去され、戦争遺跡として現在も保存されている当時の遺構はごく一部である。毒ガス製造に直接関連する工場建物遺構も現存しない。また、各建物内部の詳細

な構造や特徴なども不明である。しかし、戦時中の大久野島毒ガス工場の写真（第6図〈2〉）をみると、屋根が段差を持つ多層階建築形状や換気用天窓の外観形状、そして多くの窓を有する特徴など、曾根製造所の各工室建物遺構と構造や建物名称（第6図〈1〉d）まで非常に良く類似しており、両者の



第8図 陸軍習志野学校毒ガス関連施設 上 解体前1975年の実験講堂建物と中和排気塔全景(中央のコンクリート建築とその中央右側背後の煙突) 出典: 国土地理院CKT7413-C14-10、下 ガス実験室「八面房」周辺実験講堂基礎遺構・中和排気塔実測図 出典: (川鍋 1996: 31頁) ※原図に歪み

密接な関連性は建築からも明らかといえる。

神奈川県平塚市・寒川町には、海軍の毒ガス兵器製造拠点が存在した。平塚市に1930(昭和5)年に海軍技術研究所平塚出張所が開設され、1933(昭和8)年には本格的な毒ガス兵器生産を開始し、1934

(昭和9)年に海軍技術研究所化学研究部に昇格した。そして、1943(昭和18)年には相模川をはさんで平塚市の東隣の寒川町に相模海軍工廠本廠が新設され、平塚市の化学研究部は相模海軍工廠化学実験部に改組された。海軍の毒ガスは「特薬」と呼称され、1号特薬(陸軍: 緑2号) = クロールアセトフェノン、2号特薬(陸軍: 赤1号) = ジフェニールシアンアルシン、3号特薬甲(陸軍: 黄1号) = イペリット、3号特薬乙(陸軍: 黄2号) = ルイサイト、4号特薬(陸軍: 茶1号) = 青酸が製造された。このうち、3号特薬甲 = イペリットを充填した砲弾・爆弾が大量生産された。戦争末期の時点で毒ガスと毒ガス兵器の製造拠点となっていたのは、寒川町の相模海軍工廠第一造修場(第一火工部)の第1工場(イペリット製造)・第2工場(イペリット充填)・第3工場(火薬炸填)であったとされる(第7図c)。なかでも第2工場は作業の危険度が高く、多くの事故や健康被害が生じた(能勢ほか編 1984、旧相模海軍工廠毒ガス障害者の会編 2001、土井編 2001、北 2016)(註8)。敗戦後、平塚市と寒川町の旧相模海軍工廠建物は民間企業の工場に転用され、比較的最近までいくつかの建物が現存していたが、現在ではほとんど失われている。米軍が1946年に撮影した航空写真(第7図ab)から判断するかぎりでは、相模海軍工廠の毒ガス・毒ガス兵器製造建物の外観は、おおむね切妻屋根状の一般的な工場建物で、屋根に段差を伴うような多層階建築はみられない。曾根や大久野島の工室・工場建築とは明らかに異なる特徴をもつ。

なお、千葉県習志野市の陸軍習志野学校には、実験講堂を中心に、学生訓練用のガス室・軍馬用のガス室・小動物用の移動式ガス室・八角ガラス張りのガス室・自動ガス放射塔・ガス中和排気塔などが存在した。このうち、残存していたガス中和排気塔遺構と地下のヒューム管で接続していた八角形のガス室(八面房)基礎遺構(第8図)は、1995年の公務員宿舎建設時に破壊された(川鍋 1995・1996、川鍋 2004: 46-47頁)。ガス中和排気塔遺構は、長方形のコンクリート基層部分の上に一般的な細長い煙

突状の部分が伸びる形態で、曾根製造所の排風塔とは特徴が異なる。しかし、排風塔と工作室を地下で結ぶ風道管の構造を知るうえで、参考となる事例といえる。

このように、国内にあった日本軍毒ガス兵器関連施設は、曾根製造所を除くと、主要な遺構がもはやほとんど現存しない（註9）。この点からも、曾根製造所の現存遺構のきわだった重要性は明らかである。

国内の陸海軍工廠関連戦争遺跡という点では、たとえば『続 しらべる戦争遺跡の事典』（十菱・菊池編 2003：126-135頁）によると、東京都文京区の陸軍造兵廠東京工廠、大阪府中央区の大阪陸軍造兵廠、京都府宇治市の陸軍宇治火薬製造所、神奈川県寒川町の相模海軍工廠、愛知県豊川市の豊川海軍工廠が代表例としてあげられている。しかし、陸上自衛隊宇治駐屯地内にある陸軍宇治火薬製造所遺跡を除けば、いずれも戦時中に中心的な役割を果たした主要建築遺構はほとんど現存しない。これらの事例と比較しても、曾根製造所遺跡は敷地の全域と主要建築の現存という点で、質・量と面積・規模のうえでも非常に良好な状態をとどめた国内屈指の戦争遺跡といえる。

なお、豊川海軍工廠遺跡は、現存遺構の一部が保存整備され、2018年に展示施設の平和交流館を併設した豊川海軍工廠平和公園となった。さらに、最近では、東京都板橋区にある東京第二陸軍造兵廠板橋火薬製造所遺跡のアジア太平洋戦争期を含む残存建築遺構などの一部が国史跡に指定された。現在、「板橋区史跡公園（仮称）」として保存整備と公開活用の準備が進められている（板橋区教育委員会事務局生涯学習課編 2020）。

近年国内各地で保存整備活用例がしだいに増加している近現代の戦争遺跡は、アジア太平洋戦争末期の空襲・沖縄戦・特攻作戦・原爆関連事例や、掩体壕・地下壕・砲台などに偏っている。そもそも、アジア太平洋戦争の原点である中国大陸での日本軍の作戦行動に関連する国内の戦争遺跡事例は少ない。しかし、アジア太平洋戦争でもっとも膨大な内外の

死者を出したのは、中国大陸における日本軍の作戦行動である。曾根製造所遺跡と現存遺構は、その具体的状況を明解に伝える国内では類稀な重要戦争遺跡として評価できる。

また、曾根製造所遺跡の遺構は、現在管理している陸上自衛隊にとっても非常に有益な価値がある。旧日本軍とハーグ陸戦条約・ジュネーブ議定書に関する歴史や、化学兵器禁止条約（1995年9月批准・1997年4月29日発効）に基づく中国における旧日本軍遺棄化学兵器と日本政府の廃棄処理取組に関する自衛隊内教育に、根源地そのものである曾根製造所遺跡を有効活用できるといえる。

このように、曾根製造所遺跡の歴史的文化財としての傑出した重要性を踏まえると、行政が今後詳細な調査記録を基に適切な保存整備計画を策定したうえで、平和教育・平和学習などに広く公開活用することがもっとも望ましい。

註

- 1) 敗戦時の曾根製造所周辺の毒ガス兵器や毒ガス液入りドラム缶などは、直後に福岡県荊田町の荊田港沖や北九州市門司区東部沖・小倉北区藍島沖（吉見 2004：274頁、松野 2005：276頁）、山口県宇部市沖（周防灘）（松野 2005：269頁）などに海洋投棄されている。
- 2) 曾根製造所の西門（陸上自衛隊曾根訓練場正門）を入ってすぐ南側に、現在自衛隊施設として使用されている東西方向に細長い平屋建物がある。1948年に米軍が撮影した曾根製造所付近の航空写真にも、同位置に同規模の似た形態の建物がみられることから、この平屋建物も曾根製造所当時の建物遺構の可能性がある（第2図参照）。
- 3) NHK長崎放送局野口真郷記者のご教示によれば、NHK福岡放送局制作・1991年8月31日放送の番組「九州レポート：毒ガス工場・46年目の証言」では、主要建物遺構の窓に格子状の鉄製窓枠が鮮明に映されている。なお同番組には、現在立入できない複数の工室内部の状況も含まれており、貴重な記録といえる。
- 4) 第3図曾根製造所現存主要遺構の俯瞰全体像（1）（NHK長崎放送局野口真郷記者作成）は、以下の2023年8月15日付NHK Webページ「極秘だった毒ガス弾工場跡地が伝える戦争の負の歴史」（https://www3.nhk.or.jp/news/special/senseki/article_196.html）より引用した。
- 5) 今回の曾根製造所現存遺構の現地調査は、敷地内現存遺構の調査を2023年5月に実施したほか、外周遺構と近隣所在の関連遺構の調査を2019年2月・2023年12月に実施している。図版掲載の外周遺構と近隣の関連遺構の写真には、それらの時点の撮影写真が含まれる。
- 6) 戦時中の陸軍関連の冷凍機能を主とする現存建物遺構としては、中国黒龍江省ハルビン市の731部隊吉村班（班

長：吉村寿人）が人体実験を行った凍傷実験室遺構がある（楊編 2015：78-85頁）。屋上部分まで現存しているが、曾根製造所の冷凍室のような放熱器形の構造物などは見られない。

- 7) 小倉南区大字吉田の特殊地下壕については、国土交通省ホームページ「令和4年度特殊地下壕実態調査結果について」の付表（<https://www.mlit.go.jp/common/001230051.pdf>）に記載がある。
- 8) 相模海軍工廠については、寒川町史編集委員会刊行の『寒川町史研究』第6号（1993年）：1-69頁・第8号（1995年）：1-63頁・第10号（1997年）：1-90頁において、3回にわたって「特集・相模海軍工廠」として、関係者聞き取り調査成果などが詳細に報告されている。
- 9) 日本軍の毒ガス戦関連戦争遺跡としては、中国黒龍江省ハルビン市の731部隊遺跡に、2階建て長方形のガス実験室関連建物遺構と地上1階・地下2階の円形のガス貯蔵庫遺構が、隣接して現存する。ガス実験室では、中国人レジスタンスなどの人体実験用囚人「マルタ」や鶏・犬・ネズミ・鳩などを対象に、731部隊と516部隊が共同で毒ガス実験を行ったとされる（楊編 2015：86-92頁）。

引用参考文献

- 伊崎俊秋・小川泰樹編 2020『福岡県の戦争遺跡』、福岡県文化財調査報告書第274集、福岡県教育委員会（福岡）
- 伊藤慎二 2016「福岡市中央区薬院の戦争遺跡：陸軍振武寮とその周辺」、『国際文化論集』第30巻第2号：35-64頁、西南学院大学学術研究所（福岡）
- 板橋区教育委員会事務局生涯学習課編 2020『史跡陸軍板橋火薬製造所跡保存活用計画』（https://www.city.itabashi.tokyo.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/032/408/h2.pdf）、板橋区教育委員会（東京）
- 江浜明德 2018『九州の戦争遺跡（新装改訂版）』、海鳥社（福岡）
- 岡田 清 2001『東京第二陸軍造兵廠曾根製造所：その歴史と背景』、旧曾根製造所毒ガス傷害者互助会、私家版（福岡）
- 尾崎祈美子 1997『悪夢の遺産：毒ガス戦の果てに～ヒロシマ・台湾・中国』、学陽書房（東京）
- 小野逸郎編 2016『北九州の戦争遺跡（改訂版）』、北九州平和資料館をつくる会（福岡）
- 川鍋光弘 1995「科学者の解明した習志野毒ガス学校」、『歴史地理教育』542号：48-56頁、歴史教育者協議会（東京）
- 川鍋光弘 1996「4 秘密に行われた毒ガス戦の研究：陸軍習志野学校の役割」、『学校が兵舎になったとき：千葉からみた戦争：1932～45』：28-33頁、青木書店（東京）
- 川鍋光弘 2004「〈御親兵〉の訓練基地から〈毒ガス〉の訓練基地へ」、『千葉県の戦争遺跡をあぐる：戦跡ガイド&

- マップ』：45-58頁、千葉県歴史教育者協議会編、図書刊行会（東京）
- 北宏一朗 2016「相模海軍工廠・寒川と平塚にあった秘密毒ガス工場」、第1回「戦争の加害と沖縄の今展」配布資料（<http://731butaiten.jp/sagamikaigunnkousyou.pdf>）、記憶の継承と進める神奈川の会（神奈川）
- 旧相模海軍工廠毒ガス障害者の会編 2001『旧相模海軍工廠 ガス障害者証言集』、神奈川県衛生部保健予防課（神奈川）
- 工藤滯也 1997『小倉と原爆：軍都小倉と毒ガス爆弾・風船爆弾製造の記録』、あらしき書店（福岡）
- 額 厚 2007「アジア太平洋戦争をどう捉えるのか：侵略戦争論と解放戦争論の狭間で」、『植民地文化研究：資料と分析』6巻：2-20頁、植民地文化研究会、不二出版（東京）
- 重信卓三 1994『北九州曾根毒ガス弾製造所旧従業員の健康障害に関する研究』、平成4・5年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書（課題番号：04671395）、広島大学保健管理センター（広島）
- 十菱駿武・菊池実編 2003『続 しらべる戦争遺跡の事典』、柏書房（東京）
- 高谷和生 2020『くまもとの戦争遺産：戦後75年 平和を祈って』、熊日出版（熊本）
- 土井浩編 2001『平塚の戦争遺跡』、ガイドブック18、平塚市博物館（神奈川）
- 中原澄子 2012『小倉陸軍造兵廠（改訂版）』、創言社（福岡）
- 能勢義雄ほか編 1984『相模海軍工廠』（本編・追想編）、『相模海軍工廠』刊行会（東京）
- 長谷川治良編 1969『日本陸軍火薬史』、桜火会（東京）
- 松野誠也 2005『日本軍の毒ガス兵器』、凱風社（東京）
- 村上初一 2003『毒ガス島の歴史（大久野島）』、自費出版（広島）
- 山内静代・村上初一 2004『伝言：東京第二陸軍造兵廠忠海製造所』、毒ガス島歴史研究所会報特別号、毒ガス島歴史研究所（広島）
- 山内正之編 2013『おおくのしま平和学習ガイドブック：その被害と加害から学ぶ・大久野島の毒ガスの歴史を学習するために』、第二版、大久野島から平和と環境を考える会（広島）
- 山内正之 2021『大久野島の歴史：三度も戦争に利用され、地図から消された島・毒ガス被害・加害の歴史』第二版、大久野島から平和と環境を考える会（広島）
- 行武正刀編 2012『一人ひとりの大久野島：毒ガス工場からの証言』、ドメス出版（東京）
- 吉見義明 2004『毒ガス戦と日本軍』、岩波書店（東京）
- 楊彦君編 2015『七三一部隊旧址調査与研究』、中国和平出版社（北京）

伊藤 慎二（いとう しんじ） 国際文化学部教授

図版1 外周遺構と主要建物遺構群全景(1)



a. 遠景(西南→東北)



b. 旧西門・ガス搬入口門(西南→東北)



c. 旧西門前面南側の立哨台(歩哨所)跡(北→南)

図版2 外周遺構と主要建物遺構群全景(2)



a. 旧通用門(西→東)



b. 旧通用門と西側外周塀(北→南)



c. 東北側外周塀(西北→東南)
中奥：馬小屋・医務室基礎遺構、右奥：
段之上神社基壇跡遺構

図版3 外周遺構と主要建物遺構群全景 (3)



a. 東南側外周塀 (南→北)



b. 西南側外周塀 (西→東)



c. 主要建物遺構群東半分 (西→東)
左: B 1 工室・E 1 工室、中: 西ab・東
b排風塔・冷凍室、右: B 2 工室、手前:
木造建物基礎遺構

図版4 外周遺構と主要建物遺構群全景(4)



a. 主要建物遺構群(西南→東北)
左: A1工室、中左: 西ab排風塔・A2工室、中右: 東ab排風塔・冷凍室



b. 主要建物遺構群(西南→東北)
左: A1工室、右: 西ab排風塔・右奥: A2工室



c. 主要建物遺構群(西南→東北)
左端: A1工室、中: A2工室、右奥: E1工室

図版5 外周遺構と主要建物遺構群全景（5）



a. 主要建物遺構群（西北→東南）
左奥：B 1 工室、右：A 1 工室



b. 主要建物遺構群（西北→東南）
左奥：B 2 工室、中：西ab排風塔、右：
A 2 工室



c. 主要建物遺構群（西北→東南）
左奥：B 2 工室、右：A 2 工室

図版6 外周遺構と主要建物遺構群全景（6）



a. 主要建物遺構群（西南→東北）
左：A2工室、右：B2工室



b. 主要建物遺構群（南→北）
左手前：A2工室、左奥：A1工室、右奥：B1工室、右手前：B2工室



c. 主要建物遺構群（西南→東北）
左奥：B1工室、中：東ab排風塔・冷凍室、右：B2工室

図版7 A1工室(1)



a. 西・南側面



b. 西側面



c. 南・東側面

図版8 A1工室(2)



a. 南側面中央部



b. 西側面南端部



c. 東側面南端部

図版9 B1工室(1)



a. 西・南側面と土塁



b. 南側面東端部



c. 南・東側面

図版10 B1工室(2)



a. 東側面



b. 1階西側中央内部(西→東)



c. 1階屋上設備(西南→東北)

図版11 E1工室(1)



a. 西・南側面



b. 左：北側排風塔、右：西側面



c. 北・西側面

図版12 E1工室(2)



a. 南側面



b. 東側面



c. 1階西側中央内部(西→東)

図版13 北排風塔



a. 左：北排風塔、右：E1工室（西→東）



b. 北排風塔西側面

図版14 冷凍室（1）



a. 西側面・東ab排風塔（西北→東南）



b. 北・西側面・東a排風塔



c. 北側面

図版15 冷凍室（2）



a. 東側面



b. 南・東側面



c. 南側面

図版16 冷凍室（3）・東排風塔（1）



a. 冷凍室東側内部（北→南）



b. 左：東ab排風塔、右：冷凍室（西南→東北）



c. 左：東b排風塔、右：冷凍室、奥：B1工室（南→北）

図版17 冷凍室（4）・東排風塔（2）



a. 左：冷凍室、中：東ab排風塔、右奥：B2工室（西北→東南）



b. 東a排風塔北側面、奥：B2工室（北→南）

図版18 B2工室(1)



a. 北・西側面



b. 東・北側面



c. 東側面

図版19 B2工室(2)



a. 北・西側面



b. 西側面



c. 西・南側面

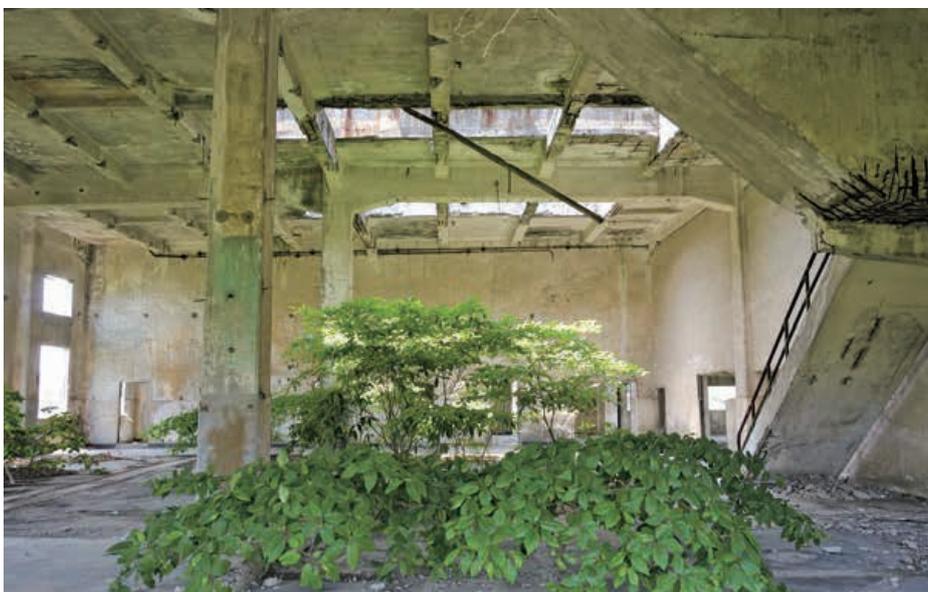
図版20 B2工室(3)



a. 西側屋外の手洗場



b. 1階西側南端内部(西南→東北)



c. 1階東側中央内部(東→西)

図版21 A2工室(1)



a. 北側面



b. 東・北側面



c. 東側面

図版22 A2工室(2)



a. 南・東側面



b. 南側面



c. 西・南側面

図版23 A2工室(3)



a. 北側面中央部



b. 北側中央部屋外付属設備跡



c. 1階北側中央内部(北→南)

図版24 A2工室(4)



a. 1階北側東端内部(東北→西南)



b. 1階南側東端内部(南→北)



c. 1階西側内部(南→北)

図版25 西排風塔



a. 西ab排風塔西側面（奥：東b排風塔・冷凍室）



b. 西ba排風塔南側面（奥：A 1工室）



c. 西ab排風塔北側面（奥：A 2工室）

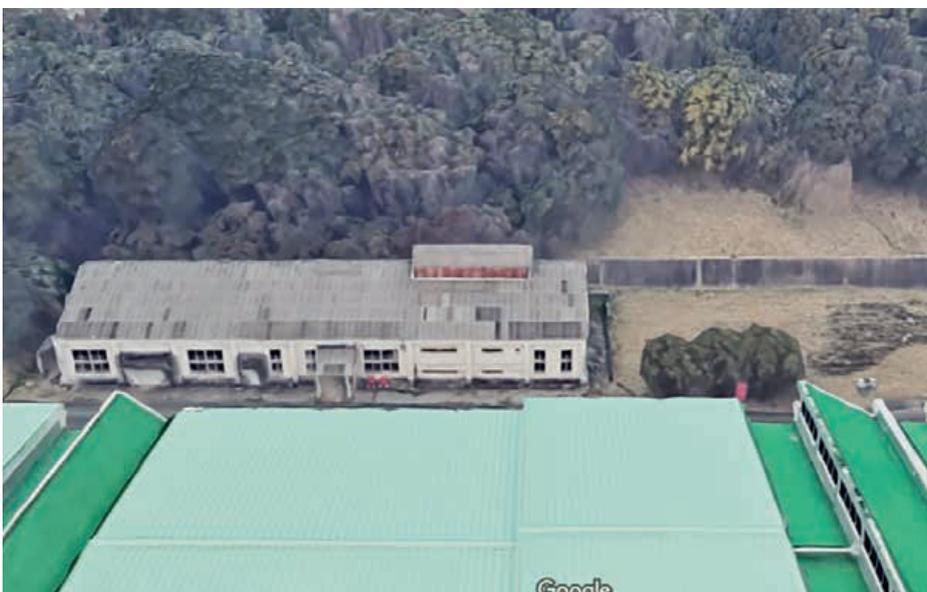
図版26 その他の遺構



a. A2工室西南側・西門東北側の池遺構（東→西）



b. 敷地内西側の格納庫跡基礎遺構（東→西）



c. E2工室と防空壕擁壁（南→北）
出典：Google Map 3D表示版

図版27 敷地外近隣の関連遺構



a. 戦時中に防空壕に転用された可能性がある下吉田古墳群の古墳石室（西南→東北）



b. 吉田東公園東奥の陸軍用地境界標柱（南→北）

シエナ、パラッツォ・デル・マニフィコのカメラ・ベッラ装飾事業 —ジローラモ・ジェンガ作《ハンニバルから捕虜を解放するファビウス・マクシムスの息子》とヤーコポ・リパンダの関係をめぐって—

森 結

はじめに

シエナ共和国の実質的君主であったパンドルフォ・ペトルッチ（1452-1512）の宮殿、シエナのパラッツォ・デル・マニフィコの一室であったカメラ・ベッラの室内装飾（c.1509）は、古代の英雄の事跡や古典と当代の文学とを主題とする壁画を有しており、それらはルカ・シニョレツリ（c.1450-1523）とベルナルディーノ・ピントリッキオ（c.1454-1513）の両工房が手がけたものであった。ローマのシステーナ礼拝堂装飾事業（1481-1482）での協働以降、教皇庁関係者や世俗の君主の装飾事業を手掛け、古代風装飾の復興を成した両画家の、初の共同装飾事業だったといえる¹。

ピントリッキオは本装飾事業以前、シエナ大聖堂のピッコローミニ図書館装飾事業（1502-c.1507）を手がけ、シエナに移住しており、その名声は既に同地に行きわたっていた。一方でシニョレツリは、本装飾事業から約20年遡る1488年頃に、同地のサンタゴスティーノ教会ビーキ礼拝堂の多翼祭壇画を手がけ、シエナの芸術シーンに大きな足跡を残し、彼の功績は権力者層にも注目されたと思われる。その名声はシエナの領地であったモンテオリヴェートの大修道院回廊装飾事業（1498-1499）、そして画家の名を不朽のものにしたオルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾事業（1499-c.1504）を招致するに至り、より高まった名声が本装飾事業への招聘に繋がったと筆者は推測する²。

こうした既に大きな名声を博していた両画家とは別に、本装飾事業に関する2点の壁画が、彼らの息

子世代にあたる、ウルビーノ出身の画家、ジローラモ・ジェンガ（1476-1551）に帰属されている。本稿の第2章で詳述するが、ジェンガは1499年から1508年にかけて、シニョレツリと暫時的に協働していたことが記録上分かっている。これにより、ジェンガは独立した画家として本装飾事業に招聘されたというよりは、おそらく当初はシニョレツリに帯同し、事業に参加していたのだと思われる。

本装飾事業のために描かれた、ジェンガによる《ハンニバルから捕虜を解放するファビウス・マクシムスの息子》〔図1〕は、ヤーコポ・ダ・ボローニャという人物の署名が入った、リール宮殿美術館が所蔵する素描帖、通称『リールの素描帖（taccuino di Lille）』第379葉〔1516年頃、図2〕に、細部の違いはあるが、その図様が写し取られている。さらにはルーブル美術館や大英博物館が所蔵するファエンツァ産マヨリカ陶器〔1515-1525年、図3〕にも同じ図様が使用されており、ジェンガの下絵か、『リールの素描帖』の図様が、マヨリカの陶工達に流通していたと思われる。

『リールの素描帖』に署名のあったヤーコポ・ダ・ボローニャという名は、ボローニャ出身のヤーコポという意味に過ぎない。そのため、同じ名を持ち、ボローニャ出身でありながらローマで活躍し、考古学的遺物を研究した素描を残し、好古趣味的（antiquarian）な壁画装飾事業に携わった、ヤーコポ・リパンダ（生没年不明）の研究者達によって、『リールの素描帖』は、リパンダのコーパス（corpus：作品体系）に含められることがあった。このため、一部でリパンダがカメラ・ベッラ装飾事業に

協力し、ジェンガに下絵を提供したという言説が生み出された。

古物研究家の顔を持つリパンダが、カメラ・ベッラ装飾事業に協力し、ジェンガやシニョレツリ、ピントリッキオと交流していたとしたらどうであろうか。この言説は大変刺激的ではあるが、リパンダの文書記録に基づくバイオグラフィーやコーパスはまだ整っておらず、その証明は困難であるように思わ

れる。本稿では第3、4章においてこの問題を扱い、この言説が論じられた経緯を確認し、その蓋然性について検討することとしたい。

1. カメラ・ベッラ装飾のプログラムに関して

ジェンガの壁画について論じる前に、まずカメラ・ベッラ装飾全体のプログラムについて、簡略に



図1. ジローラモ・ジェンガ《ハンニバルから捕虜を解放するファビウス・マクシムスの息子》1509年頃 フレスコ、126×138cm
シエナ国立絵画館



図2. ヤーコポ・ダ・ポローニャ『リールの素描帖』
Fol. 379, 1516年頃 リール宮殿美術館、リール 14.3×16.5cm



図3. ファエンツァ産マヨリカ陶器、1515-1525年 錫釉、直径
25.4cm 大英博物館、ロンドン

触れておきたい。本装飾事業の注文主であるパンドルフォ・ペトルッチは、フィレンツェのロレンツォ・デ・メディチと同様の、イル・マニフィコ（豪華王）の通名を持ち、1497年に共和国の実権を握り、実質的には君主制を敷いた、老獪な僭主であった。彼は明らかに世襲君主制への野望（dynastic ambition）を抱き、国の権力者であった義父のニコロ・ボルゲーゼを殺害し、自らの一族と、キージ家やピッコローミニ家といった国内の有力氏族との婚姻関係を結び、堅牢な地位を築き上げ、共和国のあらゆる分野で、支配権を持つに至った。この周到さは芸術政策においても発揮されることとなる。彼はシエナのエリート層を構成する、教会関係者の支持を得るために、大聖堂造営局（Opera del Duomo）や大聖堂参事会（Canons）に身内を配置し、大聖堂の造営事業をも掌握していたのである³。

シエナ大聖堂の東、洗礼堂の近隣に位置するボルゲーゼ宮殿の大部分を、ペトルッチは1504年に我が物にし、この宮殿はパラッツォ・デル・マニフィコと称された。カメラ・ベッラは宮殿の2階にあり、この部屋はcamera（寝室）、gabinetto（応接室）と様々に記録されるが、1514年の記録は、当時寝台がなく、出入り可能であったことを示しており、公に開かれた部屋であったことが窺える。

カメラ・ベッラの室内装飾は、1509年9月に執り成された、ペトルッチの長子ボルゲーゼと、教皇ピウス3世の姪であった、ヴィットリア・ピッコローミニとの婚礼を祝すために行われたと考えられる。部屋の壁面を飾った木製の付け柱〔シエナ国立絵画館〕や、舗床タイル〔図4〕には、黄色と青から成るペトルッチ家の紋章に加えて、十字に三日月を配したピッコローミニ家の紋章が含まれている。またタイルには1509年の明記がなされているものもあり、この年の婚礼と結び付けられて解釈された。

19世紀にカメラ・ベッラの装飾は売却され、離散し、一部は消失した⁴。しかし18世紀に、この部屋の装飾に関する詳細な記録が残っており、これらが装飾の再構成と帰属の基底となっている⁵。記録によると、部屋には8面の壁画があった。その内、5

面が現存している。現在カンバスに移され、ロンドンのナショナル・ギャラリーが所蔵する、シニョレッリの署名のあるフレスコ画、《純潔の凱旋—武装解除され拘束されたアモール》〔図5〕と《家族にローマの救済を説得されるコリオラヌス》〔図

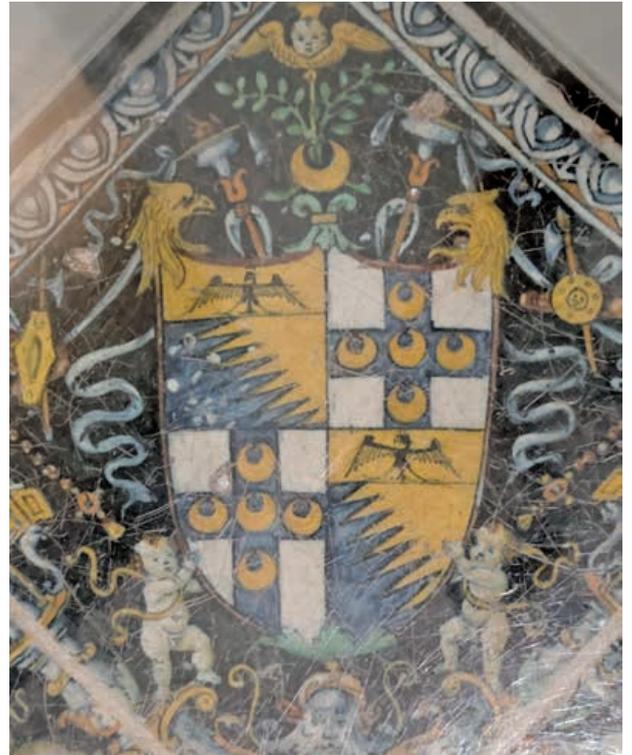


図4. シエナ派 カメラ・ベッラの舗床タイル（部分）、1509年 マヨリカ製タイル、19.9×19.5×2.3cm ヴィクトリア&アルバート美術館、ロンドン



図5. ルカ・シニョレッリ《純潔の凱旋—武装解除され拘束されたアモール》1509年頃 フレスコ、125.7×133.4cm ナショナル・ギャラリー、ロンドン

6)、ピントリッキオによる《ペネロペと求婚者たち》〔図7〕、そしてシエナ国立絵画館所蔵の、ジェンガに帰属される《ハンニバルから捕虜を解放するファビウス・マクシムスの息子》〔図1〕、《トロイアからのアエネアスの避難》〔図8〕が該当し、失われた3面は、シニョレツリによる《アペレスの誹謗》《パーンの祝宴》、ピントリッキオによる《スキピオの節制》であったとされる⁶。これらの壁画に加えて、部屋には箔押しされたストゥッコと、メトロポリタン美術館が所蔵するピントリッキオ工房に帰属される天井画、前述の木製の付け柱と、世界各地に散在する舗床タイルが、カメラ・ベツラを飾っていた⁷。

ペトラルカの俗語詩『凱旋』(*I trionfi*, c.1351-1374)を典拠とする「純潔の凱旋」や、古代ローマの将軍スキピオが、捕虜であった敵国の女性を、潔白のまま婚約者と両親のもとに返した、という故事に基づく「スキピオの節制」は、婚礼や出産を記念するための家具絵であったカッソーネやスパッリエーラ、デスコ・ダ・パルトに描かれる主題であった⁸。天井のストゥッコ装飾には、8つの美德の戒めに関する銘文もあることから⁹、全体の図像プログラムは、婚礼に際した夫婦の美德、あるいは家族の美德を表していると論じられた¹⁰。

これに対してタトライやジャクソンは、全体のプログラムは、より広い意味での市民的美德や、ペトルッチの世襲君主制的野望を表象していると主張する¹¹。タトライは、ジェンガによる壁画〔図1〕の主題を、プルタルコス「ファビウス・マクシムス伝」(七-6-8)の記述と結び付け、父に身代金を調達することを頼まれ、それを持って敵将ハンニバルに捕虜の解放を説くローマの将軍ファビウス・マクシムスの息子が主題であると特定し、父と子の親子関係が他の壁画にも描かれていることに注目する。《トロイアからのアエネアスの避難》〔図8〕には、父アンキセスを背負うアエネアスと、足元にその息子という親子三代が描かれている。ホメロスの『オデュッセイア』に基づく《ペネロペと求婚者たち》〔図7〕の母ペネロペに近づく青年は、旅から

帰還した父オデュッセウスと共に、母の求婚者たちの誅殺を企てる、息子テレマコスであるとタトライは説明している。プルタルコスの伝記に基づく、ローマと敵対するウォルスキ族の庇護を得るが、母や妻にローマの救済を説得される、ローマの将軍コ



図6. ルカ・シニョレツリ《家族にローマの救済を説得されるコリオラヌス》1509年頃 フレスコ、125.7×125.7cm ナショナル・ギャラリー、ロンドン



図6-2. コリオラヌス(右)と妻ウォルムニア(左)、その間に立つ息子



図7. ペルナルディーノ・ピントリッキオ《ペネロペと求婚者たち》1509年頃 フレスコ、125.5×152cm ナショナル・ギャラリー、ロンドン



図8. ジローラモ・ジェンガ《トロイアからのアエネアスの避難》1509年頃 フレスコ、126×138cm シエナ国立絵画館

リオラヌスを描くシニョレッリの壁画〔図6〕も、コロラヌスとその妻の間に、彼らの息子が配置され〔図6-2〕、親子間の使命の継承に焦点が置かれた、というタトライの主張は説得力がある。

失われたシニョレッリの2面の壁画のうち、《アペレスの誹謗》に関しタトライは、未来の権力者に正しい正義の運営を諭す寓話として描かれたという。《パーンの祝宴》については、大英博物館の素描が関連付けられており¹²、それによると、メディチ家のために描かれた、同主題の絵画（第二次世界大戦により焼失）とは異なり¹³、より牧神らしい祝祭的な光景が描かれていた。ジャクソンは、ギリシャ神話のパーンがローマ神話のファウヌスと同一視されたことを前提として、この壁画をカルプルニウス・シクルスの『牧歌』第1章における、「2人の羊飼いが、新しい君子のもとでの黄金時代の再来を告げる、ファウヌスの予言を見つける」という記述と結びつけている¹⁴。

このように、カメラ・ベッラの装飾は、家庭における美德のみならず、自ら築き上げた治世が、長子ボルゲーゼとその子孫たちに継承されていく、ペトルッチの世襲君主制への野望を反映していた。シエナ共和国において、政治的な範例となるために、ロτζァ・デッラ・メルカンツィアや、政庁舎の礼

拝堂（Anticapella）といった市民的な場を飾っていた共和制ローマの英雄たちは、カメラ・ベッラ装飾事業のような、婚礼を寿ぐ場においては、よりドメスティックな文脈で描かれていたのである。

2. ルカ・シニョレッリの協力者としてのジローラモ・ジェンガ

ヴァザーリの『芸術家列伝』（1550, 1568）によれば、ジェンガの画家としての教育はシニョレッリの工房で行われ、それは1494年6月、ジェンガの生地であったウルビーノのサント・スピリト信心会のステンダルド（旗幟）の制作に来ていたシニョレッリに、徒弟として父親に預けられたことから始まったとされている。ジェンガがマルケ地方やコルトーナ、オルヴィエートの事業においてシニョレッリに帯同していたというヴァザーリの主張は¹⁵、ジェンガとシニョレッリの名前が共に記載された次の2つの文書によって、現在確証が得られている。

1つ目の文書は1499年4月25日付のものであり、モンテオリヴェート修道院教会で締結された文書である。その契約の立会人の中に、シニョレッリとジェンガの名が記録されている。この文書は、シニョレッリがオルヴィエートの大聖堂造営局と、オ

ルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂の天井装飾の契約を成した日（1499年4月5日）から約3週間後に記されており、シニョレリがオルヴィエートからモンテオリヴェートへ一度戻ってきていることと、またジェンガが、オルヴィエートの装飾事業へも参加していた可能性を示す文書となっている¹⁶。

2つ目の文書は1508年6月26日に、イエージの善きキリスト信心会で、シニョレリが《キリストの十字架降下》を描く旨契約した文書であり、そこにはジェンガが立会人として記録されている。この契約は履行されず、1512年にロレンツォ・ロット（1480-1556）が引き継いだ¹⁷。

ジェンガは1504年にティモテオ・ヴィーティ（1469-1523）と共に、ウルビーノ大聖堂アッリヴァベーネ礼拝堂装飾の仕事をしている。続く1505-1508年にもウルビーノで活動している記録が断続的に見られる。1507年から1508年にかけて、シニョレリも同じマルケ州のアルチェヴィアで活動しており、この時彼が手がけた祭壇画にジェンガの手を見る研究者もいる。故にジェンガはアルチェヴィア、イエージといったマルケ州でのシニョレリの活動にも同行していたと思われる¹⁸。

シニョレリは1508年の8月にシエナのサンタ・マリア・デッラ・スカラ病院の臨時の山車（carro）のための絵画を描いたと思われる。故に、パラッツォ・デル・マニフィコのカメラ・ベッラ装飾事業のためのシエナ滞在は、早くは1508年頃から始まったのではないかとヘンリーは推測している¹⁹。

一方ジェンガのシエナ滞在についても、ヴァザーリが伝えている。彼によれば、ジェンガはペトルッチの目に留まり、彼の宮殿であるパラッツォ・デル・マニフィコに滞在し、その部屋で多くの絵画を描いたという²⁰。シエナの大聖堂造営局の記録によれば、ジェンガは1510年7月22日に初演奏された大聖堂のオルガンの扉絵に《キリストの変容》とペトルッチ家、大聖堂造営局の紋章を描いている²¹。

以上の記録に鑑みれば、ジェンガは、シニョレリがモンテオリヴェート大修道院回廊装飾事業か

ら、オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾事業へ移行する1499年には彼に帯同していた。礼拝堂装飾事業は断続的に1504年まで続いたことが記録されているが、おそらくジェンガとシニョレリの協力関係も断続的なものであっただろう。そしておそくとも1508年からジェンガはシニョレリのマルケ地方、シエナ滞在に帯同しており、カメラ・ベッラ装飾事業にも参加し、ペトルッチの愛顧を賜り、事業後も同地で仕事を得ていたと考えるべきだろう。

3. ジェンガの壁画と『リールの素描帖』

ジェンガはカメラ・ベッラ装飾事業において、《ハンニバルから捕虜を解放するファビウス・マクシムスの息子》〔図1〕と《トロイアからのアエネアスの避難》〔図8〕を描いている。この内、前者の壁画を『リールの素描帖』第379葉〔図2〕と結び付けたのは、フィオッコであった²²。フィオッコは、当初ジャコモ・フランチャ作と考えられていた『リールの素描帖』の第390葉に、「1516年にスルモーナにてヤーコポ・ダ・ポローニャが描いた」という自署を確認し、これを同じ出身地と名前を持つヤーコポ・リパンダと関係づけ、リパンダのコーパスに含めた。

続いて、バイアム・ショーが『リールの素描帖』第379葉と、ルーブル美術館と大英博物館にある2枚のファエンツァ産マヨリカ陶器〔図3〕との構図の一致を取り上げた。第379葉を見てみると、その左上部分には河川が流れる牧歌的な風景が描かれている。対して、参照元であるジェンガの壁画の該当部分には、ローマ軍の野営の情景が描かれているのである。マヨリカ陶器には、第379葉とほとんど同様の、河川が流れる風景が描かれている。このことから、バイアム・ショーは、ジェンガの図様よりも第379葉による図様の方が、マヨリカの陶工たちの間で流通していたとして、その可能性を論じている²³。

『リールの素描帖』は14枚の羊皮紙から成り、古



図9. ヤーコボ・ダ・ポローニャ『リールの素描帖』 Fol.391 (一部), 1516年頃 リール宮殿美術館、リール 14.3×16.5cm



図10. ルカ・シニョレリ《地獄に落ちる人々》の基底部分、1500-1504年頃 オルヴィエート大聖堂サン・プリツィオ礼拝堂



図11. ヤーコボ・リバンダ《アルプスを越えるハンニバル》1500-1509年 ローマ、カピトリニ美術館

典古代や聖書主題、さらには、海獣などの古代ローマの石棺彫刻に見られる図像〔図9〕が描かれた素描帖であった。そのため、古物研究家の顔を持つリバンダのコーパスに、この素描帖が含まれることを疑う声は少なかったように見える²⁴。リバンダは、巨大なトラヤヌス帝記念柱のレリーフを、記念柱の上から籠に吊り下ってまで模写し、それを壁画に応用したと伝えられるほど熱烈な古物研究家であっ

た²⁵。

ジェンガの壁画の主題を、プルタルコスの語る《ハンニバルから捕虜を解放するファビウス・マクシムスの息子》であると特定したタトライもまた、『リールの素描帖』の作者をリバンダと見なした上で、その照応関係について言及している。リバンダは1500年から1509年の間にローマのコンセルヴァトーリ宮殿（現カピトリニ美術館）に、古代ロー

マ人と古代カルタゴ人の間の重い敗戦の歴史—すなわち第二次ポエニ戦争—を題材にした壁画〔図11〕を描いているのであり、自らの壁画装飾事業の前後にカメラ・ベツラに親しんでいたとして、その可能性をタトライは取り上げ、そこからジェンガの壁画の主題を類推している²⁶。

アンジェリーニは、カメラ・ベツラ装飾事業にリパンダが貢献したであろう可能性を論じている。メトロポリタン美術館が所蔵するピントリッキオ工房による天井画のいくつかと、リパンダに帰属される作品の一致を取り上げ、リパンダはカメラ・ベツラ装飾事業の古物コンサルタント（consulente antiquario）であっただろうと見ている。アンジェリーニにとってジェンガの壁画と『リールの素描帖』との照応関係は、その証左であった。彼はリパンダがジェンガの壁画を『リールの素描帖』に写したのではなく、逆にリパンダがジェンガに下絵を提供したのだらうと述べている。複数のマヨリカ陶器が『リールの素描帖』の構図の方を参照していたことから、後者の方が原型として流通していたのであり、ジェンガの壁画は、『リールの素描帖』第379葉に描かれた古代の光景を、より複雑かつ明瞭に変形したものだらうとアンジェリーニは述べている²⁷。

4. ヤーコポ・ダ・ボローニャ≠ヤーコポ・リパンダ

アンジェリーニが「通常、パラッツォ・ペトルッチの古い歴史に依拠しているのはリールの絵であり、それは単なる模写に過ぎないと主張される」と、ことわりを入れている通り、筆者も『リールの素描帖』には1516年の明記があるため、この素描帖の作者がシエナに滞在した際に、ジェンガの壁画を改変を加えながら模写したと考える方が妥当に思える。第1章で述べた通り、カメラ・ベツラは1514年には、公に開かれていた。

また『リールの素描帖』の作者、ヤーコポ・ダ・ボローニャがリパンダと同一人物であるとする見方も留保が必要だらう。ファイエッティはヤーコポ・



図12. ヤーコポ・ダ・ボローニャ『リールの素描帖』Fol. 390（一部）、1516年頃 リール宮殿美術館、リール 14.3×16.5cm



図13. ルカ・シニョレツリ《死者の復活》（部分）1500-1504年 オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂

ダ・ボローニャのコーパスを確認する論文の中で、この人物がリパンダである可能性を否定している。彼女は『リールの素描帖』第390葉の一部〔図12〕に、シニョレツリのオルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂の《死者の復活》〔図13〕との類似を見ている。地面から這い出る人物が、地上の人物にひっぱりあげられているその様は、酷似している²⁸。私見によれば、第391葉〔図9〕の海獣およ

びトリトンとネレイデスを描いた図像も、同種のものがオルヴィエートでは描かれており〔図10〕、素描帖の作者はシエナだけでなくオルヴィエートも見聞していたように見える。したがって、作者がカメラ・ベッラ装飾事業に下絵を提供することはなかったにしても、シニョレツリやジェンガと交流があった可能性については否定できない。

またファイエッティは『リールの素描帖』が、オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂壁画を参照していたことから、素描帖の作者であるヤーコポ・ダ・ボローニャを、オルヴィエート大聖堂造営局の1485年から1495年の間の記録に断続的に現れる、ボローニャ出身のヤーコポと呼ばれる画家と同一視している²⁹。複雑ではあるが、リパンダ研究においても、近年までリパンダと、このオルヴィエートの人物は同一視され、彼の経歴はリパンダの経歴に換算されていた³⁰。アンジェリーニもリパンダにこの人物の経歴を重ねて論じている。

記録によると、オルヴィエートの住人であったボローニャ出身の画家ヤーコポが初めて大聖堂造営局の文書に登場するのは1485年であった。文書中ではmagister Jacobus de Bononiaとして大聖堂造営局にモザイク制作を依頼されている。ここで25歳以上の人物に与えられるmagisterの称号で呼ばれており、彼がウンブリアに滞在していたのは既に成熟した年齢であったとされる。特に注目には値するのは、1489年から1490年のベルジーノとのサン・ブリツィオ礼拝堂の契約に関する大聖堂造営局の覚書の中に、ヤーコポの名前が登場していることである。彼はまた、1489年から1491年の間、ピントリッキオと協働していたアントニオ・ダ・ヴィテルボと、大聖堂内陣のバルコーネを装飾するなど、何度か共に同地で仕事していたことが分かっている。1491年から94年の間は記録が欠落しており、1495年にコルポラーレ礼拝堂で仕事していたことが記録として残されている³¹。以上からオルヴィエート大聖堂の事業に従事していた画家ヤーコポは、1490年前後にはベルジーノやピントリッキオ周辺の画家と交流があった人物であることが分かる。

またこの人物に加えて、ピントリッキオ工房が従事した、教皇アレクサンドル6世のアパルタメント、「ボルジアの間」装飾事業（1492-1494）の支払いの記録（1493年）の中に現れる、「画家ヤーコポ（Jacobus pictor）」もアンジェリーニによって、リパンダと同一視された。このようにして、アンジェリーニは、リパンダを『リールの素描帖』の作者ヤーコポ・ダ・ボローニャ、そしてオルヴィエートの記録の中に現れる画家ヤーコポ、「ボルジアの間」装飾事業に従事した画家ヤーコポと同一視した上で、カメラ・ベッラ装飾事業に、リパンダが貢献した可能性を論じていたのである³²。

個々の人物については、確認してきたように、『リールの素描帖』の作者は、カメラ・ベッラのジェンガの壁画の他に、シニョレツリのサン・ブリツィオ礼拝堂壁画を参照しており、ヤーコポの名を持つ二人の画家はピントリッキオやその周辺の画家と、ローマやオルヴィエートで共に事業に従事していた。記録上、3人のヤーコポは活動地域や画家としての交流関係も近く見え、これらが一人の人物の経歴に集約されてしまうのも、無理のないことのように思える。

しかしながら近年の研究では、それぞれが別の人物であることが証明されている。マツァルーピの調査では、リパンダの名がヤーコポ・クリストーフォロ・ダ・ボローニャであり、ボローニャ出身にしてオルヴィエートの住人であった画家ヤーコポ、つまりヤーコポ・ロレンツォ・ダ・ボローニャとは別の人物であることが分かっている³³。また「ボルジアの間」に従事していた画家ヤーコポは、別の記録においてピサ出身であることが、カステッラーニの調査によって明らかにされた³⁴。

こうしてオルヴィエートや「ボルジアの間」装飾事業に携わっていたと考えられていたリパンダの初期の活動は、別の人物の活動であり、リパンダが『リールの素描帖』の作者であって、カメラ・ベッラ装飾事業に協力したという言説は、記録上は蓋然性が無いことがわかるのである。

おわりに

本稿においてはカメラ・ベッラ装飾事業のために描かれたジローラモ・ジェンガ作《ハンニバルから捕虜を解放するファビウス・マクシムスの息子》と『リールの素描帖』第379葉の照応関係をめぐって、本装飾事業にリパンダの貢献があったという言説の背景とその蓋然性を検討してきた。結果、これらの言説は別々の人物の記録の上に立つもので、文書記録上その蓋然性は低いと見なされる。しかしリパンダと『リールの素描帖』の作者が別人物であっても、それぞれの人物がジェンガやシニョレツリ、ピントリックオと交流していた可能性を否定する事実ではないことを考慮しなければならない。

リパンダがローマで従事していた壁画装飾事業は、カメラ・ベッラ装飾事業と同様に、古代の帝政、共和制ローマの歴史を主題としていたことが同時代の記録から分かっている。ローマのコンセルヴァトーリ宮殿壁画装飾事業（図11.1500-1509年、内二部屋消失、現カピトリーニ美術館）では第二次ポエニ戦争を題材としており、ファツィオ・サントーロ宮殿壁画装飾事業（1505-1507年頃、現ドーリア・パンフィーリ美術館アルドブランディーニの間、殆どが消失）では、トラヤヌス記念柱の図像を転用し、「トラヤヌスとカエサルの生涯」連作を描いていることが記録上分かっているが、そのほとんどが失われており、このことがリパンダのコーパスを体系化し、参照することを難しくさせているのだ³⁵。しかしながらリパンダのこれらのローマでの事業は、古代の伝記に倣って、古代の偉大な人物の行いを多くのエピソードで連続的に讃えるという、記念碑的規模での先駆的な例であり、16世紀における「絵画伝記」の本格的な発展への一歩であった。本論が取り扱ってきたペトルッチのパラッツォ・デル・マニフィコにおけるカメラ・ベッラ装飾も、こうしたプルタルコスやペトルカの古代の人物の伝記を踏まえた「絵画伝記」連作の流行と発展の中で、今一度考察するべきだろう。

謝辞

本研究を実施するにあたってロンドンのナショナル・ギャラリーでの実見調査では、アソシエート・キュレーターであるラウラ・ルウェルリン氏、特別研究員であるシャーロット・ウィテマ氏に、格別のご高配を賜りました。末筆ながら衷心よりお礼申し上げます。なお本稿は2021年度美術に関する調査研究助成（公益財団法人鹿島美術財団）による研究成果の一部です。

註

- 1 この両画家の古代風装飾の復興について、筆者は以前別の論考で論じている（森結「オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾の制作背景——腰壁装飾に見られるピントリックオ工房との関連から」『鹿島美術研究』（「美術に関する調査研究の助成」研究報告）、年報第35号別冊、2018年、75-87頁）。
- 2 シニョレツリの本装飾事業招聘の背景については、「シエナ、パラッツォ・デル・マニフィコのカメラ・ベッラ装飾事業—ルカ・シニョレツリの事業招聘をめぐって—」と題する報告書を『鹿島美術研究』に寄稿予定である。
- 3 ペトルッチの芸術政策については以下の研究がある。Philippa Jackson, *Pandolfo Petrucci: politics and patronage in Renaissance Siena*, Unpublished doctoral thesis, University of London, 2007; Philippa Jackson “The Ecclesiastical Policies of Pandolfo Petrucci: the Opera del Duomo, the Canons and the Curia”, *Kirchengeschichte und Religionsgeschichte*, 2017, pp. 85-108. ; 上村清雄「パンドルフォ・ペトルッチ時代のシエナ芸術研究—1500年前後の芸術奨励政策—」（2007～2008年度科学研究費補助金（基礎研究C 研究成果報告書））
- 4 Henry, Kanter, *Luca Signorelli: The Complete Paintings*, Rizzori, 2002, cat.91, p.224 ; ロンドンのナショナル・ギャラリーで2007年に開かれた展覧会「ルネサンスのシエナ都市の芸術」展では、壁画を含むカメラ・ベッラの装飾や調度品が展示された。（Luke Syson (eds.), *Renaissance Siena: Art for a City*, National Gallery, London, 2007, pp. 270-284）
- 5 18世紀のカルリとデッラ・ヴァッレによる記述が以下に掲載されている。M.Davis, *National Gallery Catalogues, the earlier Italian Schools*, London, 1961, pp. 472-79, 571-573.; Guglielmo Della Valle, *Lettere senesi sopra le belle arti*, III, Rome, 1784-86, 3, pp.319-322.
- 6 失われた《パーンの祝宴》は、ベレンソンが、18世紀の記述とシエナ派による素描（1509年以降、大英博物館、1946.0713.12）とを結び付け（Bernard Berenson, *The Drawings of the Florentine Painters*, Chicago, 1938, pp. 288-93.）、《スキピオの節制》については、カンターが同主題の素描（1509年以降、大英博物館、1866.0714.59）と結び付けている（Laurence B Kanter, *The late works of Luca Signorelli and his followers, 1498-1559*, Unpublished doctoral thesis, New York University, 1989, p.194, n.93.）

- 7 天井画の帰属と主題については以下の研究がある。
Fiorella Sricchia Santoro, "Il Palazzo del Magnifico Pandolfo Petrucci", *Prospettiva*, No.29, 1982, pp.24-31. 舗床タイルについては以下を参照。Elizabeth Miller and Alun Graves, "Rethinking the Petrucci Pavement", *Re-thinking Renaissance Objects: Design, Function and Meaning*, 2010, Vol. 24, No. 1, pp. 94-118.
- 8 ルネサンスにおける『凱旋』図像の形成と流布については以下の研究がある。京谷啓徳「ペトルルカ『凱旋』の図像をめぐる」『哲学年報』65号、2006年、91-118頁; また、カッソーネなどの婚礼絵画については以下を参照。岡田温司『もうひとつのルネサンス』平凡社、2007年、103-133頁; 《スキピオの節制》主題の流布については以下を参照。Cristelle Baskins "Famous Men: The Continenence of Scipio and Formations of Masculinity in Fifteenth-Century Tuscan Domestic Painting", *Studies in Iconography*, Vol. 23, 2002, pp. 109-136.
- 9 天井の銘文は、ジャクソンによってプブリリウス・シルスの格言に基づくものと明らかにされ、氏は同様の銘文が、ピントリッキオが1497年に制作した、サンタンジェロ城の《アレクサンデル6世の生涯》にも使用されていることを指摘している (Jackson, *Op.cit.*, 2007, pp.89-90)。
- 10 B.Rackham, *Victoria and Albert Museum, Department of Ceramics: Catalogue of Italian Maiolica*, London, 1940.; G. Agosti, "Precisioni su un Baccanale perduto del Signorelli," *Prospettiva*, no. 30, 1982, pp.70-77.
- 11 Vilmos Tátrai, "Gli affreschi del Palazzo Petrucci a Siena: Una precisazione iconografica e un ipotesi sul programma", *Acta Historiae Artium*, Vol. 24, 1978, pp. 177-183; Jackson, *op.cit.*, 2007, pp.75-104.
- 12 注6を参照。
- 13 焼失したシニョレリによるパーンを描いた絵画については、以下の研究がある。高階秀爾『ルネサンスの光と闇—芸術と精神風土』中央公論新社、1987年、114-126頁。秦明子「アポロンとパン：シニョレリ《パンの王国》についての一試論」『美術史』第176冊、2014年、323-336頁。
- 14 アゴスティは、テオクリトスの『牧歌』第一歌によるダフニスの死の物語を典拠とし、パーンに助けを得ながらも愛を軽んじた故アフロディーテに罰されたダフニスの物語が、結婚の戒めとして選定されたとする (Agosti, *Op.cit.*)。これに対しジャクソンは全体のプログラムをペトルッチの世襲君主制への野望と結び付け、《パーンの祝宴》を解釈している (Jackson, *op.cit.*, 2007, p.95.)
- 15 Giorgio Vasari, *Le vite de' più eccellenti pittori, scultori ed architettori scritte, nelle redazioni del 1550 e 1568*, a cura di R. Bettarini e P. Barocchi, Firenze S.P.E.S., già Sansoni, 1966-87, Vol.5, p. 347.
- 16 Tom Henry, "magister Lucas de Cortona, famosissimus pictor in tota Italia ... fecisse etiam, multas pulcherrimas picturas in diversis civitatibus et presertim Senis", M. Ascheri, G. Mazzoni and F. Nevola (eds.), *L'ultimo secolo della repubblica di Siena: arti cultura e società*, Atti del Convegno Internazionale di Studi, Siena, 2008, pp. 355-365, esp.364.
- 17 Tom Henry, *The Life and Art of Luca Signorelli*, Yale University Press, 2012, p.250.
- 18 シニョレリのアルチェヴィアでの活動について筆者は二篇の論文で論じている (森結「ルカ・シニョレリの装飾的傾向に関する一試論—アルチェヴィア、サン・フランチェスコ教会のための《フィリッピーニ祭壇画》を中心に—」九州藝術学会編『デアルテ』第32号、2016、43-62頁; 森結「ルカ・シニョレリ作《フィリッピーニ祭壇画》の聖ボナヴェントゥーラ像をめぐる考察」松尾金蔵記念基金論集『明日へ翔ぶ』第4号、2017、1-24頁)。
- 19 Henry, *op.cit.*, 2012, p.251.
- 20 Vasari, *op.cit.*, p.347.
- 21 Jackson, *op.cit.*, 2017, p.92.
- 22 Giuseppe Fiocco, "Jacopo Ripanda" *L'arte. Rivista di storia dell'arte medievale e moderna*, vol. 24, 1921, p. 85-89
- 23 J. Byam Shaw, "Iacopo Ripanda and Early Italian Maiolica" *The Burlington Magazine for Connoisseurs*, Vol.61, No. 352, 1932, pp. 18-20+25.
- 24 素描帖の作者をリバンダとみる言説を否定する研究者には、ファイエッティがいる (M. Faietti, "Jacopo da Bologna: per una ricostruzione del corpus dei disegni", *Bollettino d'Arte*, 62-63, 1990, pp. 97-110.)。
- 25 ヴォルテッラの人文主義者ラファエーレ・マッフェイの『都市ローマについての回想録 (Commentari Urbani)』(1506-1507年)にて言及されている。Vincenzo Farinella, *Archeologia e pittura a Roma tra Quattrocento e Cinquecento. Il caso di Jacopo Ripanda*, Torino, 1992, pp. 29-38, 205.)
- 26 Tátrai, *op.cit.*, p.12.
- 27 Alessandro Angelini, "Pinturicchio e i suoi: dalla Roma dei Borgia alla Siena dei Piccolomini e dei Petrucci", *Pio II e le arti. La riscoperta dell'antico da Federighi a Michelangelo*, a cura di A. Angelini, Cinisello Balsamo, 2005, pp. 483-553, esp.544-548.
- 28 Faietti, *op.cit.*, p.108.
- 29 *Ibid.*
- 30 Farinella, *op.cit.*, pp.92, 98, n.38.
- 31 Andrea Ugolini, "Jacopo Ripanda ai tempi di papa Borgia", *Arte Cristiana*, CIV, 892, 2016, pp. 21-32, esp.22, 30, n.20. ; 1499年にシニョレリがサン・ブリツィオ礼拝堂装飾を請け負う以前は、ペルジーノに事業が委託されていた。(森結「オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾事業1447-1504—ピッコローミニ家とモナルデスキ家の市政と事業への関与をめぐる政治的背景—」『美術史』美術史学会、第189冊、2020年、28-44頁。)
- 32 Angelini, *op.cit.*, pp.493, 549 no.29
- 33 Matteo Mazzalupi, "I fratelli Rimpatta: Novita biografiche dagli archivi Romani", *La Roma di Raffaele Riario tra XV e XVI secolo*, 2017, Vol.1, pp.135-149., esp.136.
- 34 Stefania Castellana, "«Jacobus pictor»: un equivoco documentario", *Ibid.*, pp.127-134.
- 35 V. Farinella, "Jacopo Ripanda a Palazzo Santoro", *Studi classici e orientali*, XXXVI, 1986, pp.105-112.

西南学院のヴォーリス建築

宮川 由衣

1. はじめに

西南学院は米国南部バプテスト派の宣教師チャールズ K. ドージャー (Charles Kelsey Dozier, 1879-1933、以下「ドージャー」) により、1916年に福岡市大名町 (現・福岡市中央区赤坂1丁目付近) に男子中学校として創立された¹。その後、1918年に西新町 (現・福岡市早良区西新) に移転し、1949年の大学開設を経て、2016年に創立100周年を迎えた。学院の西新への移転後、1921年に竣工した旧西南学院本館 (現・大学博物館) は、本学の草創期以来の象徴的な建物であるとともに、伝道活動に従事しながら、数多くのミッション・スクールや教会の建築を手がけたことで知られるヴォーリス (William Merrell Vories, 1880-1964) の初期における代表的建築として知られている。2006年からは大学博物館 (ドージャー記念館) として多くの人を迎え入れている。2015年には福岡県の指定有形文化財となり、2021年に竣工100周年を迎えた。今日学院において見ることができるヴォーリス建築は本建築のみであるが、かつてキャンパスには、このほかにも校舎や宣教師住宅など複数のヴォーリス建築があった。また、1937年には学院はヴォーリス建築事務所に依頼し、干隈校地での大学構想を発表している。しかし、その後、戦争の影響による国際関係の悪化により、敷地の取得にとどまった。結局この構想は実現には至らなかったが、戦後も学院には新たにヴォーリス建築が建てられ、2008年には株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所 (以下「ヴォーリス建築事務所」) の設計による新しい大学チャペルが竣工した。

本稿では西南学院のヴォーリス建築に関する記録や写真、ヴォーリス建築事務所所蔵の本学院関係資料、そして近年新たに確認された図面を紹介しながら、学院のヴォーリス建築の歴史を振り返りたい。

2. 西南学院の創立と西新校地での発展

1911年2月1日に福岡バプテスト夜学校を開設したバプテスト宣教団は、米国南部バプテスト連盟外国伝道局 (以下「ミッションボード」) に対して、福岡にキリスト教主義学校を設立すべきと提言した。同年4月20日、ドージャーはミッションボード宛てに、男子中学校設立承認と援助を訴える嘆願書を送った。1915年1月13日にミッションボードからの承認を受け、1916年4月に開設されることとなった。しかし中学校を開設するには、大名町の旧福岡バプテスト神学校の跡地では広さが不十分であった。学院は、学校開校地を探すなか、西新の海岸に適切な場所を見つけ、土地の所有者である電車会社 (九州電燈鉄道株式会社、のちに「東邦電力株式会社」と改称) の支配人と土地購入の交渉を行った。土地の購入が実現したのは、男子中学校が発足してから1年後の1917年3月のことであった。学院は大名町の校地の2倍の広さ2万㎡余りの土地を購入し、新たな発展の足掛かりを得ることになった。

新しい校地として購入した西新町の用地 (現在の大学東キャンパスの南側約半分) は、海岸に近い松原の一画で、鎌倉時代には元寇があり、防塁が築かれていた地であった。新しい校地を購入した1917年に、学院はヴォーリスと契約を交わし、校舎の建築が始まった。最初に着手した第1 (東) 校舎は、8

教室からなる木造2階建てで、1918年1月に完成した。そして、第1（東）校舎とほぼ同じ規模の第2（西）校舎の建築に着手し、1919年4月に完成し、学院の新しいスタートが切られた²。

1919年12月末、ミッションボードから施設建設資金の一部として15,000ドルが届くと、学院は早速、念願の本館建設に着手し、ヴォーリズに学校側の要望を入れた設計の依頼を行った。1920年9月9日、教職員・生徒が列席して、定礎式が行われた（図1）。本館の「建築仕様書」（図2）の冒頭に「一般ノ約件」が記され、以降に建築各部に関する工事規定や工法が詳述されている³。「一般ノ約件」では工事請負人の取るべき行動規範が列挙されており、第15条には、日曜日の作業の禁止、所定の場所以外での喫煙の禁止、飲酒や野卑なる談話の絶対禁止がはっきりと掲げられ、キリスト教主義に基づいて活動したヴォーリズらしさがうかがえる。本館は1921年3月に完成した（図3）。本館の建物は、大正期のヴォーリズによるレンガ造り建築を代表するものである（図4、5）。ジョージアン・スタイルに由来する米国の伝統的なコロニアル・スタイルを採り、大きなガラス窓を配するなど近代的改良が加えられている。軒を飾るコーニス（軒蛇腹）、1階上部でファサードを分割する水平帯（ストリングコース）、そして屋根の正面中央部には設計当初ベディメント（三角破風）が置かれていた。また、3階は吹き抜けになっており、2階講堂の八角形の柱列によって支持されている。

西新校地には、このほかにもヴォーリズの設計による建物が建てられた。ヴォーリズ建築事務所⁴所蔵の1920年から1931年に制作された西南学院建築図面が52点確認されている（図6-7、表1）。1918年から1923年までに西新校地に建てられた建物は下記の表のとおりである（図8、表2）。このうち、ヴォーリズ設計の図面が確認できる建物は、1921年竣工の本館（図3）、物理化学実験室（図9）、院長住宅（ドージャー邸）（図10）、宣教師住宅（図11）、高等学部寄宿舍（図12）、1922年竣工の高等学部校舎（図13）、そして1923年竣工の中学部寄宿舍（図



図1. 旧学院本館定礎式（1920年）



図2. 西南学院旧本館・講堂のための『建築仕様書』 1920年、西南学院史資料センター所蔵



図3. 完成した旧学院本館（1921年竣工）

14)、宣教師住宅（図15）、神学科仮校舎（図16）、神学科寄宿舍（図17）の10棟である。

また、学院から独立した施設であるが、学院と関わりの深い西南学院バプテスト教会の教会堂もヴォーリズの設計による建物であった⁵。学院の西

新移転に伴い、教員、学生、特に寄宿舍の学生たちのために、キャンパス内か、またはその近くに教会を求める声は大きかった。1920年9月の学院常任理事会において学院教会の設立の件が議題となり、1922年6月19日、理事会は、学院としてではなく有志により教会を設立するよう決定した。そして、12月2日に教会組織会議が開催され、正式に西南学院バプテスト教会の設立が認可され、初代牧師にドージャーが就任した。教会の設立後しばらくは、礼拝は学院本館の講堂やほかの施設で行われており、独立した教会堂建設は1932年に同教会創立10周年記念事業として募金が始まった。これに先立ち、1931年10月1日にヴォーリズの設計による西南学院バプテスト教会の教会堂の設計図が作成されている（表1）。1933年2月26日に定礎式が行われ、同年10月17日に教会堂が竣工し、献堂式が行われた（図18、19）。

以上の建物のヴォーリズ建築事務所所蔵の図面に加え、西南学院所蔵の建築図面として、1936年6月8日付の図面2点「中学校校舎平面図」、「図書館・文科校舎平面図」（図20、21）が新たに確認され、2022年にデジタル化を行った。これらの図面は西新校地に建築が予定されたものであったが、この図面が作成された翌年1937年に干隈校地での西南学院バプテスト大学の構想が持ち上がったことで、実現を見送られたものと推測される。次に、1937年に計画された西南学院バプテスト大学構想について見ていきたい。

3. 西南学院バプテスト大学構想

1934年、世界バプテスト大会が開かれ、これに出席したミッションボード総主事マドレーらが学院に來校し、学院の将来計画等について協議が行われ、大学設立についても取り上げられた。米国南部バプテスト連盟の教育関係者と数回にわたる懇談・協議の結果、学院は1937年に大学設立の方針を固め、郊外に約132,000㎡（4万坪）の敷地を求めて、理想的な一大学園の建設を計画した。その候補地とし

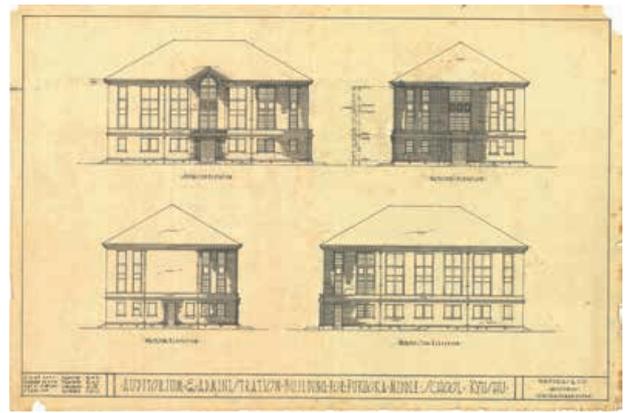


図4. 旧学院本館立面図 1920年、一粒社ヴォーリズ建築事務所所蔵

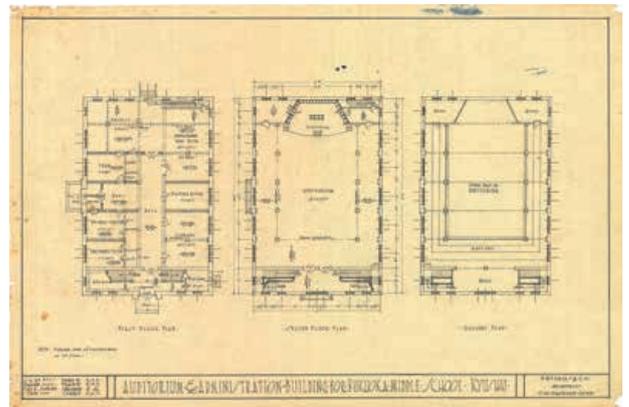


図5. 旧学院本館平面図 1920年、一粒社ヴォーリズ建築事務所所蔵

て、早良郡田隈村干隈（現・福岡市城南区干隈）の高台地区が選ばれ、買収が進められた。

1937年7月、学院はヴォーリズ建築事務所に依頼し、西南学院バプテスト大学の構想（図22）を明らかにした。ヴォーリズ建築事務所では本構想の関係図面11点が確認されている。2022年にヴォーリズ建築事務所の協力のもと、これらの図面のデジタル化を実施した。大学構想については、これまで鳥瞰図絵はがき（図23）および校舎配置図の写し（『西南学院七十年史 上巻』397頁掲載）の2点のみが確認されていた。後者は、今回デジタル化を行った校舎配置図の原図をもとに、施設名称を日本語で記載したものである。本構想関係図面のデジタル化により、これまで不明であった施設の内容が明らかとなった。11点の図面の内容は表（表3）のとおりである。

これらの図面はいずれも鉛筆書きされたトレーシングペーパーであり、このうち校舎配置図には黄緑

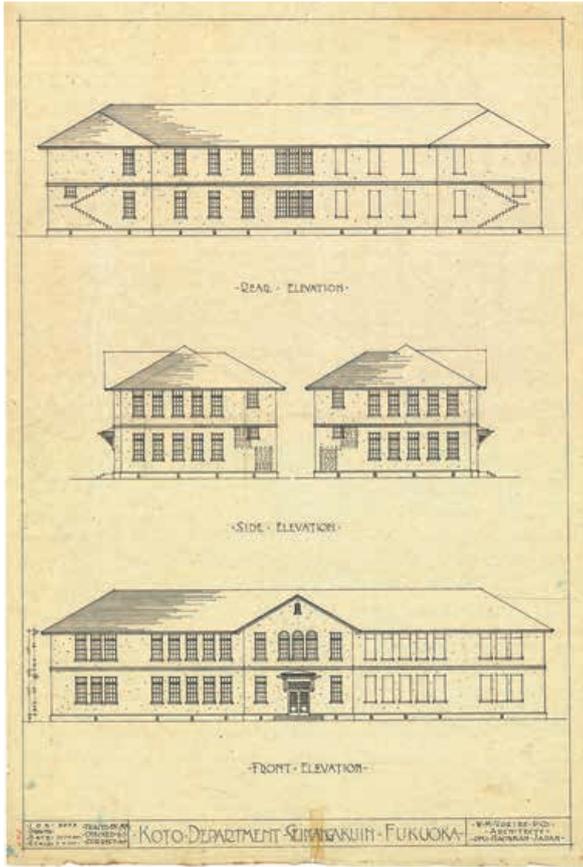


図6. 高等学部立面図 1920年, 一粒社ヴォーリス建築事務所蔵

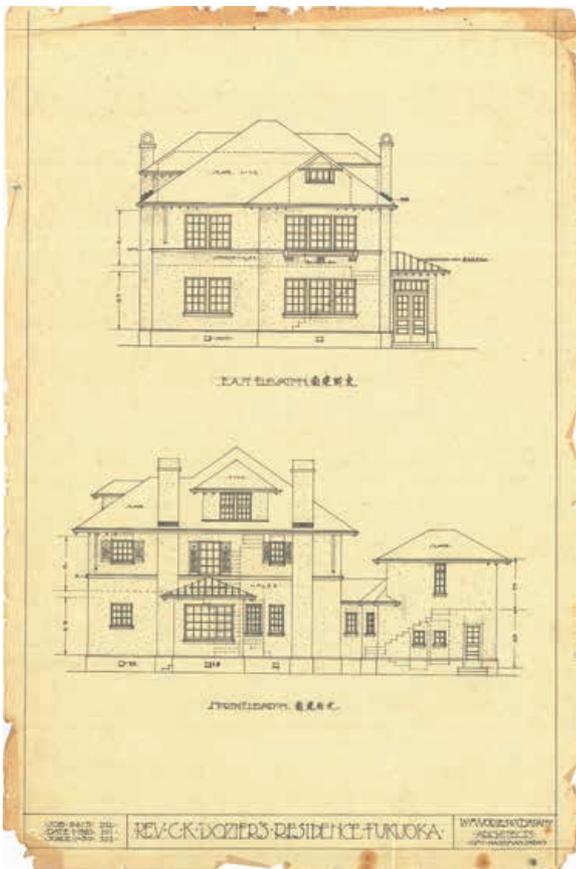


図7. ドージャー邸立面図 1920年, 一粒社ヴォーリス建築事務所蔵

表1 西南学院建築図面リスト (1920-31年)

No.	作品ナンバー	建 物 名	日 付
1	3261	西南学院本館1階、2階、2階ギャラリー平面図	1920年 5月 4日
2		西南学院本館 南立面、東立面、西立面、北立面図	1920年 5月 4日
3		西南学院本館 横断面図、縦断面図、基礎伏図、屋根伏	1920年 5月 4日
4		西南学院本館 建具詳細図、講壇机詳細図	1920年 5月13日
5		西南学院本館 矩計図、階段等部分詳細図	1920年 5月16日
6		西南学院本館 ポーチ詳細図	1920年10月29日
7		西南学院本館 吊灯具詳細図	1920年11月 9日
8	3258	西南学院 高等部建築配置図	記載なし
9		高等部校舎1階、2階平面図	1920年 3月12日
10		高等部校舎 正面図、背面図、側面図	1920年11月10日
11		高等部寄宿舎 1階、2階平面図	1920年 3月13日
12		高等部寄宿舎 正面図	1920年 3月13日
13		中学部寄宿舎 1階、2階、3階平面図、正面図	1920年12月21日
14		神学部校舎 1階、2階平面図	1920年 3月12日
15		神学部校舎 正面図、背面図、側面図	1920年11月15日
16		神学部寄宿舎 1階、2階平面図	1920年12月 1日
17		神学部寄宿舎 3階平面図、屋根伏図	1920年12月 1日
18		神学部寄宿舎 正面図、背面図、側面図	1920年12月 1日
19		物理化学実験室計画図	1920年11月30日?
20		物理化学実験室計画図 各部詳細図	1921年 1月18日
21	物理化学実験室計画図 各部詳細図	1921年 1月20日	
22	8615	C.K. ドージャー邸 1階、2階平面図	1920年 1月10日
23		C.K. ドージャー邸 屋根階平面図、基礎伏図	1920年 1月13日
24		C.K. ドージャー邸 東立面図、北立面図	1920年 1月13日
25		C.K. ドージャー邸 西立面図、南立面図	1920年 1月13日
26		C.K. ドージャー邸 A断面図、B断面図	記載なし
27		C.K. ドージャー邸階段、各部詳細図	1920年 1月20日
28		C.K. ドージャー邸窓、各部詳細図	1920年 1月20日
29		C.K. ドージャー邸 屋根伏図、建具詳細図	1920年 1月13日
30		C.K. ドージャー邸 1階、2階平面図	記載なし
31		C.K. ドージャー邸 東立面図、北立面図	記載なし
32	C.K. ドージャー邸 西立面図、南立面図	1920年11月 2日	
33	8626	M.Y.L. ボーワー邸 1階、2階平面図	1920年 9月 8日
34		M.Y.L. ボーワー邸 基礎伏図、屋根伏図	1920年 9月 8日
35		M.Y.L. ボーワー邸 正面図、側面図	1920年 9月 8日
36	8627	G.W. ボールデン邸 1階、2階平面図	1920年10月 6日
37		G.W. ボールデン邸 基礎伏図、屋根伏図	1920年10月 6日
38		G.W. ボールデン邸 正面図、背面図	1920年10月 6日
39		G.W. ボールデン邸 側面図	1920年10月 6日
40		G.W. ボールデン邸 1階、2階平面図	1920年10月 6日
41		G.W. ボールデン邸 基礎伏図、屋根伏図	1920年10月 6日
42		G.W. ボールデン邸 正面図、背面図	1920年10月 6日
43		G.W. ボールデン邸 側面図	1920年10月 6日
44	1295	西南学院教会 1階平面図	1931年10月 1日
45		西南学院教会 東立面図、西立面図	1931年10月 1日
46		西南学院教会 北立面図	1931年10月 1日
47		西南学院教会 南立面図	1931年10月 1日
48		西南学院教会 A断面図	1931年10月 1日
49		西南学院教会 B断面図、C断面図	1931年10月 1日
50		西南学院教会 矩計図	1931年10月 1日
51		西南学院教会 玄関等詳細図	1931年10月 1日
52	西南学院教会 建具詳細図	1931年10月 1日	

山形政昭氏 (大阪芸術大学名誉教授) 提供の情報をもとに作成

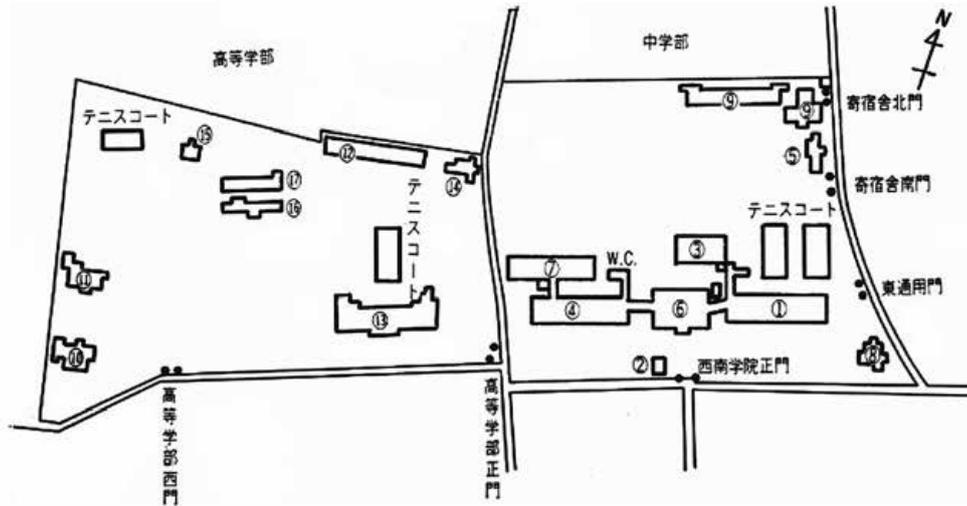


図8. 西新校地内の施設配置図 (1918-1923年)

色の彩色が施されている (画像24、25)。図面には1937年5月1日から5月10日の日付が記されている。また、作図およびトレスを行った所員たちのサインが残されており、4名の所員が作図およびトレスを行ったことがわかる。ヴォーリズの建築図面には、現場で描かれたであろう原寸図などを除き、多くの実施設計図に担当した所員たちのサインが残されている。しかし、それらのサインにはごく初期を除き、W.M.V.というヴォーリズのサインはほとんどみとめられない。これはヴォーリズ建築事務所の特徴の一つである。保管されている図面の中にはヴォーリズが描いたと思われるフリーハンドのエスキスが含まれているものがあり、こうしたエスキスをもとにチーフデザイナーやドラフトマンたちがデザインし、実施図として仕上げるといった流れが、ヴォーリズが率いた建築事務所の特徴的な設計手法であった⁶。

干隈校地に建設が予定されていたチャペルは、西新校地のチャペル (現・大学博物館2階講堂) よりも多くの人数を収容できる縦長の空間であった。配置図 (図22) の左上には小学校の建設予定地がみとめられる。配置図右側の住宅が並ぶ一角には国際会館があり、1937年に早くも国際交流を見据えた施設が準備されていたことは注目される。また、ひときわ目を引く丸いドーム型の建物は、野外劇場であ

表2 西新校地内の施設一覧 (1918-23年)

No.	施設	建物名	日付
1	中学部	第1 (東)校舎	1918年1月
2		門衛所	1918年1月
3		雨天体操場	1918年1月
4		第2 (西)校舎	1919年4月
5		中学部舎監住宅	1921年3月
6		本館	1921年4月
7		物理化学実験室	1921年8月
8		中学部長住宅	1922年6月
9		寄宿舎「百道寮」および炊事場	1923年3月
10	高等学部	院長住宅	1921年8月
11		宣教師住宅	1921年8月
12		寄宿舎「玄南寮」	1921年8月
13		高等学部校舎	1922年4月
14		高等学部長住宅	1922年6月
15		宣教師住宅	1923年6月
16		神学科仮校舎	1923年6月
17		神学科寄宿舎	1923年6月

太字はヴォーリズ設計の図面が確認できる建物

る。本構想が実現していれば、この場所は劇やコンサートの上演など本学の文化芸術の中心になっていたと考えられる。

しかし、日中戦争が始まり、大学設立計画は中止を余儀なくされた。戦時中は食糧難のため、干隈校地は学生・生徒の勤労作業の場となり、農作物が栽培された。西南学院バプテスト大学構想は実現に至らなかったものの、戦後、干隈校地にはヴォーリズ建築事務所的设计による神学科の校舎や施設が作ら



図9. 物理化学実験室 (1921年竣工)



図10. 院長住宅 (ドージャー邸) (1921年竣工)



図11. 宣教師住宅 (1921年竣工)



図12. 高等学部寄宿舍 (玄南寮) (1921年竣工)



図13. 高等学部校舎 (第1校舎) (1922年竣工)



図14. 中学部寄宿舍 (百道寮) (1923年竣工)



図15. 宣教師住宅 (1923年竣工)



図16. 神学科仮校舎 (1923年竣工)



図17. 神学科寄宿舎 (1923年竣工)



図18. 西南学院バプテスト教会 (1933年竣工)



図19. 西南学院バプテスト教会内観

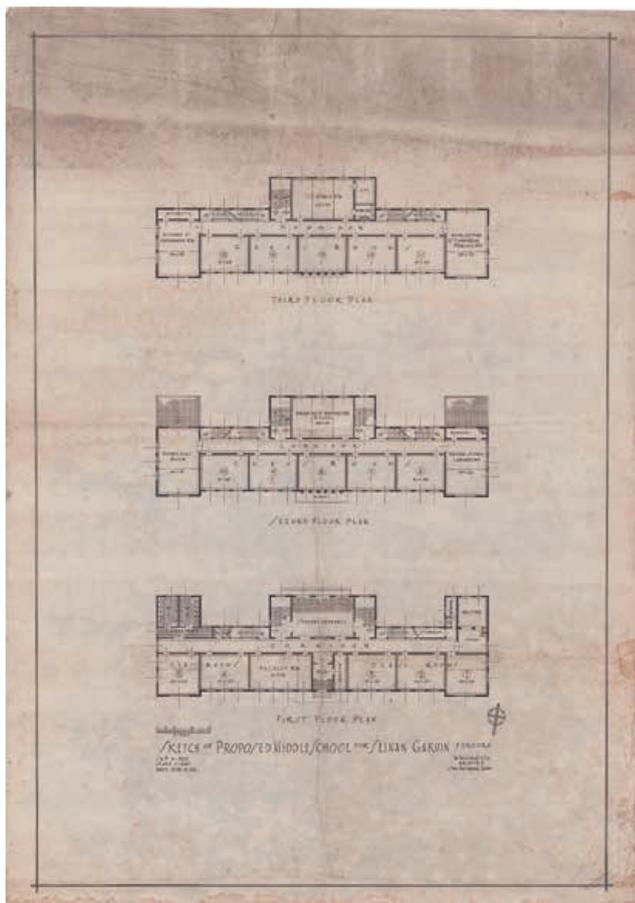


図20. 中学校校舎平面図 1936年6月8日, 西南学院史資料センター所蔵

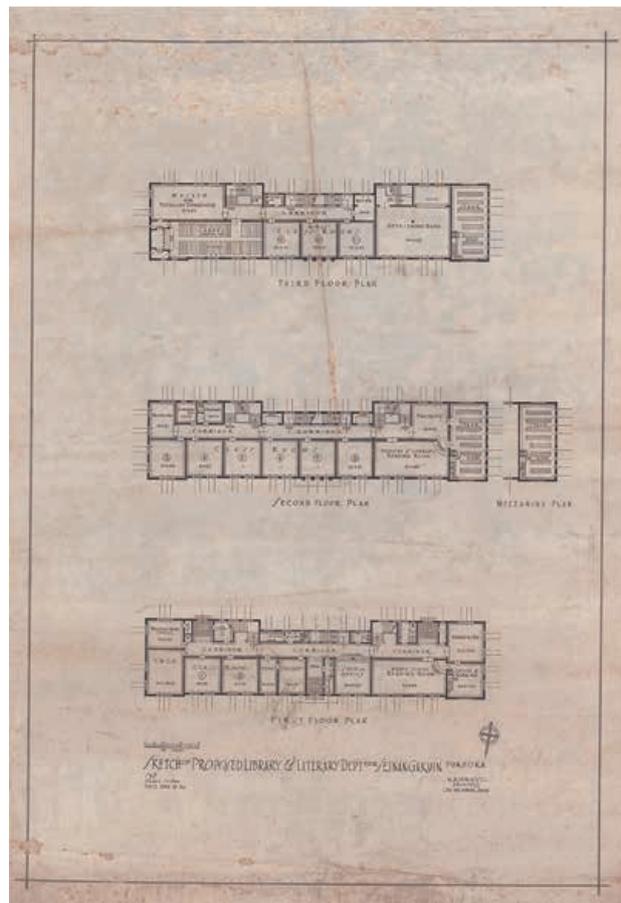


図21. 図書館・文科校舎平面図 1936年6月8日, 西南学院史資料センター所蔵

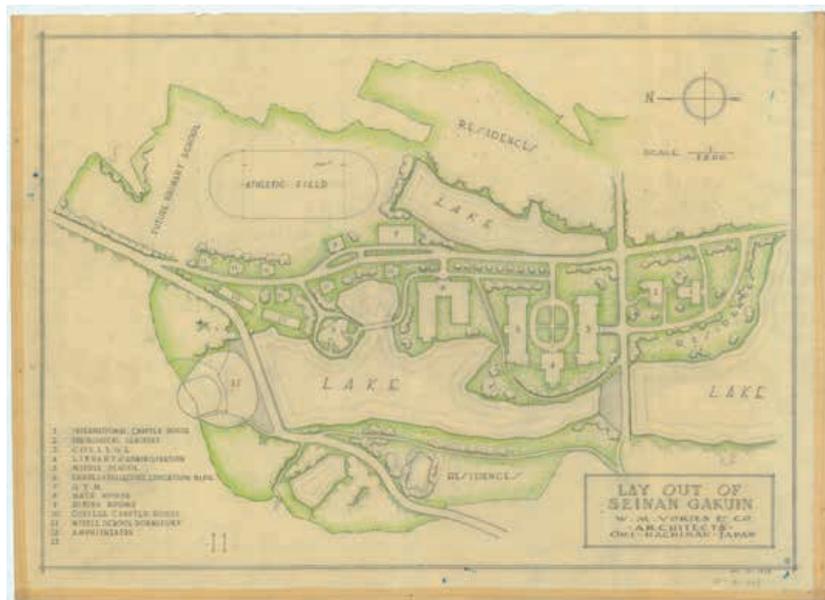


図22. 西南学院バプテスト大学配置図 1937年, 一粒社ヴォーリス建築事務所所蔵

西南学院バプテスト大学配置図

(施設名称は『西南学院七十年史 上巻』、397頁を参照)

1. 国際会館
2. 神学科
3. 大学
4. 図書館及び本部
5. 大学予備教室
6. チャペル宗教教育館
7. 体育館
8. 浴場
9. 食堂
10. 大学学友館
11. 高等学校寄宿舎
12. 野外劇場



図23. 西南学院バプテスト大学鳥瞰図絵はがき 1937年、西南学院史資料センター所蔵



図24 西南学院バプテスト大学配置図 一粒社ヴォーリス建築事務所所蔵 (2022年筆者撮影)



図25 同部分拡大図

れる。次節では戦後学院に建てられたヴォーリス建築を見ていく。

4. 戦後学院に建てられたヴォーリス建築

1923年に高等学部開設された神学科は、1938年に学院の組織から独立、西南神学院への改称のち、1947年に西南学院専門学校神学科を開設した。そして1949年の大学発足に伴い、学芸学部神学専攻となったのち、1951年に文商学部神学専攻に改称さ

れた。神学科は福岡市大名町にあった福岡バプテスト神学校の校舎を西新校地内に移築して使用していたが、建物の老朽化と図書収容の問題から干隈校地に新築移転することになった。そして、1951年10月に神学寮(図26)、続いて1955年7月に神学科校舎(神学館)が完成した(図27)。その後、干隈校地にはグラウンドや修養会館が建てられたが、1999年に干隈校地は福岡市に譲渡売却され、神学部は2001年に再び西新に移転した。西南学院史資料センターに保管されている干隈校地の施設関係図面50点

表3 西南学院バプテスト大学構想関係図面

No.	建物名・図面内容	日付	サイン	スケッチナンバー	縮尺
1	大学	1937年5月1日	DR=M.S. TR=S.S.	SK#A-305-2	1/200
2	中学校	1937年5月1日	DR=M.S. TR=K.TO.	SK#A-305-1	1/200
3	チャペル宗教教育館	1937年5月3日	DR=M.S. TR=S.S.	SK#A-305-5	1/200
4	図書館	1937年5月5日	DR=S.S. TR=S.S.	SK#A-305-4	1/200
5	体育館	1937年5月3日	DR=M.S. TR=S.S.	SK#A-305-6	1/200
6	食堂	1937年5月4日	DR=M.S. TR=K.TO.	SK#A-305-7	1/200
7	神学科	1937年5月5日	DR=S.S. TR=S.S.	SK#A-305-3	1/200
8	国際会館	1937年5月5日	DR=S.S. TR=S.S.	SK#C-859-1	1/200
9	大学学友館	1937年5月3日	DR=M.S. TR=K.TO.	記載なし	1/200
10	中学校寄宿舎および浴場	1937年5月5日	DR=T.K. TR=記載なし	SK#772	1/200
11	配置図	1937年5月10日	記載なし	SK-A-305	1/1200

・サインの略号は以下の通り。

DR = drawn, TR = tracedの意。

M. S. = 佐藤正夫, S. S. = 不明, K. TO. = 豊田清次, T. K. = 川野徳恵

表4 西南学院バプテスト大学構想関係図面

No.	スケッチナンバー	建物名	日付	シート枚数
1	記載なし	定礎文字	記載なし	2
3	A345	神学部	1949年12月5日	1
4	A348	神学科および寄宿舎	1950年4月24日～5月15日	5
5	A7007	寄宿舎	1949年10月21日～1950年10月27日	14
6	A3318	神学科	1952年5月20日～6月2日	8
7	記載なし	神学部校舎増築工事	1954年12月6日	1
8	記載なし	神学館平面図	記載なし	1
9	記載なし	神学科	1954年5月24日	1
10	記載なし	神学科（パース）	記載なし	1
11	A3356	神学科	1954年8月12日～10月18日	4

吉村克幸氏（株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所）提供の情報をもとに作成

のうち、定礎文字の図案を含め、38点がヴォーリズ建築事務所作成の青焼き図面である（図28-30、表4）。

また、西南学院バプテスト教会は1950年1月18日に教会の新会堂建設について決議し、1954年9月26日に定礎式が行われ、翌1955年6月19日に新会堂の献堂式が挙行された。新会堂は1933年竣工の旧会堂と同じくヴォーリズ建築事務所の設計であり、施工は辻組が手がけ、鉄筋コンクリート造りの2階建て、塔屋を備えた会堂であった（図31）。新会堂の献堂式には近江八幡からヴォーリズも訪れている（図32）。

1949年の大学発足後、懸案となっていた大学講堂の建設は、ミッションボードからの全額援助を得て建設されることとなった。1953年11月にミッションボード総主事B.J.コーセン（1909-85）を迎えて起工式が行われ、前総主事M.T.ランキン（1894-1953）の功績を称え、この講堂を「ランキン・チャペル」と命名すると発表した。チャペルは1954年9月に完成し、10月10日に献堂式が行われた（図33）。ランキン・チャペルは旧学院本館の講堂と同じくヴォーリズによる設計で、地下1階、地上3階建てで、座席数1,500席、チャペルセンター3室を備えていた。当時、1,000人以上を収容できる大



図26. 干隈校地神学寮（第1神学寮）（1951年竣工）



図27 干隈校地神学科校舎（神学館）（1955年竣工）（左）校舎、（右）神学寮



図28. 干隈校地神学館外観 1952年頃（日付記載なし）、西南学院史資料センター所蔵

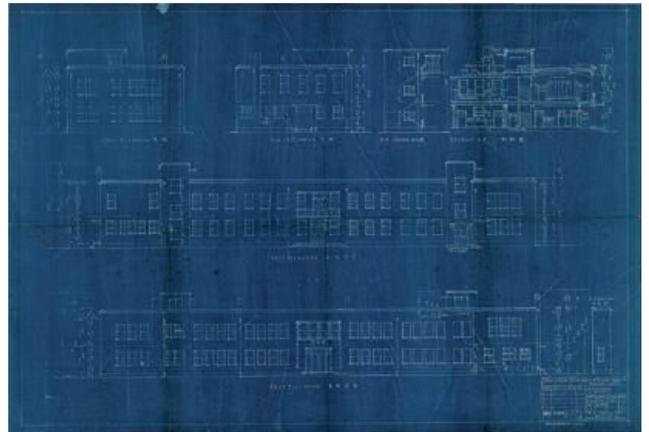


図29. 神学館設計図 1952年、西南学院史資料センター所蔵



図30. 干隈校地神学寮定礎文字 1950年頃（日付記載なし）、西南学院史資料センター所蔵



図31. 西南学院バプテスト教会新会堂（1955年竣工）

ホールは少なかったため、学外の催し物にもしばしば利用された。

旧学院本館の講堂は戦前学院の本館・講堂として使用してきたが、戦後は、新制の中学、高校の講堂となった（図34）。当時、建物の一部が改築され、隣接する中学、高校の校舎と接続していた（図35）。中学、高校の百道浜校地への移転決定に伴い、2001年10月に学院は院長を委員長とする学院将来計画委員会のもとに、高校講堂利用計画検討委員会を設置し、その利用法について検討を行い、博物館設置に向けて協議が行われた。大学は、2004年4月に大学博物館設置準備委員会を設け、博物館開設に向けた具体的な検討を開始し、これと並行して、ヴォーリス建築事務所に保管されていた設計図（図4-5、表1）をもとに、同年8月から、復元・補強のための改修工事を行い、翌2005年7月に工事が完了した（図36-37）。この建物は、2000年に福岡市都市景観賞を受賞し、2004年に福岡市の、2015年には福岡県の指定有形文化財となった。

1954年に建てられたランキン・チャペルは、老朽化により建て替えられることとなり、2003年11月に大学新チャペルの建設に向けてチャペル建設委員会が発足した。コンペ（設計協議）の結果、ヴォーリス建築事務所が最優秀案に決定した。当初の基本プランは、オーヴァル型であったが、チャペルの建設予定地に見つかった元寇防塁の遺跡やパイプオルガンの音響が考慮された結果、矩形へと変更された⁷。また、設計の過程で主に財政的な理由から、外壁のレンガについて、旧本館と同じ「イギリス積み」から見せかけだけの「イギリス調積み」への仕様変更の提案があったが、外壁が建学の精神にも通じるヴォーリス建築のレンガ職人の手業を視覚的にも触覚的にも日常的に感じてもらえる象徴的なオブジェであるがゆえに、原案復帰を訴えた結果、委員会の要求が認められた。

新築されるチャペルの外壁のレンガの色調は、旧本館に使われているレンガの色調を踏襲している⁸。しかし、建設当時と今とではレンガの焼成温度や使用する土、そして窯の違いにより、同じ質感と色調



図32. 西南学院バプテスト教会新会堂献堂式 1955年、ヴォーリス（左端）とヴォーリス建築事務所所員、個人蔵



図33. ランキン・チャペル（1954年竣工）



図34. 旧本館講堂(中学・高校講堂) 大学博物館（ドージャー記念館）への改修工事前（2003年撮影）



図35. 旧本館外観（2003年撮影）



図36. 復元・改修工事後の旧本館講堂（現・大学博物館）



図37. 復元・改修工事後の旧本館（現・大学博物館）外観



図38. 大学チャペル（2008年竣工）



図39. 大学チャペル内観

のレンガを作ることが不可能であった。このため、レンガの製作過程において、窯の焼成温度を低く設定し、色調に赤みを増す工夫や、火の状態をあえて不安定にして当時の窯の状態に近づけることによって、くすぶり感や自然な色ムラを出すことが試みられた。また、ラフなテクスチャーを得るために、成型の工程で一つ一つのレンガの形を手作業で崩していく方法が採用された。そして、2008年4月に2階建、総席数904席からなる新チャペルが完成した（図38、39）。

5. おわりに

福岡でキリスト教主義の男子中学校の設立を目指し、1916年に福岡市大名町で学院を創立したドージャーのもと、学院は1917年に西新の地で新たに歩

み始めた。このとき、校舎建設の契約を交わしたのがヴォーリズであった。その後、本館をはじめとする多くのヴォーリズの設計による建物が草創期の学院を彩っていった。また、1937年に中学部、高等学部につき、大学設立の方針を固めると、理想的な学園の建設を目指し、学院が新たに取得する干隈校地での大学構想を託したのもヴォーリズ建築事務所であった。本構想は、惜しくも戦争の影響により実現に至らなかったが、戦後も学院の発展はヴォーリズ建築とともにあった。

1921年竣工の旧本館は、学び舎として、そして祈りの場として、今日に至るまで常に学院の中心にあった。そこには、建築を通して、キリスト教主義に基づく理念を实践したヴォーリズの信仰が息づいている。それは、創立者ドージャーの言葉、「西南よ、キリストに忠実なれ」という本学の建学の精神

とも共鳴するものである。関東大震災後、レンガ造りによる建物の建設が行われなくなったため、1921年竣工のこの建物は、現存するレンガ造りによるヴォーリズ建築として文化財としての価値を有している。文化財として次の世代へと継承していくと同時に、本学のキリスト教主義を象徴する建物として、創立者ドージャーとヴォーリズを繋いだキリスト教の信仰の理念とともに受け継いでいくことが望まれる。

以上見てきたように、創立間もない頃より、学院はヴォーリズとその建築と深い関わりをもってきた。本稿では現存する写真や図面を頼りに、可能な限り、本学院におけるヴォーリズ建築の全貌を明らかにすることを目指したが、建物の多くは現存せず、写真などの資料も十分ではないため、不明な点も少なくない。創立者ドージャーがヴォーリズに校舎の建築を依頼した経緯や両者のやり取りについて、今後の資料収集、調査を通して明らかになることを期待している。

図版出典

図1-3, 9-21, 23, 26-31, 33-39 西南学院史資料センター所蔵

図4-7, 22 一粒社ヴォーリズ建築事務所所蔵

図8 西南学院百年史編纂委員会編『西南学院百年史 通史編』2019年、65頁。

図24-25 一粒社ヴォーリズ建築事務所所蔵、2022年筆者撮影

図32 個人蔵

註

¹ 西南学院の創立は、私立西南学院設立が福岡県知事から認可された1916年を起点として数えられている。

- ² 第1（東）校舎（1918年竣工）と第2（西）校舎（1919年竣工）の図面等設計に関する記録は確認できていない。1917年にヴォーリズ建築事務所に校舎の建築が依頼されたことから、2棟の建築にヴォーリズが関わっている可能性がある。
- ³ 旧学院本館（現・ドージャー記念館／大学博物館）の保存・修復工事（2005年竣工）は、この仕様書に基づき行われた。
- ⁴ ヴォーリズ建築事務所は明治の終わり頃、ヴォーリズ合名会社の名で本格的に活動を開始し、戦後は近江兄弟社内の建築部という位置付けで設計を行っていた。しかし経営上の理由から、建築部門は廃止されることとなり、1961年に経営的に独立し、大阪を本社とする一粒社ヴォーリズ建築事務所が発足した。それまでに描かれた膨大な建築図面は、独立後も近江八幡の近江兄弟社に保管されていたが、1975年に大阪芸術大学建築学科に移され、山形政昭氏のもとで調査研究が開始された。その後、2014年にヴォーリズ建築事務所に移されることとなるが、公益財団法人近江兄弟社から、浅小井校地にヴォーリズの残した史料を編纂するために史料館をつくるので共同で使わないかとの申し出があったことから、現在近江八幡で保管されている（一粒社ヴォーリズ建築事務所編『ヴォーリズ建築図面集』創元社、2017年、350頁）。
- ⁵ 西南学院バプテスト教会の創立については以下の文献を参照。西南学院バプテスト教会創立80年記念史編集委員会編『西南学院バプテスト教会創立80年記念史』2002年。
- ⁶ 一粒社ヴォーリズ建築事務所編、前掲書、350-351頁。
- ⁷ 基本プランに設計変更を迫った要因は以下の3点であった。(1) 元寇防塁遺跡が当初の想定よりさらに12m北に位置していたこと、(2) オーヴァル型内部に収まった扇形空間がパイプオルガンの音響に不向きであったこと、(3) 講話者と会衆の視覚的接近や一体感の重視から音響優位へと設計の視点がシフトしたこと。西南学院大学チャペル新築工事の経緯については以下の論文を参照。後藤新治「卵からキューブ——西南学院大学チャペル新築工事の経緯——」西南学院百年史編纂準備委員会編『西南学院史紀要』vol.4、2009年、13-29頁。
- ⁸ 西南学院大学チャペルの設計については以下の論文を参照。中山献児「西南学院大学チャペル——神の栄光のために——」上掲書、3-11頁。

宮川 由衣 (みやかわ ゆい)

学院史資料センターアーキビスト

- 3) 六七二～六七四頁。
- 6 黒板勝美編『新訂増補 国史大系第四十二卷 徳川実紀』第五編、吉川弘文館(一九三二)、六〇三～六〇四頁。
- 7 黒板勝美編『新訂増補 国史大系第四十三卷 徳川実紀』第六編、吉川弘文館(一九三二)、二三二～二三三頁。
- 8 藤原道麿編「奥富士物語」巻五(一七六五)、(新編青森県叢書刊行会編纂『新編青森県叢書(六)』、歴史図書社(一九七三)、九八頁)。
- 9 前掲「奥富士物語」(一九七三)には小泉長兵衛の次男は「道悦(益か)」と記載されているが、後掲の『弘前藩庁日記』(註六)の記事によると「たね」の父親の名は「道節(説)」とあるため、本稿では「道説」と表記する。
- 10 津軽家文書『弘前藩庁日記(国日記)』元禄十三庚辰年 從十二月十日至十九日(十二月十九日の条)、御日記方(弘前市立弘前図書館蔵)。なお、道説の死亡時には「たね」と同様に四通の覚書が作成されている。
- 11 前掲『新編弘前市史 通史編三(近世二)』(二〇〇三)、六七七頁。
- 12 津軽家文書『弘前藩庁日記(国日記)』宝暦十一辛巳年 從五月到六月(六月二十八日の条)、御日記方(弘前市立弘前図書館蔵)。
- 13 小館衷三「津軽藩政時代のキリシタン類族について」(『弘前大学国史研究会』四十六号、弘前大学国史研究会(一九六六))によると、類族の死亡時、類族が町人の場合には足軽目付と御徒目付の二名で検死するが、武士の場合にはその二名の他に責任者として馬廻役や手廻役が派遣されるといふ。
- 14 付き添いの人物について、当館所蔵の資料には「小山内安貞」、『弘前藩庁日記』には「長内安貞」記されているが、単なる写し間違いか否か詳細は不明である。なお、『津軽古図書保存会文庫目録』には、筆写年代は明らかになっていないが「小山内安貞」が作成した知行帳の記載がある。
- 15 津軽家文書『弘前藩庁日記(国日記)』安永三甲午年 四月(四月十一日の条)、御日記方(弘前市立弘前図書館蔵)。
- 16 マリオ・マレガ資料(パチカン図書館蔵)は、昭和初期に日本で宣教・教育活動を行なったマリオ・マレガ(Mario Marega)神父が収集した資料群である。豊後国の宗門改めや類族制度に関する資料を中心とした四つの資料群からなっており、データベース(<https://basel.niji.ac.jp/marega/>)で公開されている。
- 17 大橋幸泰「キリシタン類族改制度と村社会―臼杵藩の場合―」(二〇一八)、『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第十四号(通巻第四十九号)、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館、三四六～三六三頁。

迫田 ひなの(さいごだ ひなの) 西南学院大学博物館学芸研究員

四月十三日丙申日 快晴

(中略)

一 寺社奉行申出候、類族矢野玄説病死に付、昨晚於本行寺、葬送両目付立合之上土葬ニ取置候旨、悴道益より申出候、此段申上旨申出之、主膳江達之、承届旨申遣之

玄説の埋葬は、目付立ち合いのもつつがなく済んだことが寺社奉行によつて報告されており、これ以降、玄説の葬儀に関する記事は見られない。

このように、複雑な規定によつて、類族ら当人はおろか、それを管理する藩も類族の範囲を正確に把握できていないことが分かる。藩は遺体や葬儀の見分など「前々之通」りに類族死亡の際の手続きを行なっていると記しているが、実際には、埋葬の立ち合いが類族側からの要請によつて派遣されるなど、手続きがきちんとは行なわれていないと言いがたい。玄説の死亡に関する記事は「たね」の事例よりも簡略化されており、覚書を作成・提出する指示や、その写しなども日記には一切見られないのである。藩は玄説を類族として認識していながらも以上のような対応を取っており、宝暦年間と安永年間とを比較しても、類族の取り扱いが徐々に厳格さを失い形骸化していく様子を知ることができる。

おわりに

貞享・元禄の類族に関する法令の発布は、幕府の禁教政策における一つの転換点であった。すなわち、寺請制度の確立や、長崎や豊後などで発生した「崩れ」による摘発を通して、キリシタンはほぼ根絶したとみなし、キリシタンの類族を管理するという次の段階に入ったことを意味する。

(110)

類族は出生、病死、駆け落ち、新縁、住所替え、改名、旅行など、人生の節目に届け出の義務が課された。京坂地方の信徒を受け入れた弘前藩にとつて類族改めは重要な課題だったのだから、類族の管理に対して細心の注意を払っているように見える。今回紹介した「たね」の葬儀に関する覚書は、例えばマリオ・マレガ資料¹⁶に含まれている十七世紀の白杵藩の類族の死亡届などと比較すると、かなり詳細なもので、弘前藩の類族に対する取り扱いの細やかさがうかがわれる。

しかし、そんな弘前藩においても、類族の管理が徐々に形式化するに従つて、類族から非類族への移行という概念が曖昧になっていくことが分かった。大橋幸泰氏によつて「類族」という属性は家ではなく個人に付加される性質だという指摘がなされている¹⁷が、同一世帯内に類族と非類族が混在するという特殊な状況ゆえに類族の管理は複雑さを増したと言える。本史料は、各藩の類族の管理体制を比較検討する上で有用な史料の一つだと言えるよう。

1 寛政十二(一八〇〇)年に作成された「弘前大絵図」南の二には本行寺と受源院を含む新寺町の様子が詳細に記録されている。弘前市立弘前図書館は、弘前藩が作成した藩政の公式記録である『弘前藩庁日記』などの所蔵史料をデータベースで多数公開している。(https://adac.jp/hirosaki.lib/top/)

2 黒瀧十二郎『日本近世の法と民衆』高科書店(一九九四)、九三〜九四頁。なお、家臣人名事典編纂委員会編『三百藩家臣人名事典』第一巻(新人物往来社(一九八七)、二一九頁)には弘前藩の九代藩主津軽寧親・十代信順に仕えた家老として知られる「笠原八郎兵衛」の名があるが、寛政六(一七九四)年に奉公見習として手廻組に入り、享和と文政年間に活躍していることから別の人物であると考えられる。また、管見の限りでは元禄年間の『弘前藩庁日記』にも「笠原八郎兵衛」の名が見られ、彼らの関係は詳らかでないものの、所縁のある人物ではないかと思われる。

3 レオン・パジェス著、吉田小五郎訳『日本切支丹宗門史』上巻、岩波書店(一九三八)、三三四〜三三六頁。

4 菅野義之助著、及川大溪補訂『奥羽切支丹史』校成出版社(一九七四)一九三〜一九八頁。

5 「新編弘前市史」編纂委員会編『新編弘前市史 通史編三(近世二)』弘前市企画部企画課(二〇〇〇)

また、貞享の法令以降、類族の死亡の届出については二季（七月と十二月の年に二回）に申し出るべきと扱われているが、報告書の内容からこれが忠実に守られていることもうかがえる。この覚書の日付は晦日だが、『弘前藩庁日記』中ではやはり二十八日の項に記載されている。

元禄の規定によれば、転宗後に出生した子が男子であっても、孫が女であれば孫までが類族となり、曾孫は類族ではないとされた。つまり、「本人」である小泉長兵衛から見て、彼が転宗したのちに出生した道説（子の養子「たね」（孫）は女性であるため、「たね」以降の子孫は男女問わず類族から外れることになる。しかし、「たね」の死から約十三年後、安永三（一七七四）年四月十一日の『弘前藩庁日記』に息子である矢野玄説に關する記事が見られる¹⁵。

四月十一甲午日 曇 午ノ刻過小雨

（中略）

一 矢野玄説病氣養生不相叶、唯今病死之旨、御目付より申出達之

一 矢野道益申立候、私親玄説儀当四月五日より疝痛相煩、色々養生仕

候得共、不相叶今朝四ツ時病死仕候に付、寺社奉行中江御断申上

候、御見分被^{開字} 仰付被下置度奉頼旨申出之、主膳江達之、願之通為

検使御手廻壺人・見分御徒目付壺人・足輕目付壺人被^{開字} 仰付旨、御

手廻組頭并大目付江申遣之、尤矢野道益江も申遣之

一 寺社奉行申立候、転切支丹類族矢野玄説儀、今朝病死仕候段、悴道

益より断御座候、先格之通御検使并御徒目付・足輕目付、死骸見分

可被^{開字} 仰付哉之旨申出之、主膳江達之、窺之通申付旨申遣之

一 寺社奉行申立候、類族矢野玄説病死に付、御検使并御徒目付・足輕

目付死骸見分別条無御座取置被^{開字} 仰付候得は、且那寺於本行寺土葬

取置申候、其節兩目付立合可被^{開字} 仰付哉、奉伺旨申出之、主膳江達

之、伺之通申付旨申遣之、兩目付之儀大目付江申遣之

（後略）

玄説は六日間ほど疝痛を患ったあと、四月十一日に死亡したことが目付と息子である道益によって報告されている。本来であれば玄説は類族ではないため、遺体の見分などにも必要はないはずだが「たね」が死亡した時と同様に寺社奉行にたいしても報告がなされ、検使ら三名の派遣が仰せつけられている。検使らは玄説の遺体と葬儀の見分を行なっているものの、傷の有無などの状態や仏具飾りに關する言及もない。一方、翌日には再び道益からの伺いが立てられている。

四月十二乙未日 曇 巳ノ下刻晴

（中略）

一 矢野道益申立候、私親玄説病死に付、御見分相済申候、依之死骸今

晩本行寺江葬申度奉伺旨申出之、主膳江達、伺之通申付旨、尤前々

之通御徒目付・足輕目付立合申付旨申遣之

一 右に付大目付江左之通

類族矢野玄説儀、病死見分相済候に付、今晚於本行寺土葬二取置

候儀、伺之通被^{開字} 仰付候、其節兩目付立合申付候間、前々之通相

勤候様御申付可有之旨申遣之

これによると、葬儀は行なったものの埋葬までは済んでおらず、道益が埋葬に關する指示を仰いでいる。これに対し、藩からは前例の通りに目付が二名派遣されることが記されている。埋葬は晩に行なわれたため、その報告はさらに翌日の記事にある。

足軽目付 成田忠左衛門印
御徒目付 黒瀧長次郎印

田村源太兵衛殿

笠原八郎兵衛殿
田村源太兵衛殿

見分書には、身体に傷がないことから間違はなく病死であること、仏具飾りがキリシタンと思われるような異常がないこと、遺言の有無や付添人などが記録されている。また、これによると「たね」の死因は八日前から患っていた「傷寒」であると明記されており、風邪やインフルエンザ、腸チフスなど、発熱を伴う何らかの病によって死亡したものと思われる。そして次の記事が、「たね」の葬儀に関する覚書である。

覚書の送り仮名などに細かい違いは見られるものの、内容や体裁は当館が所蔵する史料とほぼ完全に合致している⁴⁾。このことから、当館が所蔵する「転切支丹類族矢野玄説母たね病死二付葬礼見届之覚」が成田・黒瀧らから提出されたのち、御日記方によって書き写されたのではないかと思われる。「たね」の遺体は葬礼のち本行寺に土葬されたとあり、玄説ら四名が付き添ったという。覚書の日付は死亡日の翌日である二十九日になっているが『弘前藩庁日記』中では二十八日の項に記載がある。最後に見られる記事は、寺社奉行による覚書である。

一 御徒目付・足軽目付申出候は、

転切支丹矢野玄説母たね病死に付葬礼見届之覚

一 寺社奉行申出候は、転切支丹類族病死之覚

一 右葬礼於本行寺、六月廿九日七時過執行申候、宗旨法花宗御座候、

佛具飾平生違無御座候

転切支丹小泉長兵衛孫たね、右は矢野道節養娘御座候、右たね義当已六月廿八日、七拾五歳にて病死、旦那寺法花宗本行寺おゐて死骸取置申候

一本行寺代僧寺庵受源院并平僧四人、右引導は受源院相勤申候、葬礼

死骸は同寺囲之内江土葬仕候、葬礼寺僧諸事取扱之様子、常体相替

右類族病死は二季七月十二月御届之部御座候、御両所江御無判之御書付にて御断被遊候筈御座候に付、右之趣申上候、以上

儀無御座候

一 葬礼附添之面々、矢野玄説・長内安貞・和田左傳次・三浦吉兵衛罷

越申候

成田喜八郎印判書判
松田恵次郎印判書判

右之通、私共見届相違無御座候、以上

宝曆十一辛巳年六月廿九日

笠原八郎兵衛殿
田村源太兵衛殿

足軽目付 成田忠左衛門印

御徒目付 黒瀧長次郎印

(後略)

笠原八郎兵衛殿

これによると、「たね」は矢野道説の養女として迎えられたことで、転びキリシタンであった小泉長兵衛の孫になったという経緯が記されている。

の子として、「本人同前」ではなく「類族」の扱いを受けたのだろう。実際に、元禄五（一六九二）年には類族として町奉行宅へ呼び出された者の中に矢野道説の名が挙げられており¹¹、そのため彼の娘である「たね」も同様に類族として扱われることとなった。

次に、この報告書がどのような手順に従って作成されたのかについて見てみよう。史料作成の経緯に関しては、『弘前藩庁日記』に「たね」が病死してからの事柄が詳細に記録されている¹²。

六月二十八乙未日 曇

（中略）

一 矢野玄説申立候、私母病氣之処、今朝病死仕候、尤類族之儀御座候間、寺社奉行江も御断申上候、依之御見分被^{兩字} 仰付度旨申出之、願之通申付旨申遣之

一 寺社奉行申立候類族矢野玄説母病死仕候旨断御座候、先格之通御檢使并御徒目付・足輕目付見分可被^{兩字} 仰付候哉、奉伺旨申出之、主水江達之伺之通檢使御手廻耆人・両目付耆人宛申付旨申遣之、御手廻組頭并大目付江も申遣之

最初に見られる記事は、玄説から母たねの死亡に関する届け出があったというものだ。これを見ると、類族が死亡した場合には、死亡が確認された当日に子が寺社奉行などに届け出を行なっていることが分かる。遺体の見分には、先例に倣って「御檢使」「御徒目付」「足輕目付」の三名が派遣されており¹³、次の記事には檢使である竹中忠左衛門による見分書と、足輕目付の成田忠左衛門と御徒目付の黒瀧長次郎による連名の見分書の計二通が差し出されている。

一 軛切支丹類族矢野玄説母たね病死に付、死骸見分書付差出候趣左之通

一 檢使御手廻竹中忠左衛門申出候は、軛切支丹類族矢野玄説母たね病死に付死骸見分之覚

一 右たね死骸見分仕候処、惣身疵無御座、病死紛無御座候

一 宗旨法花本行寺善遊と申出家附添、位牌佛具常体相替義無御座候

一 右たね今年七拾五歳罷成、当月廿日より相煩病氣傷寒にて、御医者伊崎三隆町医山辺玄達薬用致候得共、養生不相叶、今朝病死仕候由申候

一 親類矢野玄説姉、長内安貞母附添罷有候

一 末期申置候義有之哉と相尋候処、何も申候由申候

一 御徒目付黒瀧長次郎・足輕目付成田忠左衛門、右兩人拙者一所罷越見分仕候

右之通相違無御座候、以上

宝曆十一辛巳年六月廿八日 竹中忠左衛門印

吉村場左衛門殿

一 御徒目付・足輕目付申出候は、軛切支丹類族矢野玄説母たね病死に付、死骸見分之覚

一 右死骸檢使竹中忠左衛門罷越、私共見分仕候処、惣身疵類等無御座候、病死紛無御座候

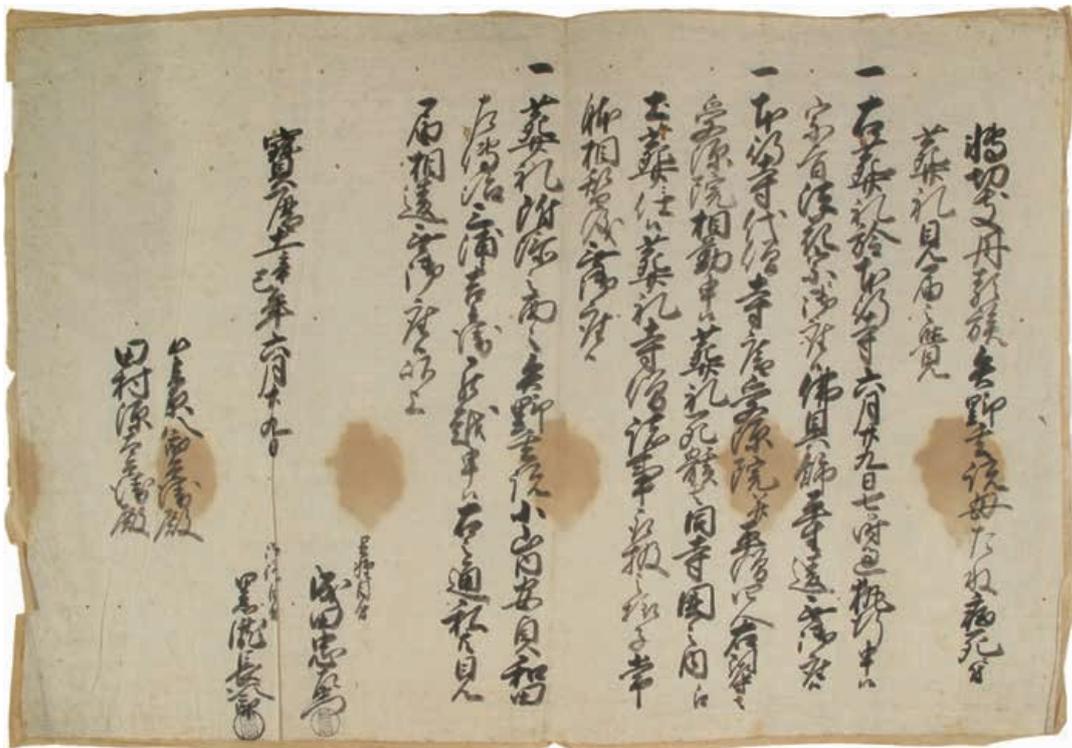
一 宗旨法華本行寺檀那御座候、佛具飾平生違無御座候

一 右たね今年七拾五歳罷成候、当月廿日頃より傷寒相煩、御医者伊崎三隆町医山辺玄達薬用仕候得共、養生不相叶、今朝五時病死仕候由

一 右死骸附添罷有候親類、玄説姉附添罷有候
右之通私共見届相違無御座候、以上

行なわれた最後の火刑が寛永二十(一六四三)年であることから、父であ

る小泉長兵衛がそれ以降に転宗したとは考えにくいため、道説は転宗以後



轉切支丹類族矢野玄説母たね病死二付
葬礼見届之覚

- 一 右葬礼於本行寺、六月廿九日七ツ時過執行申候、
- 宗旨法花宗二御座候、仏具飾平生違無御座候
- 一本行寺代僧寺庵受源院并平僧四人、右引導は
- 受源院相勤申候、葬礼死骸は同寺圍之内江
- 土葬二仕候、葬礼寺僧諸事取扱之様子、常
- 体相替儀無御座候
- 一 葬礼附添之面々、矢野玄説・小山内安貞・和田
- 左傳治・三浦吉兵衛罷越申候、右之通私共見
- 届、相違無御座候、以上

寶曆十一年六月廿九日

笠原八郎兵衛殿
田村源太兵衛殿

足輕目付 成田忠左衛門 印
御徒目付 黒瀧長次郎 印

轉切支丹類族矢野玄説母たね病死二付
葬礼見届之覚

- 一 右葬礼於本行寺、六月廿九日七ツ時過執行申候、
- 宗旨法花宗二御座候、仏具飾平生違無御座候
- 一本行寺代僧寺庵受源院并平僧四人、右引導は
- 受源院相勤申候、葬礼死骸は同寺圍之内江
- 土葬二仕候、葬礼寺僧諸事取扱之様子、常
- 体相替儀無御座候
- 一 葬礼附添之面々、矢野玄説・小山内安貞・和田
- 左傳治・三浦吉兵衛罷越申候、右之通私共見
- 届、相違無御座候、以上

寶曆十一年辛巳年六月廿九日

笠原八郎兵衛殿
田村源太兵衛殿

足輕目付 成田忠左衛門 印
御徒目付 黒瀧長次郎 印

このように、類族の範囲は男女によって取り扱いが異なっている。転宗後の子が男子であった場合には孫の性別にかかわらず孫も類族に含まれるが、転宗後の子が女子且つ孫も女子であった場合には、孫は類族から除かれ、転宗後の子のみが類族として扱われる。つまり、同世代の親族であっても類族と非類族が混在するという複雑な状況が発生したのである。

二 史料の概要

史料は後世に裏打ちがなされており、法量は三十二・〇糶×四十五・五糶である。また、いつの時点で付着した汚れかは判断できないが、史料の中央下部には等間隔で連続した染みが見られることから、もとは縦に折りたたんだ状態で保管されていたと考えられる。作成者は葬儀の検使として派遣された足軽目付の成田忠左衛門と御徒目付の黒瀧長次郎で、職位の記載はないものの、宛先は大目付である笠原八郎兵衛と田村源太兵衛となっている。成田と黒瀧の名前の下にはそれぞれの印が捺されているため、日付の通り、宝暦十一（一七六一）年に報告書の原本として作成されたものだろうと予測される。

凡例

- 一、刊行に際しては原本の体裁を表すように努めたが、文字の位置等については多少の修正を加えた。
- 一、原則として常用漢字を用いた（地名・人名の固有名詞を除く）。
- 一、変体仮名は、原則として「江」「而」のみを使用した。
- 一、平仮名の「者」は「は」、「茂」は「も」、「与」は「と」とした。
- 一、句読点は筆者による。
- 一、（ ）内は筆者の注。

三 関係資料について

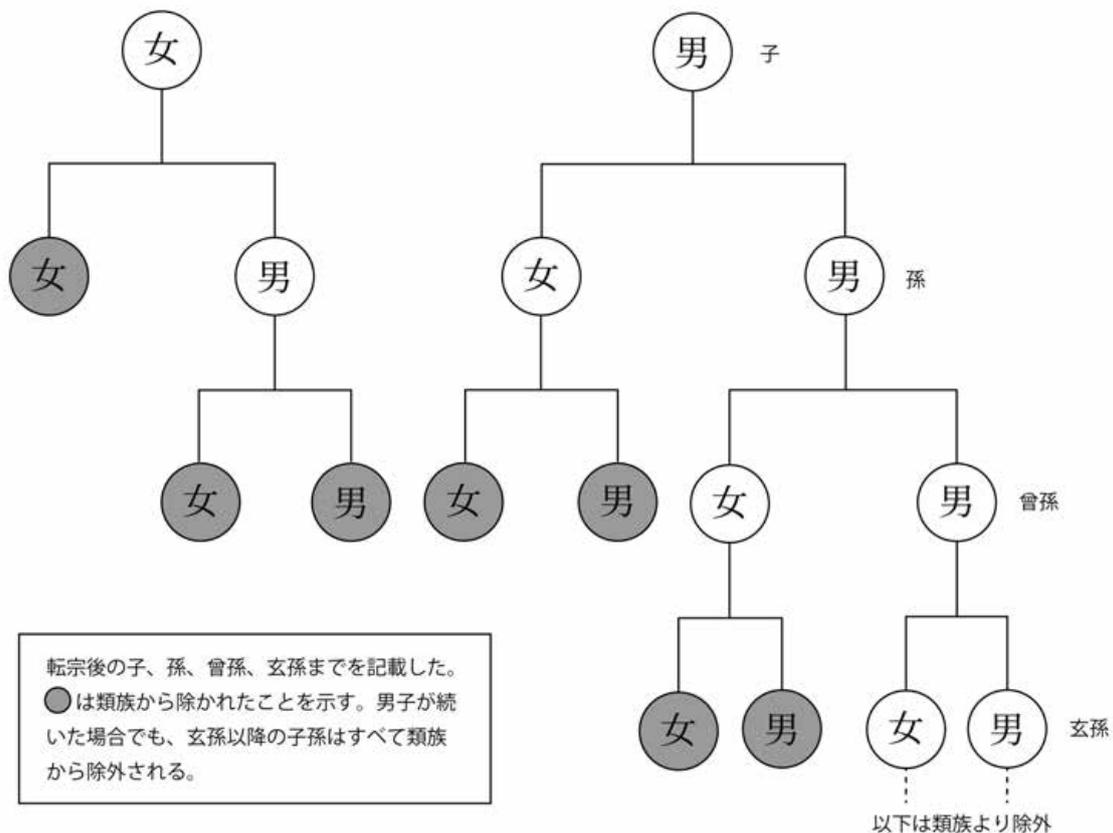
それでは、切支丹の類族として管理される「たね」やその息子である「矢野玄説」とは一体何者なのだろうか。これに関する手がかりは、藤原通磨が弘前藩中興の祖である四代信政の事績を編纂した『奥富士物語』に見ることができる。⁹これによると、

予或時矢野の累書見たり。先祖矢野兵衛門元俱は松平越後公に仕へ、知行三百石にて岡嶋壱岐組にて相勤正保二年死す。其子医業にて矢野元与元行といふ。此人寛永八年二月廿八日桂光君御代金十両に五人扶持被下、御近習医相勤、尤其業勝れ御頼にて参候とかや。后年隠居して隠居料俵子五十俵被下、元禄五年死す。伝に、隠居后何にても願無きと有しに、何も願は無御座候。登城の砌、下乗迄駕籠御免被仰付度旨申上、願之通りにて有之由、其子道悦^益元智は智養子にして、実小泉長兵衛次男也。部屋住之内天和二年十一月に金式枚三人扶持被下置、后元禄十三年頃死去、其子道益其子当玄悦と言、此家伝切支丹也。小泉よりの血統か本国越前福井と云ふ。

とあり、矢野家の先祖である矢野兵衛門は越前高田藩の松平光長の家臣・岡嶋壱岐の配下だったという。その子である矢野元与は医師としての腕を買われ、寛永八（一六三二）年に弘前藩に御近習医として出仕したようだ。そして「たね」が類族として管理される原因となった人物が、越前福井から出た転びキリシタン・小泉長兵衛の次男で、元与の婿養子となった「道節^節」である。⁹弘前藩の御日記方が作成している『弘前藩庁日記』によると、道説は元禄十三（一七〇〇）年十二月十九日に五十四歳で死亡している¹⁰ことから、生年は正保四（一六四七）年頃と推定される。津軽で

父母転宗せざる以前の子、幼して父母にはなる、といふとも本人にかはらず。其ゆへは、出生のとき其父母功德の水といへるをそぎ、己が宗徒になしかたむるによればなり。その子は男女ともに同じかるべし。孫より男子つゞき来るときは、耳孫まで類族たるべし。転ぜしの子は、男子続き来るときは玄孫まで類族たるべし。転後の孫まで男にて、曾孫にいたり女ときは、曾孫まで類族たるべし。玄孫は類族を免るべし。転後の子男たり共、其孫女ならば、孫まで類族たるべし。曾孫は免るべし。転後の子女にて、孫は男たらば類族にいたり、孫女ときは免るべし。本人并に本人にひとしきものより忌服うくべき親族、その他舅姑婚媿は類族たるべし。(後略)

と規定されている。元禄の法令で転びキリシタン本人の規定が除外されたのは、新たな転びキリシタンが出る恐れがほとんどなくなったと判断されたためだろう。そして新たに設けられたのは、「類族」として管理される子孫の範囲に関する規定であった。これによると、転びキリシタンが転宗する前に出生した子(本人同然)の場合、孫から男子が続く場合には耳孫(五世代)までが類族とされるのに対し、転宗後に生まれた子の場合には、男子が続く場合でも玄孫までが類族とされた。転宗後の子の子孫で類族として扱われる範囲を図示すると以下の通りになる。



西南学院大学博物館所蔵

「転切支丹類族矢野玄説 母たね病死二付葬礼見届之覚」

迫田ひなの

はじめに

西南学院大学博物館は、キリスト教主義教育という建学の精神に基づき、キリスト教史を体系的に提示するコレクションの形成を目指すという理念のもとで資料収集を行なっている。その中には日本におけるキリスト教の伝来と中近世の禁教政策、そして近代の信仰の解禁に関する資料が多数収集されている。

本稿で紹介する「転切支丹類族矢野玄説母たね病死二付葬礼見届之覚」は、宝暦十一（一七六一）年に作成された、転びキリシタンの類族である「たね」の葬儀に関する報告書である。作成地に関する情報は記されていないものの、史料中に見える「本行寺」と「受源院」は青森県弘前市に現存している¹。さらに、宛先に記された「笠原八郎兵衛」は、非番の用人兼御用掛として弘前藩初の刑法典である安永律（「御刑罰御定」）の制定に関わった人物²と同一であると考えられることから、本資料が弘前藩で作成された史料であることはほぼ間違いないと思われる。

一 弘前藩におけるキリスト教史

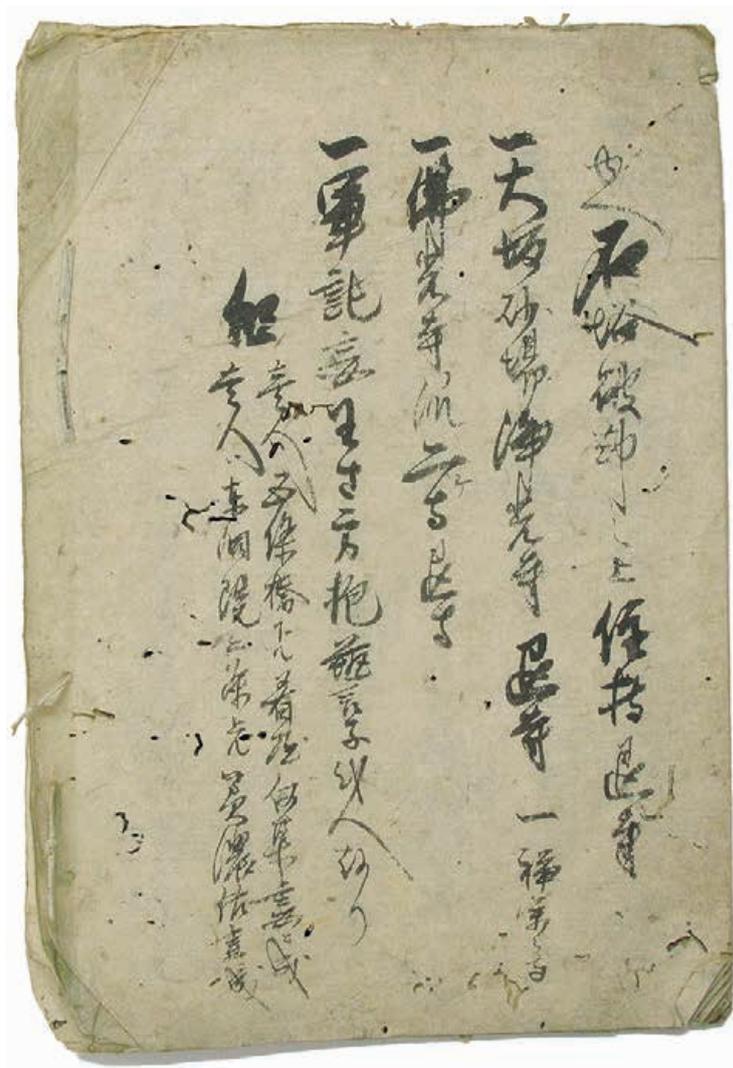
豊臣政権を引き継いだ江戸幕府は、当初は積極的な禁教政策を行なっ

いながったが、慶長十七（一六一二）年の岡本大八事件で家康の周囲に多数のキリシタンがいることが発覚したことを契機に、幕府の直轄地に禁教令が発布された。翌年には全国でキリスト教の信仰が禁じられたのだが、その際、京都・大坂地方の信徒のうち棄教しない七十一人が慶長十九（一六一四）年の春に蝦夷地及び津軽へと追放された³。

当時の弘前藩主は二代津軽信枚^{つがるのふむら}で、彼は父である為信によって洗礼を受けさせられた元キリシタンであった。この時、奥羽地方は宣教師による積極的な伝道はまだ行なわれておらず、京坂地方から追放された信徒以外にキリシタンは殆ど存在しない状態であったと考えられる⁴。

しかし、京坂地方の信徒たちは追放から三年のうちに領民へと入信を勧めるようになり、また信徒獲得のため宣教師の往来が行なわれたことでキリシタンが増加した。その結果、元和（一六一六）年には信徒六名の火刑が行なわれ、禁教政策が強化された三代将軍家光の治世には寛永元（一六二四）年にトマス・スケザエモンが火刑に処されたのを皮切りに、同三年には十一人が津軽で死罪となっている。さらに島原・天草一揆の翌年、寛永十五（一六三八）年には津軽で七十三人を火刑に処し、同二十年に火刑に処された五右衛門が津軽における最後の殉教者となった⁵。

このように、幕府による禁教令は弘前藩でも遵守されているが、それは転びキリシタンの類族の扱いに関しても同様であった。貞享四（一六八七）年六月二十二日に出された類族に関する法令⁶には、転びキリシタン本人が転宗する以前に出生の子は性別を問わず本人と同様に扱われ、転宗後に生まれた子及びその子孫は類族として取り扱うことが規定されている。また、転びキリシタン本人と本人同前の者が死亡した際には遺体を塩漬けにすること、類族の者が死亡した際には検死のち火葬することなどが明記されている。元禄八（一六九五）年六月十三日の法令⁷では、類族に関する規定がさらに細分化されており、『徳川実紀』によると、



ゆへ、石塔破却之上、住持退寺

一大坂砂場浄光寺退寺 一福万寺

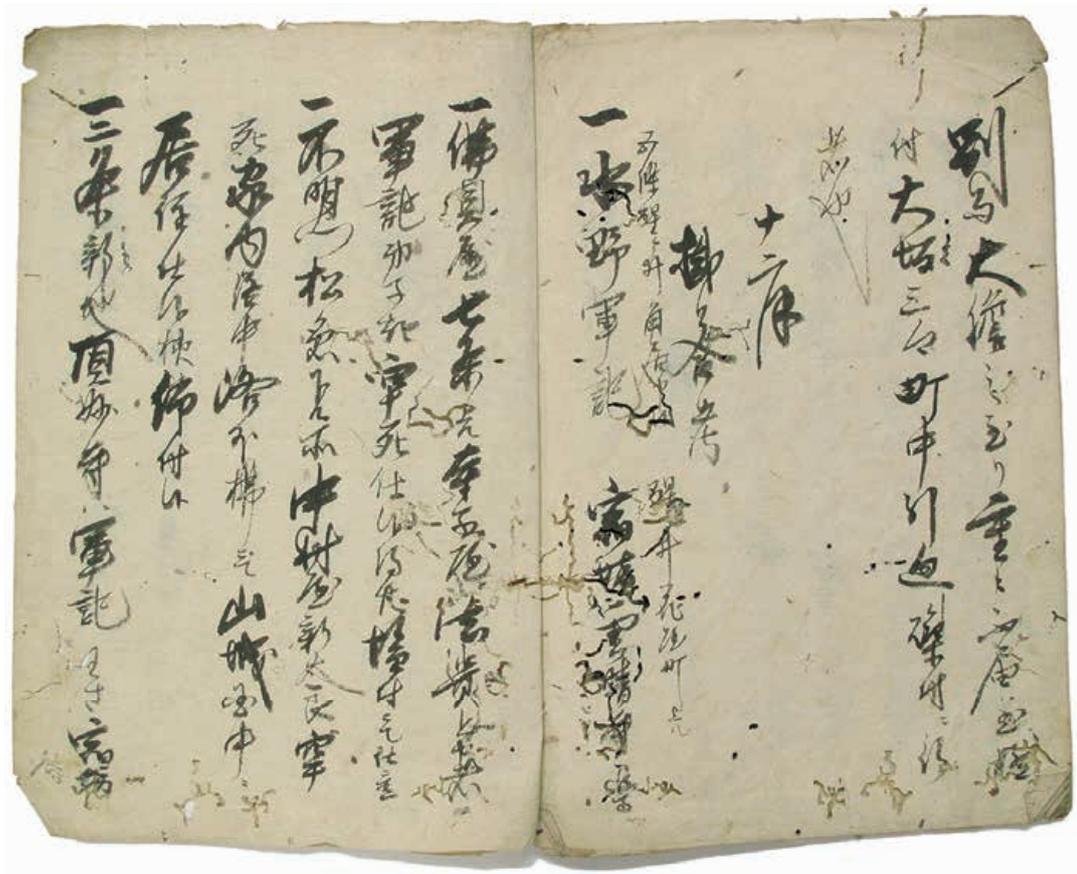
一仏光寺流二ヶ寺退寺

一軍記妾わさ方抱芸子式人あり

但 老人五條橋下ル着屋何某妾二成

老入東洞院二条上ル美濃佐妾二成
(屋の誤り也)

鬼束 芽依 (おにつか めい) 西南学院大学博物館学芸研究員



別々大胆之至り、重々不届至極ニ付、大坂三郷町中引廻し礫付二行者也

者也

十二月

掛答考

五條醒ヶ井角二居申候 醒ヶ井花屋町上ル

一 水野軍記

宿坊雲晴寺退寺

一 仏具屋七条上ル寺子屋法貴と申者、

軍記弟子於牢死仕候得共、礫付にて仕置

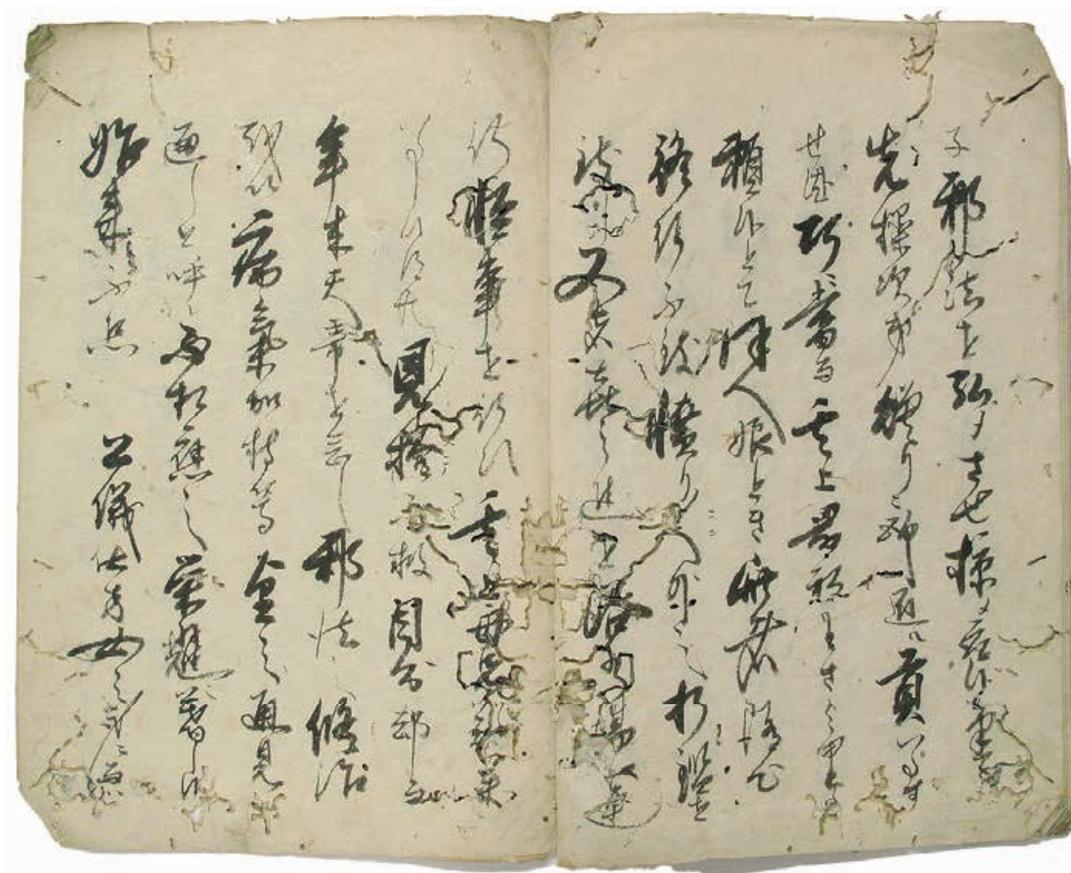
一 不明門松急下ル所中村屋新太郎牢

(原の誤りカ)

死、家内洛中洛外払にて、山城国中二

居住仕候様仰付候

一二条新地頂妙寺ハ、軍記・わさ宿坊



子邪法を弘メさせ、掠メ取候金子、
 先操次第贈り二師匠へ貢いたす
 せ□巧二当テ、其上最初わさと申もの
 頼候とて、同人娘とき此者随心
 修行不致憤り、人外之折鑑を
 致し、又は崑之進を浴水場へ連
 行、怪事を行ひ、其上母兄難義
 いたし候得共見捨、不救、自分却テ
 年末天帝を念し、邪法之修治
 を以病氣加持等、望ミ通見
 通しと呼レ、不相応之榮耀二暮し候
 始末、不恐　公儀仕方、女之身ニテハ



上、軍記か伝受之通、猶又きぬへ
 蜜授(密カ)いたし候二付、同人ヨリ又々さのへ
 秘授ニおよひ、同人終ニ邪術ニ
 通し、大坂表ニおひて弟子を拵候、
 先ニ遣ひ、無跡形義を申、加持等
 を為勸(進カ)、人の心を取失ひ、差出し
 候過分之金銀銭・衣服を掠め、
 さのヨリ右金子きぬへ配当いたし候
 二付、同人義ハ師恩を勤むんとて、
 此者へ右之内を相送り、貰ひ候上、
 さのかすめとり候金子之義不存トの
 申分難取用、兼テきぬへと申合、弟



下ゲニ侘シ、渡世を始め、軍記差

図ニテ、異成神諡オクリを此者取拵候、

神躰無之二付、稻荷之社之号ニいたし、

其上染物異カニも美成紋を付、天帝

画像之代ニ仕置在之三像之画

を表具致シ所持、追々此者病

氣加持・吉凶之判断的中

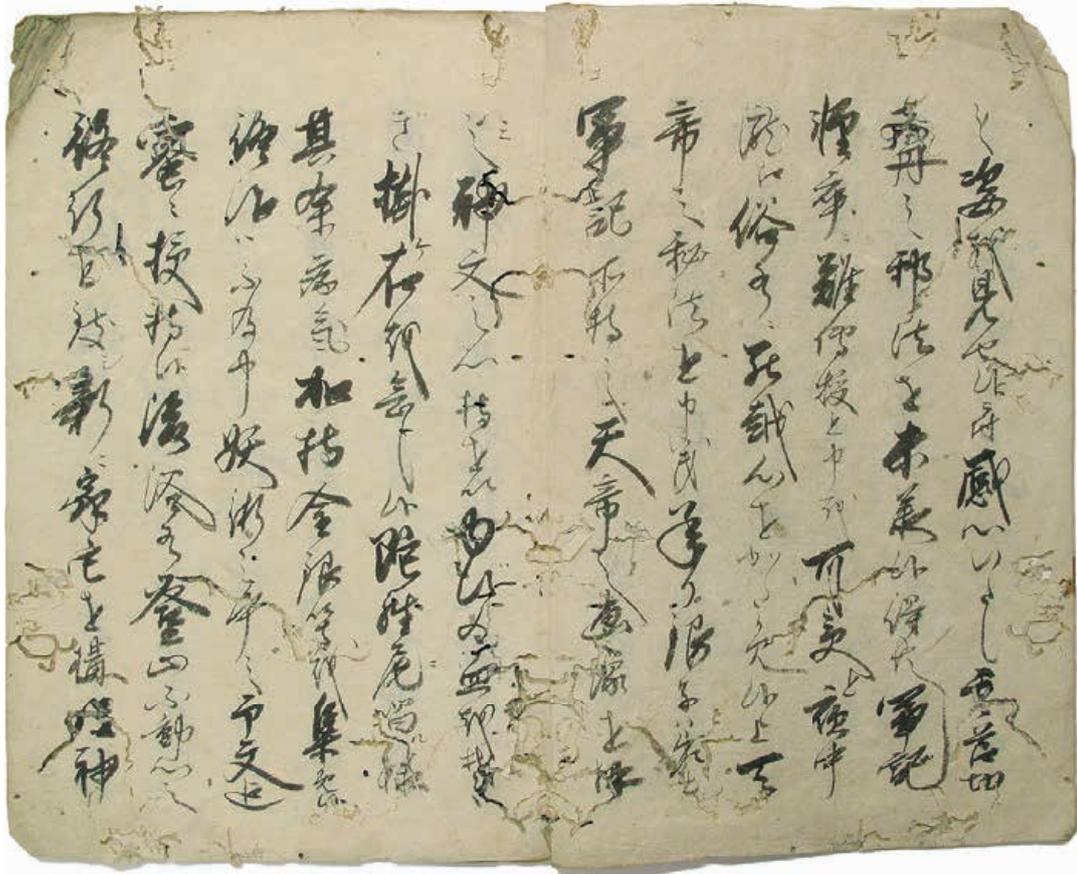
いたし候を、きぬと申女うらやミ、

秘術受度旨申二付、登山・俗水俗カ

修行をおしえ、不動心を見究、

誓をいたし、軍記二頼ミ、きぬニも

天帝之画像二血をそ、ぎ掛させ候



之姿を見せ候二付、感心いたし、其節切

支丹之邪法を未承候得共、軍記

輕卒二難伝授と申を可受と、夜中

滝へ俗水(俗カ)二罷越、心をかため候上、天

帝之秘法と申義承り、銀子差出、

軍記所持之天帝之画像を拜

ミ、之神文之心持を以、ゆびの血をそ、

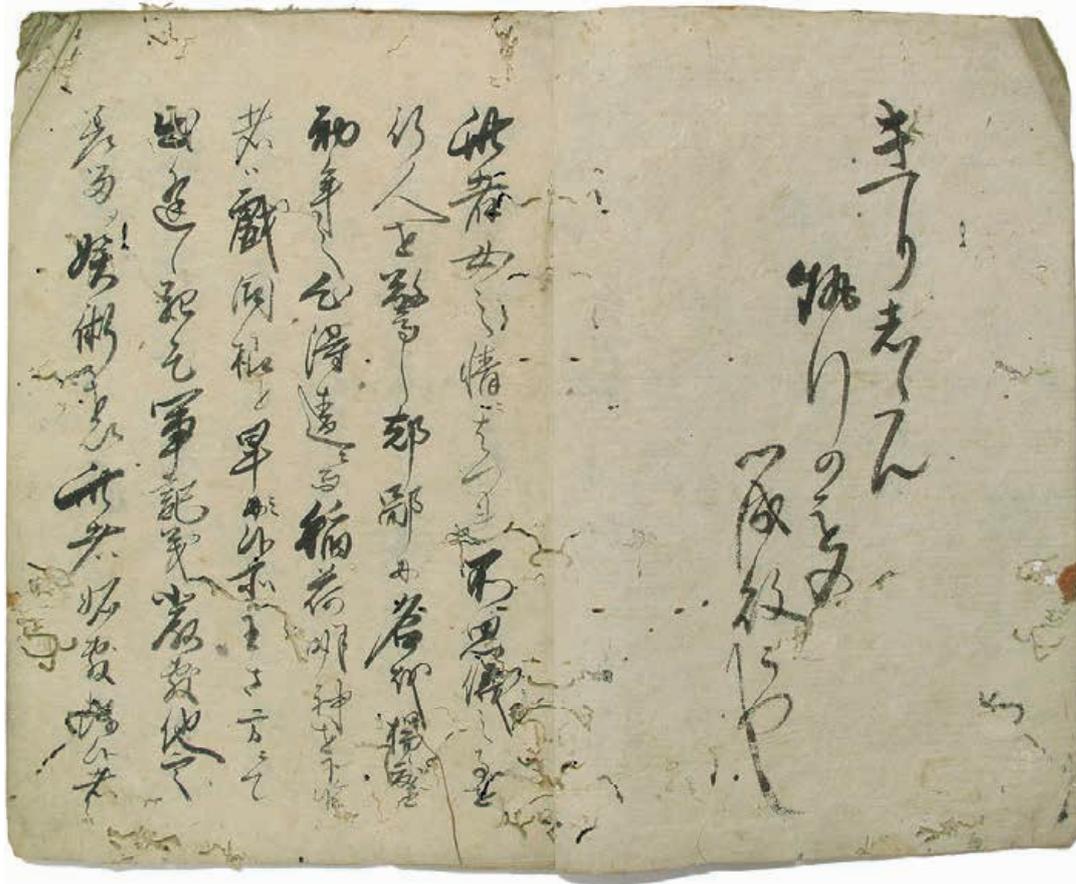
ぎ掛ケ、右を念し候、陀羅尼二唱ル様、

其余病氣加持金銀等を集め候

修治ハ不及申、妖術之中之印文迄

蜜(密カ)二授持候後、浴水登山不動心之

修行を致シ、新二家宅を構、(虫損、明カ)□神



きりしたん

執行のことの

御成敗二也

此者、女之情ニはつれ、不思議之事を

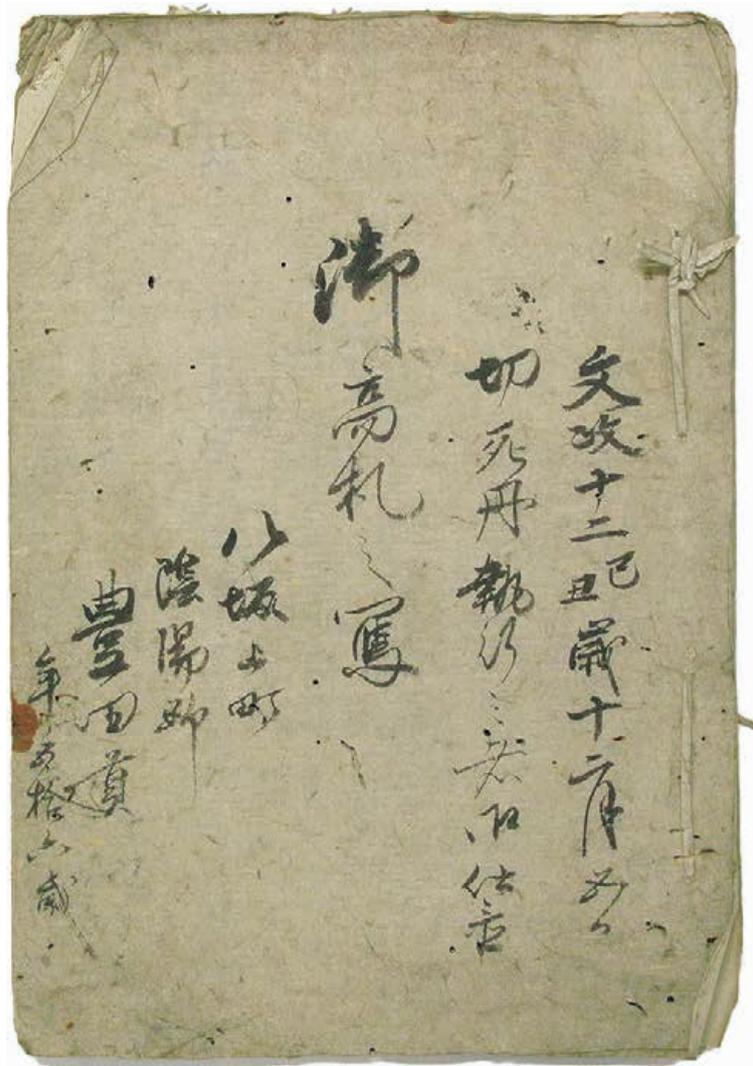
行、人を驚し、都鄙に名を揚度と、

初年之心得違ニテ、稻荷明神を下ケ候

者ハ、戯同様と卑ミ候所、わさ方にて

出逢候死亡軍記義、嚴敷他言

差留メ、妖術を以此者妬敷（出損、存カ）候者



文政十二己丑歳十二月五日

切死丹執行之者御仕置

御高札之写

八坂上町

陰陽師

豊田貢

年五拾六歳

展示や刊行物として還元していきたい。

註

- (1) 宮崎ふみ子『京坂キリシタン一件と大塩平八郎』史料と考察」三頁。
 (2) 宮崎ふみ子氏らの指摘によれば、これらは『切支丹宗門来朝実記』のようなキリシタン実録類にみられる語句で、水野軍記が「切支丹」に関する知識をキリシタン実録類から得ていた可能性があるという。しかしながら、水野軍記による修行は深夜に登山をおこなう、滝の落ちる場所で浴水をするなど、日本の伝統的宗教との共通性もあり、様々な宗教の要素が混在している。宮崎ふみ子『京坂キリシタン一件と大塩平八郎』史料と考察」一八～一九頁。
 (3) 宮崎ふみ子『京坂キリシタン一件と大塩平八郎』史料と考察」五～六頁。
 (4) 宮崎ふみ子『京坂キリシタン一件と大塩平八郎』史料と考察」六一頁。
 (5) 大橋幸泰『史料紹介「大坂切支丹一件」』（聖心女子大学図書館蔵）八一～八二頁。

参考文献

- 大橋幸泰 二〇〇一「史料紹介 大坂切支丹一件（聖心女子大学所蔵）」キリシタン学研究会『研究 キリシタン学』第4号、八〇～一二頁。
 宮崎ふみ子編 二〇二二『京坂キリシタン一件と大塩平八郎』史料と考察 吉川弘文館

凡例

以下は、西南学院大学博物館が所蔵する「文政十二己丑歳十二月五日切死丹執行之者御仕置御高札之写」の翻刻である。

- 一、本文の翻刻にあたっては、基本的には原文の形を尊重した。
- 一、漢字の字体は、原則として常用の字体を使用し、俗字・異体字・略字などは通用の字体に改めた。
- 一、カタカナとひらがなの別は底本のままとした。
- 一、助詞として使用されている江（へ）、而（て）、兮（ヨリ）は、カタカナで表記した。
- 一、読みやすくするために、適宜句読点を施した。
- 一、難読箇所は□で示した。ただし、「邪宗門一件書留」（慶応義塾大学図書館蔵）「邪宗門吟味書」（東京大学大学院法学政治学研究所附属近代法政史料センター明治新聞雑誌文庫蔵）「大坂切支丹一件」（聖心女子大学図書館蔵）の該当箇所と対照し、難読箇所に相当する文字が推定できたものは、（ ）内に補った。
- 一、誤字や誤写と思われる箇所は「邪宗門一件書留」「邪宗門吟味書」「大坂切支丹一件」の該当箇所と対照し、正しいと推定される表記を（ ）内に補った。

「大坂切支丹一件」(聖心女子大学図書館蔵)が挙げられる。

当館が所蔵する「文政十二己丑歳十二月五日 切死丹執行之者御仕置御高札之写」は、大きく二つの内容に分けることができる。前半は豊田貢に関する記述で、「邪宗門一件書留」「邪宗門吟味書」「大坂切支丹一件」の「黄紙」写し部分と比較すると、細かい表現の違いや誤字があるものの、内容が酷似している。「黄紙」は被疑者ごとに一点ずつ作成され、各被疑者の「吟味詰りの口書」に下げ札として添付されていたと推測されている⁽⁴⁾。後半は、京坂キリシタン一件の関係者の宿坊などに対する処罰の内容が八件記されているが、抜粋された基準については不明である。

京坂キリシタン一件からみえるキリシタンイメージ

京坂キリシタン一件が起こった文政十(一八二七)年は、キリシタンは一般的には過去の事象であり、キリシタン実録類や島原・天草一揆実録類に代表されるような、創作物の中の登場人物であった。キリシタン実録類のなかでは、「ばてれん」(外国人宣教師)はかつて日本を征服するために来日し、人心を操ろうとしてさまざまな妖術で惑わせ、混乱を招いた存在として描写されている。宣教師らが日本を追放されてからはすでに約二百年が経過しており、実際のキリスト教について知ることもかなり難しかった。そのため、民衆のほとんどはキリシタンが実在しているとは思っていなかっただろう。また、キリシタン実録類などに描写されたキリシタンを、そのままキリシタンに対するイメージとして持っていたと考えられるため、怪しい修法を行って人々を惑わせる行為とキリシタンを結び付けやすかったと考えられる。そして怪しい修法がキリシタンのものではないと否定する根拠となる知識もなかった。

軍記や貢をはじめとした事件の関連人物たちが、キリシタンとしてキリスト教を信じていたかどうかは、実際のところ誰にも分からなかったはず

である。実際、幕府評定所では貢たちを「切支丹」として処罰していか議論されたという。また、さのの供述には幕府にとって都合の悪い部分があった。さのの供述によれば、さのは正月の長崎で旅行者にも絵踏みをさせることを聞き、一度天帝の像を拝みたいと思い、文政四(一八二二)年一月に長崎で絵踏みをおこなっている。真の信仰心があれば、絵踏みは許されるとの考えであった。この考えが幕府にとっては問題で、真の信仰心をもって踏めば許されるのであれば、幕府がおこなっている踏絵制度は意味がないということになる。そのため、結局は事件の主要人物たちを「切支丹」として処分したうえで、吟味書のこの部分を削除している⁽⁵⁾。

さて、そのような社会状況のなかで、キリシタンが集団で逮捕・処刑されたという本事件は大衆にかなり衝撃を与えたものと考えられる。同時に、キリシタン実録類に書いているようなキリシタンイメージが実際のものであるという裏付けにもなり、キリシタンつまりキリスト教信者に対する大衆の偏見の目も大きくなったと考えられる。キリスト教信者に対する誤ったイメージによる偏見は、明治時代に入ってキリスト教の再布教が始まった後も続いていったことが知られている。本史料を含む京坂キリシタン一件に関する史料群についての研究は、江戸時代から現代まで続く大衆の誤ったキリシタンイメージの形成過程の一端を明らかにすることができると。さらに、過去の事実に対して誤ったイメージや「事実」を流布するということは、近年問題視されている歴史修正主義にもつながる事象である。

当館は、キリスト教主義教育の大学に附属する博物館として、日本におけるキリスト教の歴史の明るい部分のみではなく、キリスト教やその信者に対する大衆の偏見や蔑視、虚構系キリシタン資料などの誤ったキリシタンイメージに関する歴史についても、調査研究や展示を通して伝えていく必要があると考える。本史料紹介に続き、今後も同様の調査研究を続け、

西南学院大学博物館所蔵

「文政十二己丑歳十二月五日

切死丹執行之者御仕置御高札之写」

鬼束 芽依

解題

京坂キリシタン一件の概要

本史料は、文政十（一八二七）年に京都・大坂で「切支丹」らが逮捕され、文政十二（一八二九）年に処罰された事件の中心人物である「豊田貢」^{みつき}に関連するものである。本事件は「大坂切支丹一件」「京坂切支丹一件」などとして知られている。本稿では宮崎ふみ子氏による表記に基づき、「京坂キリシタン一件」とする。

京坂キリシタン一件は、文政十（一八二七）年に大坂三郷付近で起こった金品搾取事件を発端とする。大坂町奉行所の与力・大塩平八郎らが調査をおこなない、以後七月までに関係者たちが捉えられ、吟味がおこなわれた。はじめに捕らえられたさのの取り調べから、事件の背後に豊田貢という老女の存在が判明した。

豊田貢は、安永三（一七七四）年に越中国荒間村で生まれ、一二、三歳のころから下女奉公を勤めた。寛政九（一七九七）年、京都二条新地の明石屋いわ方で尾上として遊女となり、その後土御門配下の陰陽師・斎藤伊織と結婚した。文化三（一八〇六）年ごろには、伊織に習って易占・稲荷明神下げで開業したという。文化七（一八一〇）年九月、伊織が出奔し、糸屋わさの茶屋に寄寓した。そしてわさの紹介で水野軍記に入門したとさ

れる。

水野軍記は、公家や官家に祐筆として奉公する傍ら、弟子を集めて「切支丹」の教義や修法と称するものを伝授していた。その内容は主として、「天帝如来」を崇拜し、「センスマルハライソ」と唱えることであつた。²貢は、軍記からの指示で夜中に登山をする・滝の落ちるところで浴水をするなどの修行をおこなつた。

貢は約一か月の修行のち軍記に認められ、天帝の画像に血を注ぎかける入信儀礼をおこなない、修法や秘術を伝授された。その後、八坂上町に古家を買ひ、表向きは稲荷明神の託宣として加持祈祷・吉凶判断をおこない、見返りとして金品を受け取つていた。

この密かな修法は、貢と同じような境遇の女性であつたきぬやさのに受け継がれていった。彼女らも、もともと大坂で易占・稲荷明神下げなどをおこなつており、修法を伝授された後は易占・稲荷明神下げの見返りとして受け取つた金品の一部を貢に贈ることもあつたという。京坂キリシタン一件の発端となつた金品搾取事件は、さのがこの修法を広めるためにおこなつた資金稼ぎが元となつた。結果として、貢をはじめとした事件の主要人物はキリシタンとして処分され、文政十二（一八二九）年十二月五日に大坂三郷引廻しのうえ磔刑された。以上が京坂キリシタン一件の概略であるが、事件の詳細とその顛末については、紙幅の都合上割愛する。

本史料の構成

京坂キリシタン一件に関する史料は口書・吟味伺書・評議書・下知書・達書・見聞記など、さまざまなものが伝存しているという。³もつとも基本的な史料として、捜査・司法を担当した機関による公的文書の写しである「邪宗門一件書留」（慶応義塾大学図書館蔵）、「邪宗門吟味書」（東京大学大学院法学政治学研究科附属近代法政史料センター明治新聞雑誌文庫蔵）、

西南学院大学博物館研究紀要

第12号

発行日 2024(令和6)年3月20日

発行 西南学院大学博物館
〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号

印刷 大同印刷株式会社
〒849-0902 佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20
